
フィクション

神風紅生姜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フィクション

【Nコード】
N1382Y

【作者名】
神風紅生姜

【あらすじ】
これは宇宙世紀に生まれた無名の作家が書き上げた物語。

何処か現実味を帯びたそのストーリーはまるで預言書か…

果たして歴史上の真実になりうるか否か。

それを知る者はいない…

序章（前書き）

“はじめに”

この作品は某ロボットアニメの設定を多分に借用しておりますが、作者である私の理念で故意に原作設定に忠実な作品にしてません。

よって『二次創作』作品に程近いカテゴリーではありますが『1. 5次創作』作品である事をあらかじめ御理解の上で楽しんで頂きたい所存です…

序章

日当たりが悪く薄暗い部屋に本のページをめくる音だけがペラペラと響く。

「もう終わるか…」

男は静かに本を閉じる。

時計を見ると時刻はもう昼を過ぎていた。

あの店はもう開店してるので散歩がてら別の本を買いに行こう、あの埃っぽい店に。

男は黒革のソファから立ち上がると丸テーブルの上に置いてあったマグカップを手にとり、少しだけ残ったブラックコーヒーを一気に飲み干した。

クローゼットに向かう、中からグレーのジャケットを取り出して羽織ると、その姿は彼の実齡とは不釣り合いに老け込んだ印象になる。カウンターに置いてある財布や鍵をポケットに入れて玄関へ、履き古した茶色い革靴に足を滑らせると男はワンルームの部屋のドアを開ける。

表に黒いスーツを纏った体格のいい男。

「出かける」

「お車は？」

「近くを散歩するだけだ」

「お供します」

「本を買いに行くだけだ、それにお前は人相が悪い」と苦笑交じりに言うと「では、少し距離をとります」と言い残し黒服は歩いて何処かに姿を消す。

すると強い突風が吹いた。

悪戯好きな暖かい春の風。
男はそれを全身で受ける。

風は男の背中を強く押す。

まるで何かに導く様に…

宇宙の浮島に吹くはずの無い季節風に男は一瞬疑問を抱いたが、たいてい気に留めずに男は風の向かった方に歩き始めた。

近くにある街路樹の桜を見ると、いつ花が開いてもおかしくない程に蕾を大きくしている。

通り過ぎて行く人の顔や景色さえも、男はとても穏やかに感じた。

ここまで穏やかな時は、おそらく幼い頃の妹と過ごした日々以来だろうと。

「まるで嘘のようだ」

いくら中立のコロニーと言ってもここまで人々の顔が穏やかだとアノ戦争も大昔のようだ。

そんな事を考えながら町を眺めて歩き続け目的の店に着く。

いつ来ても商売をやっているとは思えない静寂に包まれた店。おまけに埃っぽい。

店頭に積まれた小汚い本の山は『ご自由にお持ち下さい』と言わんばかりだ。

「おーい」

店の奥に声をかけるとすぐに若い娘が間口まで出てくる。

「あらお客さん！ もう読んじゃったの！？」

「あいにく暇を持て余していてな」

男がこの古本屋に通い始めたのは3週間前。

休養はいいが仕事以外で趣味らしいものがなく『とりあえず本を読んで過ごそう』と思い、店へ来る度に五巻ほど彼女のオススメを購入する。

つい先日にも本を購入したばかりなのでそう言われても当然だ。

「オススメの本は有るかね」

「じゃあ…」と彼女は奥に戻り、店番の机脇に置かれていた一冊を持ってきた。

それは本と呼ぶよりもノートか日記帳の方が正しいかもしれない。

「それは何だ？」

「私が書いたんです」と嬉しい様な恥ずかしい様な顔を見せる。

その笑顔が眩しい。

「ホントか？ 凄いな」

「私の書いた小説がやっと認められて嬉しくて、勝手に自分で製本したんです」

「よかったじゃないか」

彼女の事が素直に嬉しかった。

「どんな物語なんだ？」

「なんででしょう？ 一応戦争をテーマに書いたのですが、ぶっちゃけ純愛になるんですかね」と彼女がはにかむ。

彼女は作家志望の19歳で地道な執筆活動をしながら小遣い稼ぎに知人の古本屋の留守を任されていると語る。

彼女いわく『古本屋の仕事は、古きよき時代の名作と、読者の素直

な感想が聞ける最高の場！』だと。

「純愛か…、私には向かないよ」

「後悔はさせませんよ」

軽やかな言葉だったが、どこか自信を秘めた言葉に感じる。

若者のチカラというものかも知れない。

彼女は「是非感想を聞かせて下さい」と男に本を押し付けると店の奥に姿を消した。

「おいおい、店番が奥に引っ込んでいいのか？ 表に積んである本が盗まれるぞ？」

「表の本は沢山刷られた本なので価値は無いんです。だから持つていつてくれた方が在庫が減って助かります」

たいした言い分だ。

「わかったよ、読み終えたらまた感想を聞かせに来る」店の奥にも届く様に声をかけると男は店を後にした。

少し歩いてから男は「もう出て来ていいぞ」と何処にかけるでもなく呟く、すると男の後方7、8メートル離れた小路から黒服が「流石は大佐ですね」と自笑気味に現れる。

「バレバレだよ、もう戦争は終わったのだから少しは肩の力を抜け」

「ならば何故大佐には私の様な監視役が付いているのでしょうか？」

「どこぞかの腹黒い奴らが、また私を利用する為だろう」

蕾を膨らまして春を待つ桜の街路樹を横目に二人は肩を並べて歩いていく。

「ちょっと寄り道するぞ」

「ハイ」

歩き続けていくと徐々に人氣が無くなっていき、ほとんどの店のシャッターが閉じた寂れた商店街に入る。

男は黒服を先導する様に先を歩く、そして商店街の一番端の店の前で立ち止まり「ここだ」と黒服に告げた。

店は木製の小さなテラスを設けた喫茶店、ドアは閉じていたが中はクラシック音楽が大音量で鳴っている様子が伺える。

金色のドアノブを握り、ゆっくり開ける。

すると中で響いている大音量の音楽が二人の耳に襲いかかる。

「相変わらずだな、客が来たぞ」

男はカウンターで音楽にあわせて両手を振り指揮をとる熊髭の大男に声をかけるが、大音量の音楽に掻き消され何を言っているか伝わっていないだろう。

熊髭は察して音量を下げる。

「これはこれは大佐殿、失礼しました」

「今はただの男だよ、監視付きだな」と黒服の方を見て皮肉に笑う。

「ご注文は？」

「ブレンドをブラックで、お前は？」

「同じものを」

テラス側から射す陽光が当たるテーブルの席に男と黒服が座り、男は手にしていた本をテーブルに置く。

熊髭はコーヒーを淹れながら話かける。

「今日は何を読んでいるのですか？」

「今朝一冊読み終えてしまっただけ、確かチエーホフの本だったが、タイトルを忘れてしまった」と軽く自笑。

黒服も軽く笑いながら「片っ端に読み漁るからですよ」と。

熊髭はガハガハと大口を開けて笑い「では今日お持ちのソレはまた別の本ですな」と合点した。

しばらくして熊髭がコーヒーカップを乗せた小さな丸いトレイを持ってくる。

「お待たせしました」

大柄で熊髭を生やした男がエプロン姿でやるソレは、いつ見ても可笑しなものだ。

カチャカチャとカップとソーサーを鳴らしてテーブルに置く動作までくると男は思わず笑いそうになる。

「今回は中々良い豆が入ってますよ」

「どうせまた地球産の密輸品を、ブラックマーケットで仕入れたんだろ」と黒服に指摘されると熊髭は『バレたか』と言わんばかりにガハガハ笑い。

「お前らしいな」

「ですかね、ではごゆるりと」

熊髭はソレだけ言うとトレイを小脇に持ちカウンターに戻る。

「それじゃあ彼女の作品を拝見するか」

男はテーブルに置いていた本を手に取り最初のページを読み始める…

フィクション（前書き）

母なる大地に足をつけ天に舞う鳥達を見上げ夢見た人類は、いつしか天空を音よりも速く翔け夜道を優しく照らす月にまでたどり着く。しかし人間の欲望に満ちた心は月だけに留まらず太陽系から遥か彼方離れた銀河までも求めた。

この物語は人類の未来を賭けた大戦を幾度と経験しても尚、欲望と野心に満ちた人類が作り上げてしまった。

一つの悲しい愛の物語…

フィクション

『活きる為に必要なモノは何だろうか？』

そんな事をよく考える。

地球の生物に必要な酸素や水では無く、あくまで人間が“活きる”為に…

そんな事を考えるのは、僕自身が普通の人間と違うからだろうか？
周りにいる大人に聞いても『そんな事を考えなくていい』と言う。

確かにその通りだ。

しかし何故僕はそんな事を考えるのか？

何故大人は『考えなくていい』と言うのだろうか？

それを考えても、また眠れない日が続くだけなのに…

四角い入れ物の中で僕は目覚める。

いつもの様に白衣達が入れ物の戸を開けて迎えに来る。

「六号、時間だ」

いつも通りの機械的な声、見た目は同じ人間なのに何故こいつ等は僕達に対して冷淡なんだ。

腹が立つ！

「聞ってるか」

ム力つく声だ。

「ハイ、聞こえます」

こいつ等には無愛想な位がいい、お前等と同じ様に返事をしてやるよ。

そいつ等と一緒にいた白衣の女一人に連れられて長く続くタイル貼りの床を歩く、何時見ても僕の顔が写るほど綺麗に磨かれた床が延々と続く。

清楚員が潔癖なのか管理者が潔癖なのか知らないが、その床は極端に冷たい。

「伍号と七号はセンターに着いてます」

「ハイ」

「今日やる検査は昨日の内に説明されていると思いますが、何処か身体で気になる所はありませんか？ 頭が痛いとか、胸が苦しいとか？」

「大丈夫です」

普段は学習と訓練で一日を過ごすが、今日は能力テストを主に行う、その結果を今後の訓練や実験に反映するらしい。

数分歩いてセンターと呼ばれる場所に着く、そこは既に十五、六人程の白衣が居た。

「ろくちゃん、おはよう」

あまり歳の変わらない女の子が声をかけてきた、その子は僕もよく知る子だ。

「そんなふうに呼ばないで下さい」

「六号って呼ばれるの嫌いでしょ？ だから“ろくちゃん”！」

正直『ろくちゃん』と呼ばれるのは嫌いではない、僕はそう呼ぶこの子を好ましく思っているからだろう。

「みんな揃ったな」

眼鏡の白衣が言った。

それを合図に白衣達が眼鏡を見る。

「これから4回目の測定検査を始める。 尚この検査は前回の検査結果と比較する為に行う、千分の一まで正確に測定してくれ」

まるで堅苦しい演説。

それを聞いて白衣達が持ち場へ散る。

女が「行きましようか」と僕と伍号、七号をセンターの左手側にある扉へ促す。

検査は5項目。

前日に行う身体測定と健康診断。

今日は体力測定、学力検査、適応検査。

体力測定で1時間、その後に休憩兼昼食時間を1時間、学力検査で1時間と適応検査で2時間、計5時間かけて三つの検査を終える。

適応検査以外は何を調べるか解るが、その1項目だけ解らない、ただ高濃度酸素水に満たされたカプセル型の水槽に入るだけの様に見える…

適応検査

ガラス越しにカプセルを眺める女と眼鏡。

「やはり六号は駄目ですね」

「前回との比較は？」

眼鏡の指示に従ってパソコンを操作する白衣が画面にグラフや数字の羅列を表示、そこを眼鏡が横から覗き込む。

「伍号、七号は適応レベルに達しています。六号も上昇傾向ですが、僅かです」

パソコンを操作する白衣が言う。

「これが限界か」

「しかし微動ですが上昇しています」

「我々は十年後の兵士を創っている訳では無い、今使えなければ無意味だ」

「そうですね？ 知能指数は130台ですし、身体能力も成人を凌駕しています。十分実戦投入可能かと？」

「専用兵器が使えなくては話にならん」

白衣は「はぁ…」と自分を納得させる様に返事をする。

眼鏡は「機体の方はどうなっている？」と女に聞く。

「順調です。第1～第2工程は既に終了しました。あと二十日以内に全工程が終了します」

聞きたい事と違うものを言われ「テストタイプだ！」と眼鏡が声を荒げた。

しかし女はまったく動じず、ただ冷淡に「既に調整済みです」と返す。

「ならすぐにでも適応実験を始めるられる用意を」

「はい」…

名前

適応検査と言うよく解らない検査は体力をかなり消耗する。

おかげで僕はすごく疲れた。

『一体何を調べる検査だ？』と思うが、これまた答えの出ない問いになる。

全ての検査を終えてセンターに戻り検査終了の長々しい眼鏡の演説を聞いている時間は地獄だ。

演説が終わった頃には、もうコロニーの人工太陽が紅く染まり始める時刻を部屋の壁掛け時計が表示していた。

女が「お疲れ様、今日は終いでいいわ、一緒に部屋に戻りましょう」と僕に手を差し出した。

しかし僕はその手を取らない。

「どうしたの？ 部屋に戻りたくないの？」

僕は声を発する事なくただ頷く。

「じゃあ少し散歩しようか」

穏やかな笑顔で女がそう言うと、屈んで僕の掌を優しく握ってくれた。

すると女の後ろから「私も行くー！」と大きな声。

「先生ヒドイ！ 私を置いて何処かいい所に行くつもり！」

僕を『ろくちゃん』と呼ぶ女の子の声だ。

「そんな事しないわよ、“エリカ”も一緒に行きましょう」

それを聞くと女の子は満面の笑みを浮かべて「やったー！」と喜んだ。

しかし今、何故女は伍号を『エリカ』と呼んだのだろうか？

そんな事を考えていると白衣達が七号と呼ばれる男の子を連れてセンターを出て行こうと僕達の前を横切る。

『エリカ』もそれに気づき七号に「どうしたの？ 一緒に散歩行こう」と声をかけた。

だが七号は振り向く事はおろか立ち止まりもせず「行かない」と呟き、そのまま扉の向こうへ、センターに七号の『行かない』という言葉の冷たい余韻を残して。

背後から眼鏡の声。

「七号はこれから“コア”に“ダイブ”してもらおう」

『コア』とは一体？

眼鏡の言葉を聞き女の目付きが変わる。

「何故私に黙って事を決めるのですか!？」

「今伝えた。それに君は忙しそうに見えたので君の部下へ私が直接指示させてもらったよ、“ダイブ”の観測はこちらで行う、後で君のオフィスに詳細を送るから安心して子供達の面倒を見てくれたまえ」

眼鏡の言葉にはあからさまに嫌味が含まれている。

しかし女は動じる素振りも見せず「わかりました」と返す。

思うに全く動じなかった訳でないだろう、僕等にいらぬ心配をかけたくなかったのだと思う。

女は「ではお先に失礼します」と告げ僕達の手を引いてドアを開けセンターを後にする。

ドアを過ぎると背後で扉が重厚で機械的な音をたて自動で閉まる。

「本当に好きだよなあ」

「やっぱり自分の血を引く子だから可愛いんじゃない？」

「かもなあ、なんかこう見ていると母親みたいだな」

「保母さんの間違いでしょ、こんな宇宙の果てに居ると頭おかしく成り兼ねないし」

「ニュータイプと噂される天才も、結局はただの人間って事だな」

堅く閉ざされた分厚く重たい扉の向こうから、耳では聴こえない筈の嫌味を『エリカ』は感じた。

女は僕等を基地の屋上に案内してくれた。

屋上からは人工太陽に紅く照らされたコロニー内を一望できる。

『エリカ』は屋上に設けられた長椅子へ駆けて行き端に腰掛ける。

その光景を女は微笑ましそうに見つめてから彼女の隣に腰掛けた。

「どうぞ」と女に促されて僕も長椅子に掛ける。

「ここは私のお気に入りの場所なの、エリカとは何度か来ているけど、君とは初めてよね」

僕は返事をしなかった、だが女の声はまるでそよ風の様に優しい響きでいつまでも聞いていたいと思わせる美しさだった。

「本当に先生はココが好きだよねえ、私も好きだけど」

猫がじゃれる様に『エリカ』が喋る。

「そうだ先生！　ろくちゃんにも名前付けてあげようよ！」

二人は僕の名前を考え始めた。

僕自身は別に『名前』など欲しいと思わないが、二人が考えている姿を見ると、なんだか胸の奥がくすぐったい様な感覚がする。

女は白衣のポケットから白い手帳を取り出して熱心に何かを書き始

める。

『エリカ』がその手帳を覗き込んで「何してるの？」と女に問う。

「名前を考えているのよ」と女は返すが『エリカ』は更に疑問に思
い「変な字、先生の書いてる字読めない」と呟く。

「これは漢字よ、この字の一つ一つに沢山の意味が有るの。 例え
ば私の『カオリ』って名前はこう書くの」と女はペンで『華織』と
書く。

「私がお母さんのお腹にいる時にお医者様に『女の子だよ』って教
えられたら、お父さんが『生まれたら着せるんだ』と言って花柄の
着物を買ってきたから『華織』なんですって、おかしいよね」

『華織』はそう言うてはにかむ。

この人の『華織』という名を僕は初めて知った。

『エリカ』は華織の話聞いてキャハキャハと笑う。

「じゃあ私の名前はどんな意味なの？」

華織は手帳に何かを書き込み僕とエリカに見せた。

「エリカは恵みの華って意味で『恵利華』と書くのよ」

「恵みの華かあゝ、なんか素敵！」

エリカが喜んでいる。

しかし恵みの華が…

戦争の道具として作られた僕達に恵みなど無いのにそれをさらりと
言うのか。

だが不思議と華織の言葉は暖かい。

それは華織のエリカに対する思いが決して生半可な慈悲や贖罪の心
から来るものでなく、真心からエリカを大事に思っているのだと僕
は感じた。

この人はいい人なのだと思った。

「それじゃあろくちゃんの名前は？」

「そうねえ、君の名前は……」

華織は手帳に漢字を書く、そしてページを一枚破り僕に示した。

僕の名前は…

月面にて（前書き）

“設定”

宇宙世紀108年。

幾度かの大战を経た時代。

ジオン独立戦争に感化され幾つものスペースコロニーが連邦政府からの独立自治を行いはじめ、地球連邦は過去の様な力を失いつつあり。

その存在は体裁でしかなくなっていた。

月面にて

「……………」

ん？

「……さ」

この声は…

「ジュディゲル少佐」

その名は…

「少佐聞いていますか？」

俺はまどろみから現実へ呼び戻される。

「すまない少し眠っていたようだ」

「ちゃんと休養はとってますか？ 少佐は気を張りすぎなんです。任務に支障が出る前にしっかり休んで下さいね」

「ハイ、ハイ」

「“ハイ”は一回！」

「ハイ！」

慣れない事務作業で少し疲れていたらしい、珍しく居眠りをしてしまった。

しかし何故こんな昔の事を夢に見る？

この娘と居るとよく『あの頃』と同じ感覚を思い出す。

彼女の血の色の様に限りなく朱い髪がそうさせるのか…

それにしてもこの娘は俺が上官と解っていてこの振る舞いなのか？

まあ俺はそういう形式的な事が嫌いだからいいが、他に知れると問題だな。

「キショウ中尉。俺は堅苦しいのが嫌いだからその振る舞いでもいいが、他の士官が同席している時は遠慮しろよ」

「了解しました。ジユディゲル少佐殿！」

まったく、敬礼すらオママゴトだ。

ドアを“コンコン”とノックする音が部屋に響いた。

「誰だ？」

「フィリア・ニクソン曹長です。入ってもよろしいですか？」

「入れ」

ミーティングルームのドアを開けたのはブロンドのショートヘアが

よく似合う女性だった。

「ご挨拶中に失礼します。ジュディゲル少佐、そろそろよろしいですか？」

フィリアの言葉であの方がいらしたのだと悟った。

「もうそんな時間か。わかった今行く」

「どちらへ？」

「残務処理兼ご挨拶さ、あと必要機材の確認なり俺の仕事は山積しているのだな。中尉も今日はもう自室に戻ってかまわんよ」

彼女にそれだけ告げてミーティングルームを後にした。

だが何故か後ろ髪を引かれる思いがする。

俺が彼女ともっと長く居たかったのか、彼女の思念が訴えているのか、俺の力では分らない。

それよりあの方のいるブリッジに向かわねばとリフトグリップを握る。

「随分長いご挨拶でしたね」

「すまない、待たせてしまったかな？」

「いえ、少佐の事ですからもっと早く済むと思っていたので」

小さく頼りない印象のフィリアだが、軍内外の多方面で情報に詳しく、小規模作戦では各隊へのアドバイザー役に回る事が多いらしい。今は艦のオペレーターを担当している。

お互いに初めて組んだのだが、たまにふざける所を省けば優秀な人材だ。

「それにしても一体何をお話していらしたのですか？」

「たわいもない日常会話だよ、まったくよく喋る娘でな、彼女が話に夢中の間に俺は眠っていたらしい」

「あのキショウ中尉がですか？…」

フィリアの声は急にはつきりしなくなる。

「珍しい事なのか？」

「いえ… 珍しいと言えばそうですが…」

「なんだ？」

「少佐の顔は怖いので怯えるかと」

これがそのおふざけだ。

「冗談のつもりだろうが笑えないぞ」

「失礼しました」

「それで本当の所はどうなんだ？」

「私も中尉と同じ隊は2度目ですが…、中尉は何か心を閉ざしている様な印象があります」

「彼女が？」

俺と話をする中尉はまるで俺を父親か何かに見立て、日常に起こった些細な出来事を大冒険の様に話す幼い娘の印象だった。

心を閉ざしているとは感じなかったが…

「少佐は特別なので心を開いているのではないかと？」

「俺が？」

「同じニュータイプじゃないですか」

「それは関係ないと思うぞ」

「“わかりあえる”というやつでは？」

非科学的な事を…

「まるでニュータイプを超能力者の様に思われては困るな、彼女の事をもう少し詳しく知っているか？」

「あの様な女性が好みなのですか！？」

「牢屋に入りたいのか？」

「失礼しました」

反省などしてないくせに。

「去年グラナダで大規模デモ鎮圧の際に緊急召集されたのが私とキショウ中尉で、キショウ中尉はその時はまだ少尉でした」

それは去年の1月3日、一年戦争を主な議題にした討論番組内にて地球至上主義の政治家ロバート・ラースが『月の民は戦争を営利目的に利用した戦犯である』との発言が発端となった事件である。

特にグラナダのデモは激しくTV中継で放送された保安部隊に4機の作業用MSが突進して行く光景はともショックングで、視聴率80%以上と見なかった者はほとんどいないであろう数字を記録した。

デモは2週間続きグラナダ政府が連邦軍にデモ鎮圧の要請を求めたのは発生から1週間後、例のTV中継の翌々日である。

グラナダはジオンを支援していた過去がある為に公国解体後も連邦との繋がりを疎ましく思う政治家が多く、そいつらが連邦の助勢を拒み続けた事に対応が遅れたと推測できる。

「あの事件か。俺はその時は地球にいたからニュースで見た程度だ」

「向こうは過去の大戦の生き残りもいましたから姑息な作戦で戦闘用MSを奪われもして苦戦しました」

「という事はジオンの連中が民衆を味方に付けてのデモだったのか？」

「ごく少数ですが… 一体どんな手を使ったのかはわかりませんが行進に参加した市民だけで三千人以上はいましたし、ほとんどが宇宙産業系労働者なので大戦時の旧式MSも何機か確認されました」

「もはやデモの域を出ているな」

「軍も馬鹿だから私みたいな下っ端ばかり召集して、キショウ中尉が頑張ってくれたから早期に鎮圧出来ました」

「大活躍だった訳か？」

「私より全然若いのに作戦まで立案してくれました」

人は見かけによらないものだ。

「なのに心を閉ざしていると？」

「はい、最初の挨拶の時も形式上の挨拶をそのままただけで、その後も自室で作戦を考えたり自機のメンテとかばかりで、生死をともしした仲と言うには… あまり他の兵士達と会話をしていなかったです」

「なるほどな」

「んでやっぱり少佐はキショウ中尉が気になるのですか？」

「一応しばらく同じ隊として働く訳だからな、心に何か問題がある

のならば隊長として何かしてやらねばならんし」

「それだけですか？」

「お前は俺から何を聞き出したい？」

「いや、少佐は結構モテると噂を…」前言撤回。

ほとんどふざけた女だ。

「それにしてもまるで迷路だな」

「逃げましたね… 私は慣れました」

複雑な構造の艦内をフィリアに案内されてようやくブリッジの前に辿り着く。

フィリアに案内されなければこんなに早くは着けなかっただろう。

リフトグリップを放してドアの前で自分の軍服の襟を正しブリッジのドアを開ける。

すると連邦軍の制服を着こなした凛々しい後ろ姿が一番に目に入った。

「お待たせしましたヴォルフ准将」

静かに振り返った彼は18年前から変わらぬ自信と威厳に満ちた優しい笑顔で俺達を迎えた。

「久しぶりだなマーク、フィリアもご苦労だった」

軍曹が一步前に出てすまなそうに軽く頭を下げる。

「申し訳ありません。遅れました」

「気にするな、コイツの事だからと君を迎えに行かせたにすぎん、
本当に見た目は変わっても中身は変わらんなマーク」

「計算外な事態に陥りまして」

「言い訳が下手な所はいい加減直した方がいいぞ、出世に響く」

グレン・ヴォルフ准将、第03独立隊の旗艦“ディープ・ヘルメ”
の艦長兼、隊の最高責任者。

戸籍上の父がいない俺に住居や学校の手配をした育ての親だ。

「出世出来ない人間だからこの隊にいるのでは？」

グレンは笑う。

「そうだな」

サイド3がジオン共和国として連邦政府からの独立を宣言した宇宙
世紀0058年以降。

コロニーの独立自治を求める運動が増え続け連邦政府も経済的圧力
だけでは抑止出来なくなり、連邦はジオン残党狩りを名目にした公
の組織を結成し武力による征圧を行うが、組織は暴走し失敗。

連邦はその失敗から公の実行を諦め、影の組織での実行を開始する。
その組織が独立隊“ディープ”である。

ディープの対象となるのは連邦軍の駐留を拒む独自の戦力を持った
総てのコロニー。

コロニーに資源供給する船に所属不明の兵器で襲撃し供給を断つ。
いわば海賊だ。

連邦の支援無くしてコロニーの維持が出来ない状況を作り上げる事
が目的。そのためディープで使用される兵器は連邦軍に存在しない
企業の実験兵器が主。

そして本来艦隊指揮をする将官がたった一隻の艦長に過ぎない点も
ディープの特徴である。

これは対象のコロニーの資源供給を断つ為に必要と艦長が判断した
独自作戦を連邦軍上層部の評決無く実行出来るという理に適った特
徴であるが…

それは作戦により連邦政府や軍に不利益が生じた場合、責任の総て
を艦長と隊の全員に求める為である。

ようするに連邦による海賊行為がバレて責任追及されても公には存
在しない組織なので当事者である俺達を秘密裏に処刑して知らぬ存
ぜぬを貫く事が出来るという腐りきった連邦の考え付きそんなシス
テムだ。

その為ディープに選ばれる者は連邦軍の体制に相応しくない連中ばかりで、この隊は連邦軍のゴミ箱に過ぎない。

グレンも連邦軍の体制に相応しくない人物でディープに移る前まで大佐だった。

グレンは地球生まれの連邦軍人にしては珍しい実力主義者で優秀な人材ならスペースノイドでも側に置きだがる変わり者。

本来低い階級しか与えられないジオン出身者達がグレンの下で着実に評価せざるを得ない実績を重ね続けたので軍上層部は彼を問題視せざるを得なくなり、グレン・ヴォルフ大佐は形式上准将に昇進させられ“ゴミ箱”入りした。

「悪かったねフィリア君、持ち場に戻ってくれ」

「はい」

快活よく返事をするフィリアはオペレーターの席に向かい、椅子に積んであったマニュアルを片手に持って機器の使い勝手の確認を始めた。

まだ新鋭艦に慣れていないのに俺の迎えという使い走りをされた訳か。

相変わらず人使いが荒い。

気遣いを忘れない所はグレンの魅力だが、グレンが部下に尊敬され慕われる所も“ゴミ箱”入りした理由と推測出来る。

いわゆる嫉妬だな。

「この艦には慣れそうかマーク？」

グレンはブリッジの窓の外に視線を戻す。

その先には無重力のドック内でボードPCを片手に艦の最終チェックを行っているメカニック達の姿が見える。

「ご命令ならば慣れます」

ブリッジはグレンの他に数人のクルー達。

ナビゲータのカイト・クライシ准尉は同じナビゲータのヘレン・バツク少尉に通信機やレーダーの使い方をレクチャー中。

「不器用だなお前は、いつか一緒に仕事をして思ったが、まさかこんな形になるとはな」

「仕方ありません、上の連中からすればニュータイプは戦争の道具に過ぎないです」

「……………」

少し皮肉が過ぎたかな。

グレンは少しだけこちらに体を向ける。

見ると彼の横顔は微かに愁いを帯びたものだった。

「あの娘もだな」

「キシヨウ中尉ですか？」

少し背伸びをする様にグレンは顔を上げてブリッジの天井に視線を移す。

「ああ、彼女の事はお前に任せろよ」

「どついう意味です？」

すぐに答えずグレンは俺の横を通り過ぎてブリッジのドアの前で俺の方へ向き直し重たげな口を開いた。

「そのうち話す…」

それだけ呟くとグレンはドアを開けて通路のリフトグリップを握る。

彼の背中には『着いて来い』という無言の言葉を発している様に感じたので、俺もブリッジを出てリフトグリップを握った。

グレンはすれ違うメカニックマン達に挨拶をする以外は艦長室に着くまで一言も口を開かなかった。

お互い無言のまま部屋に入る。

部屋の内装は艦長室という名に似合わず質素で、応接用の二人掛けのソファ―二脚と黒塗りのテーブルが無ければ独房となんら変わり

はない。

むしろ彼の境遇を考えると独房かも知れないとも思ってしまう。

明かりを点けながらグレンはようやく口を開く。

「そこに掛けてくれ」

促されて俺はソファーに腰掛けながらデスクの引き出しからファイルを取り出すグレンを伺う。

「お前を呼び出した理由はコレだ」とそのファイルをテーブルに置きグレンは俺の向かい側のソファーに身を委ねる。

「新型の極秘ファイルだったならわざわざブリッジに呼び出す必要はないのでは？」

「私の呼び出しを散々すっぱかすからそうなる」

「ジュニアハイスクール時代の事をまだ根に持ちますか」

「ハイスクールもだろ」

「そうでした」

18年前のアジール・コロニー開放作戦後、リボー・コロニーに移り戦災孤児施設での生活を始めた俺をグレンは養子に迎えようと度々訪ねてきたのだが、俺は彼から逃げる様に面会日は必ず姿をくらし続けた。

確かにグレンと彼の妻キャスリーンには返し切れないほどの恩がある。

しかし当時の俺は言葉に出来なかったが、幼心に俺みたいな人間がグレンと同じ姓を名乗るのはおこがましく、彼の出世の道を断つ事になるので申し訳ないと思ったからだろう。

それが“ジュディゲル”と俺が名乗ってきた理由だ。

今となつてはそんな気遣いは無意味だった訳だがな。

「そんな事より中を見たらどうだ、中々面白いぞ」

含みを持ったグレンの言葉に従ってファイルを開いた。

最初に目に入ったのは“ZERO Project”という表紙。

しかしページをめくっても新型MSのスペック欄は空白ばかりでこのファイルは詳細の意味をなしていない。

「トップシークレットってやつですか」

「ああ、今回ののは日本の宇宙航空科学事業団が開発したものらしいのだがな、その事業団の内実はサナリィやコロニー公社に技術提供しているスーパーエンジニア集団みたいだぞ」

おかしい事を言う人だ。

でもグレンのこういう豪快なネーミングセンスは好きだ。

「また変な言葉を当てますね」

「ハハ、売り込みの奴がそのファイルを私に渡すなり『詳細は日本へいらした時に続べてお教えいたします』ときたもんだ、よほどの自信があると見た」

グレンは笑う。

彼の笑顔には他人の心を明るい気持ちに出来る特別なものをいつも感じる。

「なるほど、だからスーパーエンジニア」

「一応私は説明を受けた、試作機の仕様はニュータイプ用だ」

「自分の機体になるのですから、そうでしょうね」

「それともう一つ、これは私の独断だが、キショウ中尉にも試作機に乗ってもらう」

「やはり彼女の腕はそれ程ですか」

「……………」

俺の素朴な質問に彼は黙り込む…

部屋が沈黙で充ちていく…

それは時が止まる様な永遠に感じられた。

「… 本当に何も知らないのだな…」

どういう意味だ？

確かに俺はあの娘の事を何も知らない。

だから彼女とMS隊長として話した。

………

いや違う。

彼女に何か懐かしいものを感じたからかも知れない。

彼女の血の様に朱い髪に…

静かに記憶を探る俺を見てグレンが言う。

「彼女はお前と同じだ」…

コーヒープレイク（前書き）

“設定”

太陽系に一基で三千万人が暮らせるスペースコロニーが数百点存在する宇宙移民達成後の未来。

宇宙世紀0089年。

宇宙の統治権を争って太陽系に点在するコロニー大半を巻き込んだ大戦を人類は経験した。

そんな時代に暮らす一人の作家志望の女性が書いた物語。

その物語を読んだ人々は時代を次のステージへ導く様に動き出す。

その中に“赤い”異名を持つ元軍人も…

コーヒーブレイク

「冷めてますよ」

唐突に放たれた黒服の呆れ気味な口調に気付く男はコーヒーカップに視線を移す。

さっきまで熱い湯気を上へ昇らせていた黒い液体はすでに飲むのに最適な温度を失っていた。

「ああ、気が付かなかった」

「ずいぶんと御熱心でしたね」

「そうか？ それにしても彼女は中々研究熱心のような。想像以上の内容でコーヒーに手をつける事も忘れて読んでしまったよ」

男は湯気を失ったカップを手にとり冷めきったコーヒーを口に近付ける。

「大佐がお褒めになるならよほどですね」

「だから大佐はやめろ。それとあまりごまをするな」

本にしおりを挟んでテーブルに置き冷めたコーヒーを口にする。

「ぬるいな」

「でしょうね、5分以上たっていますから」

「そんなに読んでいたか？」

「御自分で本のページを確認してみてくださいよ」

「わかったわかった」

確かにしおりを挟んだ所を見るとやや読み進んでいるのが伺える。

男は彼女の作品に引き込まれていた。

カウンターの奥では熊髭が業務用の冷蔵庫から何かを取り出ししている。

しばらくして丸トレイに何かを乗せてやってきた。

「うちのコーヒーは冷めても美味しいですよ。これはサービスです」

トレイに乗ったそれは見たところチーズタルトに見える。

「なんだそれは？」

「これがピザに見えますか？」

「お前が作ったのか!？」

「他にいないでしょう」と熊髭は自慢気に笑う。

それを観て黒服は笑いを必死で堪える。

40 越えて髭面のデカイ図体をしたオヤジがケーキの類をエプロン姿で作っているのを想像すれば無理もない。

熊髭はタルトを一つテーブルに置く。

「新しいメニューにと思いましてね、知り合いから教えてもらったのですが中々の味で、よろしかったらどうぞ」

しかしテーブルに置かれたのは一人前しかない。

黒服がそこに「俺の分は？」と噛み付く。

それに熊髭は冷たく「近くのケーキ屋で買ってくればいい」と返す。

「大佐ばかり優遇して、差別だ差別！」

「読書家特権！」

互いを責める訳でもないただのふざけた馴れ合いのを始める二人であつた。

「それじゃ読書家じゃない俺はタバコでも吹かしているよ」

黒服は席を立ち店の奥のテーブルへ移って上着の内ポケットからタバコの箱と古びたZipproを取り出す。

熊髭は男に話かける。

「もしかその本はあの古本屋の娘が書いたものですか？」

「よくわかったな、知り合いか？」

「まあ彼女にいろいろ聞かれまして」

「何をだ？」

熊髭はタルトの乗った皿の隣に紙ナプキンを敷いて上にフォークを置くと、丸トレイを胸に抱き込む様に持って話を続けた。

「やれ戦艦の中はとか作業用のMSとどう違うのかと」

「なるほど… アドバイザーをした訳か」

すると熊髭は大事な事に思い当たり慌てて「もちろん機密事項は…」と言葉を噴き出したが、男は彼が信用の置ける人物だと理解しているので「わかってる、お前の事だ」と言葉を最後まで聞かずに返し熊髭にホッと息をつかせた。

「出過ぎた真似をしましたかね？」

いかにもはにかんだ様に熊髭は右の人差し指で頭をかく。

「そんな事ないさ、元軍人がアドバイザーなら良いものが書けたと彼女は喜んだろ」

「ええ、お礼にとこのチーズタルトのレシピを教わりました」

「そうなのか、それを聞くと美味そうに見えてきた」

男は笑う。

「レシピも良いですがコックの腕も良いですよ」と熊髭の自己主張が返ってくる。

「それも知っている。ではお前はもうこれを読んだのか？」

「一応」

「感想は？」

「そこを聞いては駄目でしょう」

熊髭は笑う。

「確かに野暮だな」

だが突如熊髭が熱弁を振るいだす。

「しかし中々意味深な言葉が続く中で物語が展開し、その先には激しい戦闘と根の深い悲しみに涙し、最後は愛に……！」

熊髭は結局自分の感想を大半語っていた。

彼が気付いた時にはもうすでに遅く「今は聞かなかった事にして下さい！」と口にはするが、この近さで言葉を聞き逃す方が難しい。

熊髭は激しく己を恥じている。

男は熊髭の素直な反応があまりに可笑しく大声で笑ってしまった。

「ハッハッハッ、結局自分から話しているじゃないか」

「何とも自分が間抜けです」

「だな。だが私はお前のそういう素直なところ嫌いじゃないぞ」

「情けないですが、そう言っていただけでと有り難いです」

男はテーブルに置かれたフォークを取る。

「なるほどな、確かに意味深な言葉が多い。だが元軍人のアドバイスがここまで熱く語るのだから余程の傑作だろう」

男はタルトを一口食す。

タルトのサクサクとした生地 of 食感が口の中で響く。

次にほど好く甘酸っぱいレアチーズの味。

最後にさっぱりとしたレモンの風味が口の中いっぱいに広がり、あまりの美味さに笑顔がこぼれた。

「うん、確かに」

「でしょう!」

「お前が作ったとは思えない味だ、甘すぎないからコーヒーにも合う」

一服を済ました黒服が「私にも一口」と言葉を挟んだ。

「だから言つたろ」

「いいではないか、俺の護衛をしてくれている事だし」

「…………… 本当にお優しいですねえ。大佐のお言葉に感謝しろ」

『冗談で言つてたクセに』と男は微笑む。

熊髭はカウンターの向こうに戻りあらかじめ用意されていたタルトを男の向かい側に置く。

「食いたかったら座れ」

「はいはい」

黒服は男の向かいの席に戻る。

「素直じゃないな」

「俺がタダで食わすと思うか？」

熊髭が不敵な笑みを浮かべる。

「3クウルでいいか？」

「冗談だよ」

「知っているよ、お前はそういう人間だから言ってみただけだ」

仲の良い二人だ。

取り留めのない会話が続く。

背後に死の恐怖が迫る戦場に長く身を置く男からすれば、こんな取り留めのない日常でも生きる喜びになったであろう。

目の前で下らない話をする同僚と元同僚、そしてこのコロニーを生活の地にして子を養う人々の笑顔こそが彼の疲弊しきった精神を癒す薬なのだ。

黒服がタルトを美味そうに頬張っている。

気が付くと飲みかけだった男のコーヒーも新しいものに取り替えられていた。

やはり『ぬるい』という言葉聞いて気を使わしてしまったようだ。

男はタルトをもう一口。

しつこくない甘味と酸味が心地好い。

コーヒーを一口。

ビターな味と薫りはチーズタルトの余韻を引き立てる。

男は再び本を取り、しおりを挟んだページを開く…

禁じられた者達（前書き）

“小説の登場人物”

マーク・ジュディゲル：

29歳

地球連邦軍所属の軍人で階級は少佐。
名は偽名。

遺伝子操作されて生まれた人間。

しかし元々のニュータイプ能力が乏しかったらしく自ら薬物強化を
施した後遺症で白髪になる。

性格は温厚だが皮肉屋で一度戦闘になると冷血な一面も垣間見える
が、それは遺伝子操作による部分が影響している模様。

戦闘スタイルや機体色から“黒い鷹”の異名を持つ。

養父であり上司であるグレンを尊敬してはいるが時に疎ましくも思
っている。

白髪ではあるが美しい長髪で容姿端麗。

かなりモテるが恋愛に関心が無い模様。

作品の主人公。

禁じられた者達

俺と同じ…

「強化人間という事ですか？」

「もつと悪い」

もつと悪い…

その言葉で思い当たるのはあと一つ。

「では… “エンキト” だと」

グレンは硬い表情のまま頷く。

エンキト。

遺伝子レベルで身体能力や知能指数を強化した人間。

戦力の乏しいアクシズが優秀な戦士を確保する為にクローニング技術と並行して研究をしていた技術だ。

しかし疑問が残る。

「連邦にそんな技術が有るとは考え難いのですが？」

「それがアジール・コロニーを攻撃した本当の理由だ」

「…!？」

驚愕で言葉が詰まる。

「彼女は戸籍上22歳ではあるが実際はまだ17歳の子供にすぎない」

「作戦後に得た技術を使って造られた…」

「そついう事だ」

「チツ！」

心から溢れる憎しみが止まらない。

どんなに時がたってもオールドタイプは力への欲を捨て切れないのか！

同じ過ちを幾度となく繰り返して…

クソッ！

「だからお前に彼女の事は任せる」

グレンへ返事する為己の感情を覆い隠す。

「解りました」

「同じ境遇のお前なら彼女の心のケアも出来るだろう」

哀しみを含んだ言葉であつたが同時に俺が成すべき使命の提示と俺への信頼から出た言葉なのだと感じた。

グレンは部屋に漂う暗い空気を察して話題を変える。

「話が逸れてしまったな。それでもう一つ頼みというかこれは命令なのだが」「何でしょう?」

「新型受け取りの際お前はキショウ中尉と共にMSで降下して現地に向かつてもらう」

「シャトルでなくMSですか?」

「ああ、向こうがお前達のMSのチューニングを見たがつていてな。今お前とキショウ中尉が乗っているMSと引き換えに新型を受け取る事になった」

「命令なら従いますが今の機体も一応は機密では?」

「上からの指示だ。“独立”なんて名前は付いているが上から命令が出れば従うしかない、それに代わりと言っては何だが今より優れた機体に取り換えるのだから損は無いさ」

「今のが最低ですがね」

「また愚痴か。お前が特別だからだよ」

フォローの様な言葉だがグレンはそれに笑いを含めた言いようだった。

「お褒めの言葉として受け取ります」

「あれはお前専用に組まれた機体らしいからそう言うな」

「確かに遠距離狙撃は得意ですが格闘戦が苦手な訳では」

「そのお得意の遠距離狙撃に合わせたのだから格闘に向かなくても仕方あるまい」

「アナハイムで試作した最新の小型ジェネレータと大推力を生む熱核ロケットと遠距離狙撃をサポートするAIの実験機体…」

「まさに特化しているな」

品の良いグレンの笑いが部屋に響く。

「だがあんな機体役に立ちますか？ 加速Gは殺人レベルですし、並の人間に扱える機体の方が…」

俺の皮肉を最後まで聞かずにグレンが口を出す。

「私はお前のクレーム処理係ではないぞ。この隊が組まれる前からお前の戦績は聞いていたし『マークなら』と思って実験機をお前に回していたのも私だ」

少し驚いた。

ずいぶんと高く評価されたものだ。

まあ普通じゃない俺に毎度危ない仕事が回される事は仕方ないとい

う諦めもあつたし慣れていたが、まさか危ない仕事を回す張本人の一人が俺の養父で、しかも理由が『信頼』だ。

見方を変えれば俺を超多忙にして軍を除隊させる気でもあつたのかもしれんが、何故か嫌な気はしない。

親心というやつか。

「すみません、また悪い癖が出ました」

「お前もいい歳になつたのだから直せ、上官からの命令だ」

お叱りなのだろうが親しみの有る言い回しだった。

「前から言っているだろう。難しい事を任された時はそれだけ…」

「自分が評価されていると思って勤めろ… ですね」

今度は俺がグレンの言葉を最後まで聞かずに口を挟んだ。

この言葉はグレンのお叱りの定番だったから覚えてしまった。

「相変わらずなのはお互い様ですね」

何だが可笑しいな。

こうして話すのは3年ぶりだろうか。

俺が連邦軍を志望した時グレンは激しく反対したが結局最後は俺の決意に折れて応援してくれた。

以降はグレンお得意の根回しで仕事が忙しく、たまに会食に行く程度で疎遠になっていた。

「まったく… そうだ！ いい歳ついでに聞くがお前恋人はいないのか？」

突然何を閃いたかと思えば女の話だった。
俺は結婚する気が無いというのに…

こういうのは適当にあしらう。

「明日は出港なのでそろそろ…」

席を立とうとするとやはりグレンは俺を呼びとめる。

「もう3人も見合い写真を送ったのに返答が無いのはどういう事だ？」

まるで尋問の様だ。

「自分はやはり独り身の方が…」

「見合いが嫌ならフィリアはどうだ？ 彼女は優秀だし美人じゃないか、お前に興味も有るようだし歳もそう離れていまい。職場恋愛でも構わんから」

要望の様な言葉が続く。

俺の感想を言えば『知るかよ』の一言だ、しかしそれを口に出れるほど幼稚な子供ではない。

ふと言いつ訳の様に出了た言葉が「今は仕事が忙しく…」だったか「こ
ういう時ばかり忙しいのだなお前は」とすんなりグレンに言い訳と
バレた。

「マーク… お前も今年で29だ。女性士官から人気があるとよく
噂を聞くがまったく色気のある情報を耳にしないのはどういう事だ
？ 私は早くお前に家庭の幸せを知って欲しいのだよ」

俺の事を思つての言葉と理解出来るが、それに応える事は出来ない。
それにしても吹き出す様にそんな言葉をポンポンと…

こんな事をグレンに吹き込んだのはきつとフィリアだな。

グレンは一つの事に思い至りゆつくりとそれを確かめる様に口にし
る。

「やはり身体を気にしているのか…」

俺は遺伝子操作された人間な上に未熟なニュータイプ能力を補う為
の薬物常用で既に身体はボロボロだ。

白髪だけならまだしも男としての機能も無くなっていると思う。

そついう色っぽい関係になつてもお互いに辛いだけ。

グレンが思い詰めた表情で告げる。

「過去に囚われるのは辞めろ。お前一人の問題じゃない自分をもつ

と大事にしろ」

奴が生きている限り俺の幸福なんて無い。

絶対にあいつを…

「俺一人の問題ではありませんが、俺の問題な事に変わりないです」

俺は席を立つ。

「マーク…」

グレンの口から悲しい響きの俺の名がこぼれた。

奴を殺せるのは生き残りの俺一人。

幸福なんて二の次でいい。

俺はドアへ向かって歩きながら呟く。

「キシヨウ中尉の事はお任せ下さい」

言いながらドアの前でグレンの方を向くと彼はソファから立ち上がり両手をズボンのポケットに突っ込みこっちを見る。

「彼女の背中とあの朱い髪を見ると少年時代のお前を思い出すよ」

「グレンも嫌味がお上手だ」

俺はそれではとグレンに挨拶をし部屋を出ようとする。

「マーク！」

ドアを開けようとするとグレンに呼び止められた。

「まだ何か？」

ゆっくりと間を持たせグレンが口を開く。

「お前……」

そこまで言っているとグレンの言葉は詰まる。

「……笑うのが上手くなったな」

「おかげさまで」

「それだけだ」

「……？ では明日」

彼へ敬礼して部屋を出た。

グレンは自分のデスクへ歩き黒革張りの立派な椅子に腰を下ろし背もたれに身体を押し付ける。

「マーク…… 彼女はお前にとって生易しいものでない…… エンキトと呼ぶより……」

独房の様な部屋に一人残されたグレンは、かける対象を失った言葉を呟き続ける。

「キメラだ」
…

もう一人（前書き）

“用語集”

ジオン：

サイド3に拠を置くスペースコロニー国家。

元々は地球連邦に自治されていたが独立戦争を仕掛けた。
現在国家は解体されている。

MS：

モビルスーツの略称。

人間が搭乗して操縦する人型の機械。

用途や目的で10m～100mと大きさは様々だが全長20m前後
が一般的に用いられる。

ニュータイプ：

人類の進化系とされる。

多様な解釈があるが洞察力や直感力に優れた人間を指す事が多い。
また空間認識能力やサイコウェーブを用いて特殊な現象を引き起こす存在とも知られ『エスパー』と呼ばれる事もある。

『NT』はその略称。

コア：

『オリジナル』や『ブレイン』とも呼ばれる謎の物。

宇宙世紀初期から存在が確認されているが遥か旧世紀からあったとも言われる。

ジオンは極秘にこれの研究解析を進めていたが現在は所在不明。

もう一人

同じ頃。

貴族の様な金の刺繍で装飾された軍服を纏う男が眼前に広がる青い星を眺め再会の時を待っている。

男はため息の様に呟く。

「そろそろか…」

男の隣には身の丈190cmはある長身で黒い短髪の軍人が控える。

「内通者の話では新造艦の完成が遅れたとの事です殿下」

「そのようだな」

二人は超大型スクリーンに投影された母なる星を眺めて何を思っているのだろうか。

部屋は中世ヨーロッパの宮殿を模した美しい装飾が施され、床と壁は大理石の様な白く美しいマーブル模様、部屋の広さから小規模なブリーフィングルームかパーティー会場のようだ。

殿下と呼ばれた男は呟く。

「10年だ」

「はっ？」

「いや正確には13年か、連邦の黒い鷹…」

「ああ… 地球では反政府テロで御活躍だそうですね」

「腕をあげたよ、本当に待ち遠しい」

「そつでございますね」

殿下は肩の辺りで緩く纏めた朱く長い髪を翻しドアの方へ向かう。

それを見た長身の軍人は右手に持っていたリモコンでスクリーンを壁と同様のマーブル模様に切り替え、歩き出した殿下を追い抜きドアを開ける。

二人は格納庫へ向かう。

庫内では壁際に立たされたMSが3機、整備の為に仰向けに寝かされた機体が1機。

二人は作業員が使う高所通路キャットウォークからそのMS達を見下ろした。

「まずはお前がファーストコンタクトをとれリユーク」

「はい」

「その間私の隊は周回軌道上で根回し済みの人工衛星に取り付き衛星の望遠鏡をハッキングしている。そして奴らの降下まで待ち降下後の奴らの目的地を特定、その後お前達と合流し降下だ」

「この作戦で行けますでしょうか？」

「愚問だな。地球の人工衛星のほとんどは既に骨董品だ」

「しかし連邦軍の船に見付かる危険もあります」

「平和ボケで御役所仕事の連邦だ。パトロールの目は穴だらけで意味をなしていない、戦艦ならまだしもモビルスーツ3機ならその穴をすり抜ける。見付かったとしてもデブリと思うさ」

「たいしたお方だ」

リユークの口から感嘆の言葉が漏れる。

部下の言葉を軽くあしらう様に笑う。

「何を言うと思えば…… どのみち危険である事は承知の作戦だ。用心は怠るな」

「ハッ！」

軍隊式で快活の良い部下の了解。

殿下は壁際の左端に立つ白いMSを見る。

機体のシルエットは連邦製MSの様な直線的なデザインでシャープな印象を与えるが、ヘッドは一年戦争でジオンが使ったゲルググに似ている。

ランドセルには後方へV字に伸びる角型の4本の大型バインダーが装備されているが、それはバインダーではなくメガ粒子砲を搭載した4機の大型ファンネル（無線誘導兵器）でオールレンジ攻撃を可

能にしている。

そのファンネルの間から頭部の後ろへ垂直に伸びた棒状の物は試作された超大出力の巨大ビームサーベル“フランベルジュ”

ランドセルから供給されるエネルギーを直接充填する為に柄から直線上に伸びたソケットが存在し、その部分は文字通りランドセルに刺さる様になっている。

フランベルジュはビームサーベルの最大出力を求めて開発されたもので刃を発生させる時間は30秒程しかないのに対し再使用には140秒の充填が必要であるが、切れ味はシリンダー型コロニーのミラーを簡単に切断出来ると言えば想像しやすいだろう。

発生させるビームの形状は片刃の包丁に近いものだ。

他に両腕には射速性能の高いビームカノンが内蔵されている。

携行武器は一般のアナハイム製ビームライフルとビームランチャー、その他ブッホコンツェルン試作のブランドマーカーと呼ばれる攻守一体小型ビームシールド等、汎用機と専用機の中間的な機体である。

「このゼノで遊んでやる」

「ヴァロル殿下専用のカスタム機ですね」

「付け焼き刃だがこれなら十分だ」

「今時ファンネル搭載機で相手しなければ落とせない敵機と考えると“王牙”はそれ程の機体ですか？」

「あれには“コア”が積まれているからな、それを使われたら20機はMSが墮ちる」

「“コア”ですか…」

「“オリジナル”と言った方が正確かな」

その言葉を聞いてリユークはようやく理解する。

「実在したのですか!？」

「ああ、得体の知れない物の代表的な存在だな、あれが現在のサイ
コミュニケーション（脳波制御装置）の原形さ」

「都市伝説の類だと思っていました」

「だが実際に存在する。旧ジオンの時代からの最高機密であつたが、
まだ技術的な進歩の拙い時点から人体実験も行つてしまつたので幾
人も犠牲になつた、おかげで公国の幹部でも一部しか知らないハズ
の最高機密も戦争が始まつた時点では軍の下士官すら噂話をしてい
たからな」

皮肉含みに笑う殿下の顔はやはり彼に似ている。

「それより俺の機体に乗る気はないか？」

「はっ…?」…

挨拶

翌日。

出航前の号令の為、独立隊の主要メンバーがブリッジに集合した。

集まった総員は30人は居るであろう、そのほとんどはブリッジクルーとMS隊で残り数名は各要員の士長のみだが、30人ものメンバーが入る広いブリッジは近代の宇宙戦艦では珍しい。

しかし流石にこれだけの人数が揃うと狭く感じる。

「ブリッジクルーとMS隊、及び各士長の皆、集まってくれて感謝する」

ブリッジの正面窓を背にいかにも軍人という感じでグレンが背筋を真っ直ぐにして立ち挨拶を始めた。

「まずは出航が遅れた件を代表の私から謝らせてもらう、まあ予期せぬデモの余波でアナハイムの社員側がストライキを起こしたのが理由の一つではあるが、全く予想出来ない事態ではなかったのが何かしらの対策を練るべきであった。おかげで数日基地内待機という暇を持て余した事だろう、申し訳ない」

別に誰も気にしてはいないがこれがグレンのやり方だ。

待機命令も基地内って制約は付いたが休暇みたいなもので遊び好きなメンツを除けば皆有意義に活用出来た様だし。

「本艦の作戦目的をあらためて説明する」

ここに居るほとんどがこの隊を“ゴミ箱”と認識してはいたが正式には“独立隊”であるが故に体裁的な説明をするグレン。そして既に二つ有る独立隊を新たに結成した理由も述べた。

「今年5月18日に第01独立隊が所属不明のMS隊と交戦して壊滅した。奇跡的に02独立隊に回収された2名のMSパイロットの証言によるとサイド2のレジーヌコロニー、旧アイランド・ブレイドと言えは解り安いだろうか、その警戒任務中でデブリ群に潜伏していた艦に突如6機の正体不明MSに急襲されたようだ」

アイランド・ブレイドは過去の一年戦争で被害を受け後のコロニー再生計画で移送中にジオン残党が計画した星の屑作戦で地球へのコロニー落として利用された。

しかし実際に地球に落とされたのは共に移送されていたもう一つのアイランド・イーズであった為にブレイドはしばらく行方不明であった。

再び発見されてからは新規コロニー“レジーヌ”として改修されてサイド2に移りレジーヌコロニー自治政府の意向で宇宙難民を多く受け入れるていた。

「それで我々は母艦を失い任務を果たせなくなった01隊に代わりレジーヌコロニーの警戒任務に付く」

ここまではクルーのほとんどが知る俺達の仕事。

だが第01独立隊が生き残ったメンバーを入れて再編される事は無

いだろう、相手が誰か知らないが連邦のゴミを見事処分してくれた訳だから、運良く生き残った奴らの身は恐らく地球で幽閉って所だろうな。

問題はここからだ。

俺達の目的はレジヌコロニーの警戒任務となっている訳だが出航後の進路を知るのは恐らく副司令を兼ねている俺だけ。

「更に新型MSの実動試験も行うのだが、そのMSはトップシークレットの為に我々が現地の地球まで受取に行く、と言っても本艦は大気圏での運用は想定されていないのでMSパイロットのマーク・ジュディゲル少佐とユリ・キシヨウ中尉の二人で地球に降りてもらい本艦は周回軌道上で二人の帰還を待つ」

受取を終えた俺達をシャトルが大気圏離脱用ブースターで周回軌道まで上げてディープ・ヘルメに拾わせる寸法か。

ブースターともなれば軌道が1度でも外れたら宇宙漂流って笑えない話しだな。

「私からは以上だ。ジュディゲル少佐、副司令として君からも皆に何か一言」

群集の前列に立っていた俺はグレンに促されて前に歩み出し彼の横に立つ。

正直こっぴうのが苦手だ。

それを知っていてやらせるグレンも鬼畜だと思うよ。

「第03独立隊副司令兼MS部隊隊長のマーク・ジューディゲル少佐だ。皆知っているだろうがこの隊はある種特殊だ。故にこれから超過酷な任務をこなす事になるだろう」

我ながらいい加減な語りだ。

「まず俺達は地球へ新型MSの受取に向かうがその後はレジーヌへ進路をとる。恐らくレジーヌ側の武装勢力と交戦する事はある意味必然に等しい、01隊が壊滅した事実で向こうも相当手強いと想像できる。いつ何時俺達が01隊の様になるかも知れん事を覚悟してくれ、以上！」

こんなもんかな。

俺の肩にポンとグレンの手が置かれる。

「ではご苦労、持ち場に就いてくれ」

グレンの敬礼に合わせてブリッジに居た皆が敬礼した後、各々の持ち場に向かう。

「私もこれで失礼します」

「ご苦労」

皆が持ち場に向かうのを見送ってから改めてグレンに敬礼しブリッジを出る。

「ジューディゲル隊長！」

リフトグリップを握ろうとすると背後から呼び止める声がした。

「何故新型が自分ではなくあの小娘に！」

俺がブリッジから出るのを待っていたであろうこの青年はまるで殴りかかるかの勢いで言葉を言い放つ。

青年は以前北極で別の試作MSのテストパイロットと一緒に勤めたロビン・パーソン中尉であった。

彼は自身の優れたニュータイプの資質に一種のプライドを持っているが、そのプライドが過剰過ぎ独断先行する悪い習性で部隊を危険にさらす事がしばしば。

グレンが試作機のテストパイロットとして引き抜く前までは“噛ませ犬”と揶揄されてきた問題児であった。

まあ確かに彼のパイロットとしての適性は優れているが、23歳という若さと過剰なプライドが彼の短所だ。

グレンの事だからそういう奴も使い方って認識で引き抜いたのだろう。

恐らくブリッジで新型機の受取を任じられたのがキショウ中尉と聞いて彼女がパイロットに選ばれたと察したようだ。

それで号令中グレンに意見したい気持ちをじつと堪えていた訳か。

「俺に八つ当たりしても結果は変わらん。パイロットを決めたのは准将だ」

「じゃあ自分が外された理由を！」

このような手合いにはきつい言葉を浴びせた方が有効だな。

「知らん！ 頭を冷やせ」

我ながら突き放す様に言ったが、この青年に有効に働くか分からなかった。

しかし慰めの言葉を求める様なタイプでもないので彼を置いて格納庫に向かう。

途中フィリアの艦内アナウンスが「総員に告げます。艦の拘束を解除しますのでショックに備えて下さい」と流れる。

間もなくガクンと船が左右に揺れて危うくりフトグリップを離してしまいそうになるが右腕に力を入れて堪えた。

エアロックに入るが戦闘配備命令が出てないので格納庫内は空気が入っただけで素通り出来た。

格納庫へ出る為の分厚いハッチを開けて直ぐに整備士長の名を呼ぶ。

「おい、アーノルド！」

「ジュディゲルか？ 今お前を見てるからこっちに来い」

ハッチを出てすぐ左側に立つ黒いMSのコクピットからアーノルドの声が聞こえたので足で床を蹴り慣性で自身の身体をそのコクピット

トまで飛翔させる。

「なんでコクピットなんか見てるんだ？」

開いていたコクピットハッチに手をかけて身体を制止させてから中を覗き込むとアーノルドは右のアーム・レイカー（球状操縦桿）をバラしていた。

「次の機体もコレなんだとさ、だからお前の癖を記録してる」

「アーム・レイカー分解しちゃ出撃出来ないだろ」

「俺なら3分もかからないで組み立てられるから問題無い」

彼はアーノルド・シュワイガー曹長。

元々は民間企業の人間であつたが軍で機械工学に優れた人材が不足した時に教官として迎えられたのだが、職人気質で一見無愛想な彼は上からよく誤解される事がありグレンが引き抜いた。

「あそ。新型機もアーム・レイカーか」

「新型の事を聞きに来たなら諦めな。俺は准将が命令した機体の記録作業しかやってない」

「はいはい。なんか手伝う事ないか？」

「無い。今の仕事はこれ。もう1機はハンナが見てくれる」

「もう1機？」

「キシヨウ中尉のだろ」

「ああ、そうだな。じゃあ彼女の機体の記録が見たいのだが」

アーノルドは一呼吸置いて叫ぶ。

「おいハンナ！ キシヨウ中尉の機体整備記録出せ！」

うるさい声だ。

この至近距離では鼓膜が破れる。

「そんな大きい声出さなくても聞こえているわよ」

左斜め向かいに立つ派手なオレンジのカラーリングが施されたMSのコクピットが開き、中から褐色の肌の美女が姿を現す。

「あんたねえ、毎度毎度言ってるでしょ、うるさいって」

少し不機嫌気味な彼女がハンナ・シュワイガー、アーノルドの妻だ。

彼女も旦那と同じメカのプロ。

アーノルドよりか愛想よいが基本似た者夫婦ってやつかな。

一隻の戦艦の中で夫婦が出来る事はまあ有る話だが、元々夫婦の者二人が船員に選ばれる事は軍では非常に珍しい。

その珍しい現象を導いたのはアーノルドがこの艦の整備士長をグレンから任じられた時に妻のハンナが『なら私も一緒に』とわざわざ

グレンの自宅をたずねて直談判したからだとか。

彼女は元々軍でMSメカニックのアドバイザーをやっていた。

その時にアーノルドと知り合って恋に落ちたらしい。

だがハンナの美しさを考えればもつと階級の高い士官と結婚していてもおかしくはない、にもかかわらずあの口を開けば機械の事しか出ないアーノルドを選ぶとは世の中わからないものだ。

おまけにハンナはアーノルドにゾッコンで独立隊の実態を知ったハンナは夫を一人行かせる事が出来ないとの事でグレンに殴り込みだ。

そこだけ聞くと本当にお熱い二人だが仕事中の二人は一見そうは見えない。

にしても来年40になると思えない程ハンナは美しい、今だに若い士官からも凄い人気だし。

アーノルドも男前で悪い人間でもないが、性格に難があるので尚更二人の結婚は疑問ばかりだ。

その疑問も含めて結婚した当時はハンナを狙っていた男達にアーノルドもさぞ怨まれた事だろう。

「こっちはセンサーチェックの為に火が入ってるんだから、音感センサーで外の音は丸聞こえなの」

毎度毎度この二人の会話は怒気を帯びていて聞いている側は気を使うよ。

「忙しい所すみません。その派手なのがキショウ中尉の機体ですか？」

「そうよ。あんたに似て荒い乗り方してるから4〜5回メンテナンスしたら中身全部入れ換えよ」

「そう言わないで下さいよ」

ハナナが整備中だった機体を見て俺は見た目そのままの感想を口にする。

「しかしそんなド派手なオレンジじゃまるで作業用MSだな。その色じゃ敵機のセンサーにすぐ捕捉されて狙い撃ちだよ」

「あんた何も知らないのね、それが狙いのよ」

「はっ？」

アーノルドが俺の疑問に答えた。

「機体を見る限りあの娘さんはうちのエースだよ」

「どついう意味だ？」

「各関節部の駆動疲労と全スラスターの推進剤消耗率が他の誰よりも激しいからよ。あの娘は自ら戦場で囨役を買って出て、かつ生還してるパイロットさ、機体の統べてを見りゃそいつの戦闘スタイルなんざ丸解りだからな。整備士の特権」

「その通り同感だね。ホント彼女なんとかしてよ隊長さん！ その調子で今後もやられたら私らの仕事も終わらないし、いくら補給が有っても全然足りないよ」

「なるほど。彼女の資料を見ても戦績ばかりで戦闘スタイルまでは解らないからな。しかしそう言われても困るよ、とりあえず彼女の機体詳細を見せてくれハンナ」

「下にある道具入れの一番上の引き出し」

ハンナがコクピットから足元にある金属製でキャスター付きの引き出しを指差す。

俺は「サンキュ」とハンナに左手を振ってその道具入れの所に飛び降り一番上の引き出しを開ける。

中にはブルーやイエローなどのファイルが5冊程入っていた。

「ごめん言いそびれた、赤いファイルね」とハンナのアドバイスを聞き俺は赤いファイルを抜き出す。

その様子を見たハンナはコクンと頷いた後コクピットに戻ってハッチを閉じた。

俺はファイルを数ページめくり読み思う。

「右端にクリップ挟んでまとめるクセ直したのか？」

「あのジジイうるさいから今後は全部ファイルにまとめろってさ」

「“ジジイ”って？」

「グレンさ、鬼の居ぬ間に言ってやった」

アーノルドが笑う。

だがまさか彼の口からグレンへの愚痴が出るとはな。

しかしファイルを読んでもみるとハンナとアーノルドが言った通りムーバブルフレーム（MSの骨格）の部分発注書の数が異常な多さだった。

機体の型番は“RGZ-00100”と彼女の資料にも書いて有ったものだが…

「そつえばこの機体はあまり見ないタイプだ」

俺の呟きに問題の機体からハンナのマイクを通した声が流れ格納庫内に響いた。

「よくぞ気付いた！ さすがは隊長だね！」

「この機体は過去にエウーゴで開発されたモビルスーツ2機のコンセプトを受け継ぎ、宇宙世紀100年を記念して作られたワンオフ機！ 通称ハンドレット！」

随分熱の入ったご説明だな。

エウーゴといえば地球連邦軍外郭新興部隊ロンド・ベルや今の第13独立艦隊の礎になった組織。

元々反連邦組織のエウーゴが活躍していた時代は旧体制の連邦は腐敗が進みジオン残党も着実に過去の組織力を取り戻しつつあった時代。

そんな激しい三つ巴の大戦をくぐり抜けたエウーゴは数多くのMSを開発し戦果を挙げてきた。

ハンナの熱弁は続く。

「ベースとなつた2機はMSZ-006とMSN-00100で双方とも発表された当時は傑作と謳われ、現在でもその過去を知る兵士達は伝説の様に語る！」

たまに彼女は本当に女かと思う。

「まずMSZ-006ですが、その機体の特徴は現在では珍しい可変MSという点。しかし可変MSは構造が複雑な為コスト面や整備性の悪さからRGZ-00100は非変形機として設計された。そう考えるとMSZ-006のコンセプトなど受け継いでいないかにも思えるが… 技術者はMS形態でのMSZ-006の高い機動性に注目したの！ その機動性の理由はMSZ-006が両脚部に熱核ロケットエンジンを搭載し巡航形態変形時にその脚部をメインエンジンとして機能させていたから。よってRGZ-00100も脚部に再設計された熱核ロケットエンジンを装備し同じくMSZ-006に装備されていたロングテールバーニアスタビライザーもRGZ-00100用に再設計し装備！」

話が長いな。

「更に変形機能を排した事で機体構造に余裕が出来、頭長高20m近いMSZ-006に対し本機は17.1mまで機体の小型化に成功！熱核ロケットとロングテールバーニアスタビライザーと相まって非常に高い機動性と運動性を実現したの！」

俺はMSに乗る事が仕事だがMS自体に興味は無い。

この話は一体いつ終わるのだろうか…

出航

「各ブロック問題ありません」

美しいフィリアの声で艦が正常に機能している事が告げられる。

「出航準備！」

グレンの合図に合わせてブリッジクルー達が忙しそうに通信機で連絡をとったり、リーダーなどの機械で作業を始める。

「クライシ准尉、バック少尉。艦の拘束解除をお願いします」

フィリアが左舷、右舷のナビゲーターに指示を出すと二人は声を揃えて「了解」と短く返答。

フィリアは通信を艦内放送に切り替える。

「総員に告げます。艦の拘束を解除しますのでショックに備えて下さい」

放送後しばらくもしない間にガクンと艦が左右に軽く揺れ安全拘束が解除される。

「エンジン始動」

再びグレンの声がブリッジに響く。

両舷ナビゲーターがキーボードでエンジン始動の指示を打ち込みモ

ニターに数字の羅列を表示させる。

「カウントダウン開始、点火まで27秒」

クライシ准尉が点火までのカウントを読み上げる。

「隔壁開け」

グレンの指示が続く。

フィリアがヘッドセットで「ドックへ。隔壁の開放をお願いします」と指示をドックに伝えると隔壁がゆっくりと開き、大小の数えきれない星々が煌めく無限の海がブリッジ正面の窓から入ってくる。

「18、17、16、15…」

規則正しいクライシ准尉のカウントダウンがブリッジに響く。

「5、4、3、2、1、OKです」

「エンジン点火、微速前進」

「微速前進」

操舵手のランス・ガールランド准尉がグレンの指示を復唱後、ディーブ・ヘルメは緩やかに前進を始める。

「熱量、推力、共に問題ありません」

「ふう」

何事も無くスムーズに出航しグレンは思わず溜息を漏らし艦長席に腰をおろす。

「お疲れですか？」

「いや、心配はいらんよランス。テスト無しでエンジンを吹かすのがやや怖くてな」

「それは皆同じですよ」

「だな。それじゃあ皆、月の周回軌道に乗るまで艦内外のセンサーチエックを艦の運航と平行しながら始めてくれ」

「言われなくてもやってますよ。でないと全然間に合わない」

クライシ准尉の発言は仕事に追われて忙しい皆の代弁だった。

「現場命のカイト・クライシ准尉は流石だね。しかしすまん、本来なら出航前に全て済んでいるのに」

「毎度アナハイムのごたごたに巻き込まれちゃ俺達の仕事が出来なくなりますから、これっきりにして下さいよ」

「こらクライシ！ 艦長だって奮闘してようやく出航まできたのにその口のききようは何だ！」

「いいんだよランス君」

「しかし…」

「俺達ならそれをこなせると考えてでしょ？　俺も口が過ぎました。艦長も謝らんで下さいよ」

「本当に私は部下に恵まれてるよ。それでは改めてよろしく頼むよクライシ准尉！」

冗談っぽいグレンの言葉にカイトが「了解！」と軽く敬礼した後、左舷の各センサーチェックを黙々とこなしだす。

「おい新入り！　チェック遅い！」

「急いでやってますよ！」

「泣き付いても手伝わんからな」

相変わらずカイトは新人の扱いが荒いとグレンは感じるが、それは彼なりの指導と理解しているので暖かく見守る。

「フィリア。ドックへの回線を私に」

「ただいま」

フィリアはドックとの通信回線を艦長席の受話器に繋ぎ、「どうぞ」とグレンを促す。

グレンが左手で受話器を取りドックの責任者に艦の出航準備を手伝ってくれた事への感謝の言葉を伝える。

「ディープ・ヘルメ艦長のグレン・ヴォルフ准将です。この度は貴港の協力を心より感謝します」

他に二言三言交わした後受話器を戻す。

「さてと、チェックはあとのくらいかかるかな？」

「俺の分は周回軌道に乗る前には終わります。今のところ問題は無いです」

「そうか。ヘレンの方はどうだ？」

「……………」

返事をしないヘレンに「お前だよ新入り！」とカイトがキツイ言葉で振り向かせる。

「あつ… あの… その…」

「何か異常か？」

「はつきり喋ろ！」

「航行の問題になる様な異常は無いのですが居住区のカメラに…」

ヘレンは自分のモニターに居住区の映像を表示してカイトに見せる。

「ん…？」

モニターには自室に入ろうとドアを開けているキショウ中尉にパーソン中尉が何か話している様子が映されていた。

「ケンカ… でしょうか？」

「口説いてんじゃない？」

「まさかそんな！…」

「端的な報告をお願い出来るかな！」

新入りで的を射ないヘレンの言葉にグレンが大きな声で内容提示の催促をする。

「あっはい！ 2ブロックの居住区でキショウ中尉とパーソン中尉が揉め事の様な…」

「様子わかるかフィリア？」

フィリアはヘレンが表示しているものと同じものを自分のモニターにも表示させた。

「はい、システム上ブリッジのスクリーンには投影出来ませんがこちのモニターでも確認しました」

「ヘレン音声は？」

会話の対象がフィリアに移っていたのでグレンから再び質問されたヘレンは軽く驚きおろおろと覚束ない手で機械を操作するが「えーと！ えーと！」と見ている側を不安にさせる。

「ヘレンいいわやるから」

「すみません」

「一応カメラに指向性マイクは搭載されていますが、プライバシーの問題もあって原則使えない事になってまして」

「私の指示でも駄目か？」

「なら大丈夫ですが責任者のIDを一度スキャンしてからでないと」
フィリアの言葉を聞きグレンは立ち上がって彼女の席へ。

「わかった。なら私が直接操作しろって事だな」

「私の方が操作には長けているのでそこにIDを挿していただけ
ば」

「ロートル扱いするな。私も事務から上がってきた軍人だぞ」

グレンはフィリアへ笑いかけ彼女と席を代わり左胸ポケットから身分証を取出して差し込み口に挿す。

するとモニターはグレンの名を表示。

この艦のシステムを初めて扱うのにグレンのタイピングは専門のフィリアやカイトと比べても圧倒的に早く、あっという間に居住区のプロテクトを解除してしまった。

「意外に簡単だな」

グレンの仕事の早さに「こわっ」とカイトは呟いたが幸グレンには

聞こえなかった。

「さてと、何のお話かな？」

グレンはスピーカーのボリュームを指先でつまみ音量を上げた…

ユリ・キシヨウ（前書き）

“小説の登場人物”

ユリ・キシヨウ：

地球連邦軍所属の軍人で階級は中尉。

朱いミディアムヘアが美しい女性。

戸籍上は22歳だが実際は17歳。

遺伝子操作で生まれた人間。

謎の多い人物。

グレン・ヴォルフ准将いわく『少年時代のマークに似ている』と、
フィリア・ニクソン曹長は『心を閉ざした印象』とのこと。

しかしマーク本人は『少女のよう』と一個人を指すには皆の印象が異なる。

“不殺の天才”という異名を持つ。
作品のヒロイン。

ユリ・キシヨウ

『人が活きる為に必要なモノは？』

よくそんな事を考えてしまう。

それを考えるのは私が普通と違うから？

何故？

考えるほど眠れない日が続くだけなのに…

それにしてもこの狭く四角い通路は私を憂鬱にさせる。

いや憂鬱と言うよりむしろ苛立ちの方が正しいか。

まあ今居る私の環境がそこだから仕方ないけど『軍人は色弱なの？』
と思うくらい色彩感覚そのものが欠落してるかの如く基地や艦の内
装は白やグレーばかりで無機質。

一様の利に適っているのだろうか人間性の欠如を感じてしまうので
この白く四角い通路が私は嫌い。

私が唯一安らぐのはコクピットだけ。

そう造られたからかも知れないけど、事実そうなのだ。

ジャミングの為に散布された高濃度のミノフスキー粒子漂う無限の
海は施設の無重力訓練に使う水深数十メートルのプールと全く違う。

宇宙には上下も左右も無い。

初めて宇宙に出た時はその心地好さに私の精神は溺れた。

その感覚はまるで地獄の様な天国。

しかし今は戦闘配備命令が出てないのでその天国を体感したくても出来ない。

今回の任務の過酷さも予測出来ないしMSをいじる気も今は無い。

残る選択肢は自室で眠れない身体をベットへ預ける事。

個人的にマーク・ジューディゲル少佐とまたお話がしたいが忙しい彼を引き留める口実にはあまりに身勝手なわがままだと思うし。

でも彼と話している時は宇宙に出ている時とはまた違う安らぎを感じる。

初めて会って話たのにそんな気がしないと言うか、何か暖かく懐かしい感じが…

この感覚は一体何だろう？

私は何処かで少佐に会ってるのだろうか？

飯に何処かで会っていたとしても何故こんなにも少佐を特別に思うのか…

わからない。

きつとこれも『活きる為』云々と同様に答えの出ない疑問なのかも知れない。

そんな二つの疑問を確認しつつ四角く長い通路を進み続け、ようやく居住区の自室の前へ辿り着く。

ドアの前に立ち扉に設けられた機械のスリットにIDを滑らせる。

機械的な音が横開きの扉を開けると独房の様な備え付けのデスクとベットのがある殺風景な暗い部屋の様子を覗かせた。

「キショウ中尉！」

部屋に入ろうと歩みを進めた身体を呼び止める声がブリッジの方へ続く四角く長い通路の先から聞こえ振り向く。

「パーソン中尉？」

声の主は同じMS隊パイロットの一人、ロビン・パーソン中尉だった。

「寝るのか？」

私の所までやってきたパーソン中尉は開け放たれた私の部屋を見て問う。

「出航したばかりで私達の仕事は大分先になりますし、休める時休まない」と

「それもパイロットの仕事だからな。だが出航が遅れたから十分に身体は休まっているだろう?。」

「私不眠症ですから」

「今暇してる事実さえあればそんな事はどうでもいい」

「……?」

「MSのシュミレータで一戦相手しろ」

「今ですか?」

「暇だろ、なら付き合え」

「お断りします」

パーソン中尉は私の即答に対してあからさまに怒りを顔に出す。

「なに!?!」

「理由がありません」

「そんなの訓練の一環だ! パイロットならその重要さが解るはずだろ!」

「艦長か隊長の命令ですか?」

「いや俺からだ」

「なら従う義務は無いです」

冷たく言い放ち私は部屋に入ろうとする。

だがパーソン中尉は私の左手首を強い力で握り引き留める。

「…お前！ 階級は同じかもしれないが俺は先任なんだぞ！」

私はもう片方の手で手首を握る彼の手の甲を痛みが走る様に掴んで解放させた。

彼は左手で痛む手の甲を摩る。

「貴方に私の行動を決める権利は無い」

私の言葉を聞いて今度は私の胸倉を掴み力で身体を引き寄せられた。

「自分が特別だと思い上がるなよ。新型は俺が乗る！」

その事か。

男のプライドってやつね。

くだらない。

「それを決めるのは貴方でも私でもない」

「だから俺はお前より優れているという事実を証明してやるんだよ
！」

しつこい。

こんな口論を続けても意味が無いので私は彼を気絶させようと左手に渾身の力を込めて彼のみぞうちに叩き込もうとする。

しかし。

開けっ放しの私の部屋のインターカム・モニターが勝手に起動し、そこから流れた「話は全部聞いたぞ」という声を耳にして拳を打ち込む寸前で思い留まった。

パーソン中尉も声に気付き掴んでいた私の胸倉を放す。

「二人ともこっちへ」とインターカムに促され部屋に入り二人でモニターを見るとそこにはヘッドセットを付けた准将の姿が映されていた。

「勝手にこいつを君の部屋に招いてすまん、ヘレンがセンサーチエックの際にお前達の喧嘩を見付けてな、何事も無く済めばと思っ
て見ていたらこれだ」

「お見苦しいものを見せまして申し訳ありません」

「君が謝る事ではないよキショウ中尉、今回はロビンが悪い」

「……………」

准将のお叱りに対してパーソン中尉は腹に一物持った表情のままモニターから視線をそらす。

そんな彼の態度を見て准将も呆れた溜息をつく。

「ロビン、私は私なりに考えているのだよ。それに今のお前の機体性能だって十分じゃないか」

「それはジュディゲル少佐やキショウ中尉も同じです！ 何故です？ 何故戦績の勝る俺ではなくキショウ中尉のですか！？」

「なら逆に質問するロビン。そこまで新型にこだわる理由はなんですか？」

准将の問い掛けは的確で鋭かった。

確かにパーソン中尉が今乗っているパヴチガンも次世代汎用機として開発された試作機なので一般機と比べれば高性能と言えるのに。

「性能どうこうの問題じゃない、准将が俺ではなくこの女に新型を預けるって事は准将は俺がこいつより劣っていると思ってるんです！ だが俺はそれに納得出来ない！」

本当にくだらない男、女の私に負けるのが嫌と恥ずかし気もなく口にするなんてただの男尊女卑じゃない。

「お前なあ……」

呆れ果てた准将の呟き。

こんな人達を纏める側になりたくないな。

「わかった、じゃあキショウ中尉と模擬戦をしろ。勝った方を新型に乗せる……これで納得しろ。悪いなキショウ中尉」

准将は最後の言葉を私へ申し訳なさそうに継ぎ足した。

「命令ならば従うまでです」

しかし妥協案中の妥協案って感じ。

まあそうでもしないとこの輩は納得しないから仕方ないか。

パーソン中尉は『その言葉を待ってました！』と言わんばかりの表情。

「だが一つ条件だ」

場の空気を正す様に准将が切り出す。

「シュミレータは無しだ、実戦形式でやってもらうぞ」

モニターの奥から「よろしいのですか？」と小さく准将を諭すフィリアさんの声が聞こえたが准将には何か考えが有るようでその言葉を気にせずにとだまつすぐこちらへ眼光鋭い視線を向け続けている。

「私がかまわないです」

「俺もその方がやり甲斐があります」

「そう来なくちゃな、ではロビンは先に格納庫で出撃命令が出るまで待機してろ」

「了解！」

いきいきと返答を済ませたパーソン中尉はするりと素早く私の部屋を出ようとする。

「まだ言う事があるんじゃないかロビン」

親が子供に注意する様にモニターの准将はパーソン中尉を呼び止めた。

だがパーソン中尉は何の事が解らずポカンと立ち止まっている。

「私がインカムで招き入れたがここはレディの部屋だぞ、その意味がわかるか？」

「……………」

パーソン中尉は相変わらず意味が解らないで立っている。

「キショウ中尉に『失礼しました』だろ馬鹿者！」

ようやく気付いたパーソン中尉は慌てて私に「失礼しました！」と敬礼するがすぐに立ち去ってしまった。

「まったく… すまんなキショウ中尉」

「別に見られて困るものは無いので」

「そついつ問題じゃなくけじめだよ。23にもなっているのにマナーとモラルを知らない過ぎるのだよ彼は」

「本当に准将は紳士ですね」

「ただでさえむさ苦しい世界だ、おかげで下品なやつが多くて困るのだよ」

「では何故軍人に？」

私は素朴な質問を准将にした。

しかし准将に「ハッハッハ」と何かしらの含みを持った笑い声でこまかされた。

准将は話を続ける。

「君の事だから負けろとは言わないが、空気は読め」

「それはパーソン中尉次第です」

「確かにその通りだが、去年の君の働きを考えると余裕だろ」

「お世辞は結構です」

「君の場合ロビンとは逆に謙遜し過ぎだな、早々で異名が付くパイロットなど中々居ないもんだよ」

去年グラナダのデモ鎮圧作戦が私にとって初めての正規任務だった。

作戦対象がグラナダ市民を主としたデモ隊であった故に機関が私の始動に相応しいと判断したようね。

現地に付けば相手は作業用MSとデブリから改造された機体ばかりだったが、『一応はグラナダ市民なので』と市から撃墜許可も下りず、デモ隊包囲作戦やグラナダ市庁を過剰な嚴重警備で反政府主義者の感情を逆なでした誘い出し作戦などしか実施出来なかった。

幸い抵抗勢力はバラバラで大きな徒党を組む事も無く済んだから、機しか現地に配備されなかった自軍MSでも沈静出来たけど。

首謀者特定の為に実行犯の機体を撃墜せずに行動不能にする手間が発生した訳。

まあ命令だからやったがおかげで私は“不殺の天才”という不名誉な異名が付いた。

「私は嫌味にしか聞こえませんか」

「そういう意味合いも有るかもだが、大概その嫌味は真似る事の出来ない才能故の嫉妬だよ」

なるほど。

そういう考察は流星年の功といった所か。

「とにかく了解しました、私もこれから格納庫に向かいます」

「……本当によく似ているよ」

「何がですか？」

「別に何でもない。模擬戦の設定が決まったらお前達のMSに送る。

長々と失礼した」

「こちらこそ、色気らしい色気も無い部屋で失礼しました」

「私からしたら年頃の娘さんの部屋を覗けて目の保養になったよ。では失礼した」

モニターが消えて部屋は真っ暗になる。

それでは一仕事といきますか…

むさ苦しい連中

「そしてこの機体のもうひとつの特徴がMSN-00100から受け継いだ対ビーム性能！ MSN-00100は特殊な塗料でそれをやっていたのだけどあまり有効な対ビーム性能は発揮していなかった。なのでハンドレットは対熱性と熱伝導に優れたセラミックに注目して装甲が作られたの、特殊な技術でハニカム構造化された密度の異なる極薄の磁気発生セラミックを何十層も重ねて作られた装甲でセラミック特有の重量を減らし、装甲表面にナノレベルの超微細な凹凸がついているの、そこにビーム弾が着弾するとあら不思議！ 硬い鋼鉄をも溶かし貫くビームが全く効かない！？ 理由は簡単、磁気と微細な凹凸がビームを形成するメガ粒子を飛散させて威力を減殺させ、対熱性と熱伝導性に優れた特殊なセラミック装甲は装甲表面の発熱と同時に熱伝導で装甲全体へ熱エネルギーを分散させて熱を冷ましてしまうから！ もうなんて素晴らしいのー！」

長々と続くハンナの熱弁はもはや俺の右の耳から入って左の耳へ抜けていくばかりだった。

しかし本当に彼女はMSが好きなんだなと思うよ。

「ねえマーク！ 貴方も素晴らしいと思うでしょうー！」

ハンナは唐突に俺へ同意を求めた。

だが途中からほとんど話を聞いていない俺なので「ああ…」という苦笑した返答が限界だった。

でも彼女は「でしょ！」と素直に喜んで。

それを観たら何だかホッとした。

それにしてもハンナは随分とこの機体に詳しいのだな。

「もしかしてその機体はハンナが手掛けて試作されたのか？」

「バレたか」

「バレバレだよ」

「流石はニュータイプ！ では特別に試作されたハンドレットのもう一つの秘密も語ってあげましょう！！」

『もう勘弁してくれ』と音をあげようとしたがそれより一足早くハンナが喋りだしてしまった。

「何年も前に試作されたまま目の目を観ずに倉庫で眠り続けてたこのハンドレットが今更実用試験に入った理由、それは……！！？」

途中まで話したハンナであったが。

エアロックのハッチを開けて倉庫に入ってきた人影に気付き急に黙った。

「あらロビン坊や！」

「ハンナさん、いい加減その呼び方やめて下さいよ」

「“坊や”は“坊や”だもの、卒業したければ自分のMSぐらい自分でメンテ出来る様になることね」

絶妙なタイミングで入ってきたロビンが天使に思えた。

「自分は動かすのが専門ですからメンテの仕事は自分より腕の良いハンナさん達に任せます」

「あんたねえ！ いい加減にしなさいよ！！」

「ロビン、自機のメンテも俺達の仕事だと教えたはずだぞ」

ロビンは俺の姿を認めると「これはこれは隊長殿」と皮肉たれた。

「そんな古臭い風習じみたもんばっかやってるから軍である組織すらも形骸化するんです。自分は自分の仕事を極め、メカニックはメカニックの仕事を極めて分業した方が能率的です」

「パイロットはメカニックとの信頼が無ければ死ぬただだぞ」

「そんなのただの理屈です。整備不良は整備士の非ですが不備の機体を理由に死ぬ様なパイロットなら、完璧なコンディションの機体で戦場に出ても敵に即撃墜される様な実力しか持ち合わせていませんよ」

「お前本気で言っているのか？」

「本気も何も事実ですよ」

それだけ告げるとロビンは俺の前を横切り自分の機体を探す。

「ハンナさん俺の機体は？」

「一番奥、カタパルトハッチの右側よ」

ハンドレットから流れるハンナのマイクを通した言葉を聞いてロビンは一番奥に並ぶ濃紺のパウチガンへ向かう。

「パイロットスーツ何か着てこんな所で偵察にでも出るのか？」と俺は彼の背中に話かけるとロビンは宙に舞っていた身体を軽やかに翻して自機に向かいつつ返答した。

「キショウ中尉と模擬戦です。准将に意見したら模擬戦で勝った方を新型のパイロットにするってなったので」

一瞬まさかと思ったが先程のロビンの剣幕で意見されたらいくらグレンでも言いくるめるのは難しいか。

それにグレンも馬鹿ではないしキショウ中尉が勝つと見込んで彼女との実力差を体感させロビンを納得させる気なのかもな。

血気盛んなロビンにはその方が正解か。

相変わらず汚いなグレン。

とは言ってもロビンも成長して一流の腕になったらいいし、さっきの奴の自論を聞く限りそれなりの実戦経験は積んだ様子。

俺と二人でテストパイロットをした時も生真面目に俺の機体の使い方を真似ようと必死だった。

熱血馬鹿かと思いきや意外にひたむきな奴な故に昔のままという事

は無いだろう。

一概に彼女が勝つとは言い切れないか。

面白くなりそうだ。

「ほって置いて良いの？」

気が付くとセンサーチェックを終えたのかハンナはキショウ中尉の機体から降りていて俺に話かけてきた。

「何が？」

「坊やのさっきの話、あんな考えで乗り続けたら下手すると死ぬよ彼」

「口で言って解る奴じゃないさ」

俺がファイルに目を通しながら返答したのが気に入らなかったのか、ハンナは俺に近付いて来て読んでいたファイルを俺からもぎ取る様に奪い、彼女の美しい顔が息のかかる距離まで迫ってきた。

「あんだ隊長でしょ！」

「まあ」

「なら何とかしなさいよ！ それも隊長の仕事でしょ！！」

「近くで見ても御綺麗ですね」

「ふざけないでくれる！」

「はいはい、でもそんなに怒らないで下さいよ。話して解る奴じゃないってハンナさんも知ってるでしょ」

「でもあんたの部下よ？　ならあんたの責任じゃない」

「准将に何か考えがあるみたいですよ」

「艦長の考え？」

俺はおそらくグレンはこう考えているであろうという推測をハンナに話そうとした。

だが不意に現れた人影から声がかかる。

「お二人共失礼ですが」

「…？　キシヨウ中尉か。ちょっと曹長と大人の話をね」

噂の本人登場ってか。

「何のお話ですか？」

「聞くなよ」

「聞かれてはまずいお話ですか？」

何故執拗に迫る…

「少佐に今晚俺の部屋についてお誘いよ」

ハンナめ、口からでまかせを…

「少佐はそんな事言う人ではありません」

言いようは軽かったがキツパリと言い切ったキショウ中尉の発言は場に流れてた空気や時間を止めるに充分な威力だった。

「…馬鹿ね冗談よ、仕事の話」

キショウ中尉の覇気に気圧されたハンナは白状するが、相変わらず中尉は何か嫌な空気を放つ。

「准将の命令らしいな」

まるでハンナをフォローする様になったがキショウ中尉に話し掛けてみた。

すると彼女の表情が少し和らいだ。

「はい」

「ご苦労様」

「仕事ですから」と彼女は返答して自分の機体のコクピットへ身体を飛翔させた。

「凄く怖かったんだけど…」

「アホな事言うからですよ。そういうからかいはもう止めた方が良いでしょう」

「彼女あんたの何よ？」

「新しい部下です」

「それだけ？」

「昨日初めて会ったばかりですよ。何も無いです」

「それだけじゃない気がする…」

いい年したハンナが怯えながら話すのが可笑しかった。

「ハンナさん、私の機体いじりました？」

ド派手なオレンジ色の機体からキショウ中尉の声が流れた。

幸い先程の覇気を帯びた声ではなかったがそれを聞いてハンナが肩を震わす。

「えっ！ あっ！ センサーチェックで火入れっぱだった！」

「作業はどこまで？」

「もう終わってるわ」

「ありがとうございます」

何でもない普通の業務連絡だが、キシヨウ中尉の声に怯えながらハンナが返答するので思わず笑いそうになった。

「何よその顔！」

「別に」

「なんかむかつく」

ハンナの八つ当たりにはやや困ったがおかげでキシヨウ中尉がまだまだ子供だということはわかった。

「作業中の格納庫内の者に告げます、MS出撃の為120秒後に庫内の空気を抜きますのでノーマルスーツの着用と、作業員でない方は待機ルームへの移動お願いします」

フィリアの艦内アナウンスが流れ、まだ作業中だった数人のメカマン達が切り良い所で作業を止めエアロックへ移動を始める。

だが予定に無い指示に対して皆が小声でちらほらと愚痴をこぼしていた。

「全く怠慢だな」とアーノルドも愚痴をこぼしながら俺の機体から降りてくる。

「窒息する前に行くぞ」

先へ行こうとするアーノルドの服の袖をハンナが掴んで引き止める。

彼女はアーノルドの顔を見ずに俯いていたが表情は何か言いたげな印象だ。

「……………」

「なんだよ？」

「…あんたさっきの話全部聞いて何も言わないわけ」

「あの坊主か？ それとも娘の方？」

「両方よ馬鹿！」

「…はあ」

アーノルドがハンナに返した声は深い呆れた溜息であった。

「ロビンの事は俺にもそれなりの考えがある。もう一つの件はいくら俺を妬かせたくても相手がマークじゃ無意味だ」

「…はい？」

彼の言葉の意味が解らず我ながら阿保みたいな声が出た。

「さっさと着替えて仕事に戻るぞ」

「…！」

ハンナは駄々をこねる子供の様に拗ね、俺達を残して先にエアロックへ向かう。

「何です？」

「俺が仕事ばかりで寂しいんだよ。昔はお互い様だったのに最近急にな…行くぞ」

なんだか二人ともらしくない。

俺はアーノルドがいつもとなんなら変わらない風体を装っているのを
つぶさに感じながら二人でエアロックに向かう。

エアロックの中は更に両隣へ分厚いドアが設けられており、そこで
メカマンとMSパイロットは双方の更衣室に分かれる構造だ。

そこでアーノルドと別れパイロットの更衣室に入るが中は空っぽで
俺の他にパイロットは居ない。

俺は一人寂しく無人の更衣室の中央まで進み自分のロッカーから黒
地にライトグリーンのラインが入ったパイロットスーツとヘルメッ
トを取り出しそれを身に着ける。

パイロットのノーマルスーツは繊細な動きを必要とするので一般の
物と異なり装備が短略されていて宇宙服としてはなんとも頼りない
印象だが、AED等の生命維持装置はしっかり装備されている。

また同様にメカマンのスーツも一般向けとやや異なる。

それはメカマンが一般兵より比較的危険地や危険物の取り扱いが多
いので肩、胸、肘、膝等のシールドが厚く作られているからである。

よって重さも1割増しで着こなす事自体が容易でない。

パイロットスーツは逆に一般向けより1割近く軽い。

間もなくして更衣室内のモニターが自動で起動し、画面にグレンの姿が浮かび上がった。

「まず皆に予定外の出撃をさせる事を詫びる。これから余興を兼ねての模擬戦闘をキシヨウ中尉とパーソン中尉にやってもらおう事になった」

いつも通りのグレンの口調。

謝ってばかりだがこれが中々縦社会に生きてきた軍人からすると好印象らしい。

思うに皆今まで高慢な上司達にこき使われてきたからうんざりしていたのだろう。

「状況設定としては隕石群に潜伏する戦艦に一機のMSが戦列を離れて切り込み攻撃を仕掛ける。艦の方はMS一機を出撃させてそれを阻止するという想定だ」

01隊が襲われた状況を踏まえたわけか。

「そこで戦艦に攻撃を仕掛ける役をパーソン中尉に、戦艦の護衛をキシヨウ中尉に、戦艦役はもちろん本艦“ディープ・ヘルメ”だ。タイムリミットは15分、その間にパーソン機を撃墜すればキシヨウ中尉の勝ち。ディープ・ヘルメの撃沈、あるいはキシヨウ機が撃墜の場合パーソン中尉の勝ち。そしてタイムリミット15分を越え

た場合もパーソン側の戦列が本艦を射程に捉えるのでパーソン中尉の勝ちだ。いいか？」

酷い状況だな。

この状況を普通に考えたら護衛側の勝率は25%以下。

だがこれでようやくロビンと五分五分でやれるってものか。

「マーク。こっちでもう始まつてるから早く来い」

不意に背後の扉を開け俺に声をかけてきたのは整備副長のロークだった。

俺は促されて向かいの更衣室に向かう。

中に入るとパイロットの更衣室とは打って変わって散らかった室内だったが、とても賑やかで居心地は良い。

だが何故か更衣室の中央に置かれたベンチの真ん中には握りしめた様な皺くちやの札の山が積まれている。

「絶対ボウズが勝つな！」

「いやいや女の底力を甘くみない事ね！」

「あの想定じゃいくらなんでも不利過ぎるだろ姐さん！」

どうやらすでに賭けが始まっているらしく皆熱苦しいほど盛り上がっている。

「お前はどつする？」

右隣から声がしたので見ると着替えを終えたアーノルドが腕組みをして無煙パイプを口にくわえながらロッカーによりかかって立っていた。

アーノルドは冷静な表情で盛り上がっているメカマン達を眺めている。

「どつちに賭けるか？」

「いや、結果なんぞ目に見えてるから参加するかしないかってレベルだよ」

「遠慮します」

「右に同じ」

周りは10だ100だと札をベンチに押し付ける奴ばかりで面白いが、それに一切参加せずに眺める俺達二人もまた異様な味を漂わせていて面白いかもな。

「ならあんたらの予想教えてくれよ」

「それじゃあお前から金取るぞローク」

小声で俺達から予想を聞き出そうとしたロークをアーノルドが言葉で突っぱねた。

にしてもこういう時のメカニクマンはいつもこうだ。
飽きないのか？

「姐さんは自分の機体だからだろ？」

「あの機体を乗りこなす娘よ！？ 勝って当たり前じゃない！」

「それもそうだ！ 俺はお嬢ちゃんに20！！！」

そんな結果が出なきゃただの意地の張り合いじゃないか。

本気でうるさい。

「いつも通りに見えるか？」

隣のアーノルドが聞き逃しそうな小さな声で俺に聞く。

「ハンナさんですか？」

「あいついつもと同じ様に見せてると思わないか？」

「…まあ」

「…そうか」

やはり二人とも変だ。

賑やかな声と風景を眺めているとまた更衣室の扉が開いた。

「やっぱり盛り上がってるな、俺は小僧に50だ」

「デイー、やつと来たか！」

中に入ってきた黒地に青いラインの入ったパイロットスーツを着た男はMS隊副隊長のデイー・ビーツ大尉。

昔に俺へMSの指導をしてくれた大先輩だ…

美女と野獣

男が本を読んでいる間にコーヒーを飲み終えてしまったので黒服は気をきかせてコーヒーのお代わりを注文した。

それを受け熊髭がカウンターの向こうでコーヒーを淹れる。

熊髭はトレイに二つのコーヒーカップを乗せてテーブルまで運び、丁寧に空になったカップと置き代えた。

だが熊髭はカウンターに戻らずにトレイを抱いて読書をする男の姿をじっと笑顔で見詰めている。

「……………」

「……………」

「…目障りなんだが」

「それは失礼を！ ……何ページまで進みましたか？」

「…？ メカニックが賭けをする場面だ」

「“ディー” ってキャラクターが出て来た所ですよね？」

「そうだが？」

「どうですそのキャラは？」

「聞かれてもまだ名前が出ただけだよ」

男は熊髭の問い掛けに苦笑雜じりの返答をする。

「お前のお気に入り登場人物か？」と黒服が熊髭に質問。

しかし熊髭はそれに答えずに不気味な含み笑いをして場を気色の悪い空気で満たそうとする。

思わず黒服は「…何だよその笑いは？」と問い掛けるが熊髭は不気味な笑いを止めずにそのままカウンターに戻っていった。

「お前の笑い方はどれも特徴が有り過ぎて気持ちが悪いわ…」

黒服の本音とも冗談とも取れる言葉を聞いて今度はガハガハ笑いをする熊髭。

この山男の様な風体の男は見ていて飽きない部類の人間であるが。

四六時中一緒に居たらさぞかしうざったい存在だ。

おまけに「それが俺様よ！」と変に自慢する辺りが尚更うざったい。

そんな漫才の様な滑稽な空気漂う店のドアが唐突に勢い良く開き、一人の女性が店内に飛び込む様に来店してきた。

「たっただいまぁー！」

「よう、お帰り！　ってお前いい加減裏から入れよな！」

「だって狭くて汚いから」

驚いた事にその女性は古本屋の娘だった。

男と黒服は哑然と彼女と熊髭が仲良く会話をする光景を本当に現実に起こっている出来事なのかと疑いながら眺めている。

「なら客が居るか確認してからにしろ」

「いつも客なんて居ないじゃ……」

彼女は振り向きながら言葉を言いかけたが視野に黒服と男を認めて留まった。

「ごめんなさい！　いらっしやいませ！！　……？　ってお客さんじゃないですか！？」

「ああ、お客だよ」

「違っつて！　うちの古本屋の！！」

「知ってるよ」

「……えっ？」

唐突に登場した彼女の存在でこの寂れた喫茶店の雰囲気明るく華やいだが。

同時に男と黒服は共通の疑問を抱いた。

それは『彼女と熊髭の関係はいたい何だろう?』である。

「よくお前の仕事ぶりをこの方から聞いているよ」

二人で勝手に話が展開しているので黒服は「あのおく?」とお伺いをたてる。

それを見て熊髭が「…ああ、すまんすまん」と話の輪に男達も引き入れた。

「びっくりしたろう。こいつは俺の姪だ」

「…まぢ?」

「姪っ子でえゝす」

娘は愛嬌良くお辞儀をして挨拶。

「…うそ」

「本当だよ」

黒服は目の前の事実を否定したいかの様な呟きを吐く。

「だって全然似てないし」

「別に親子でもないし、こんなもんだろ」

熊髭は顔に苦い笑みを浮かべて返答する。

だが男も黒服と同じ感想を抱いていた。

「私のお母さんも叔父さんに似ないで美人だから」

「どうせ俺の見た目は獣か何かの類だ！」

娘の言葉に熊髭は嘆きの言葉を返すが。

その後二人は顔を見合わせて笑いだした。

嫌味な言葉でじゃれあえる二人の様子からすると確かに親しい関係
と思える。

それに見た目の印象は違えど豪快に笑う二人の笑い方も同じ血が流
れる証拠だろう。

「俺に隠していたのか？」

「あつ！？ いえ！ そんなつもりでは！！」

「ハハハ！ 言うタイミングが無かったんでしょ？」

男の質問に対してうろたえてる熊髭を見て姪っ子は柔らかなフォロ
ーを入れるが。

そのフォローは次の黒服の言葉によって看破される事になった。

「違うだろ。俺達に似てないって指摘されるのが小恥ずかしかった
んだろ」

「ハハハ… いやその… うん…」

いつもの様に熊髭は笑ってごまかそうとしたが。

今回は思いの外素直に認めた。

しかしやはり小恥ずかしいかったのであろう熊髭の表情からは照れが滲み出ている。

「それに姪っ子がお前の顔にそっくりだったら親戚一同落胆する」

「はは、確かに。待ちに待った孫娘がこの顔だったら変な気苦労が増えるもんだ」

黒服が付け加える様に言った冗談に店の中に居た皆が笑った。

大男は自他共に認める自身の容姿に。

若い娘は叔父の笑う姿に。

ある者は友人の純真な心に。

そして男はその場の心地好い愉快的時間に笑っていた。

「今更んな事気にするもんでもないだろ。長い付き合いなんだから」
ぼろりと黒服の口からこぼれた言葉に対し男は敏感に反応し「こら！」と小声で黒服に釘をさした。

案の定黒服の言葉を耳にした娘は「長い付き合い？」と興味を示す。

「そういえばお客さん達は叔父さんとどういう知り合いなんですか？　なんか話聞いてたらただのお客さんと思えない感じだし」

「えっ？　いやなんて言うか…　まあ悪友であるのは事実かな」

下手なごまかしだった。

「へえ…　ねえ叔父さんどんな知り合いなの？」

ごまかされた彼女は核心を掴む為に、今度は熊髭に質問した。

もちろん男と黒服は真実を伝えてはいけないという視線を熊髭に送るが。

熊髭はそれを見て軽くうろたえていた。

「……　何と言うかその…　仕事が一緒でさ」

そう言っただけで熊髭はお得意のガハガハ笑いをしたが、額に汗して笑っていた。

「…！？　って事は軍人さんなの！？」

バレた。

男と黒服の二人は共に熊髭を『情けない』と思い苦笑いをするしかなかった。

男達の職種を知って娘はウキウキとして二人のテーブルに近付いて

いく。

「なんだ。そうならそうと早く言ってくださいよ!」

彼女はそう言うのと黒服の肩を豪快に一発叩いた。

あまりの痛みに黒服は軽く呻いたが直ぐに彼女に向いて笑顔を作った。

それを見て男は声を堪え笑う。

「あれ?」と娘はテーブルに置かれた本に気付く。

娘は本のしおりが挟んであるページが大分進んでいる事に気が付いた。

「またハイペースで読んでる…」

「そうか?」

「そうですよ。私的には内容を結構濃厚で複雑にしたつもりなのに、そんなに早く読まれたら困ります!」

娘の言葉に男は「ゆっくり読んでいるとも」と苦笑いしながらの返事。

誰かに似てなんとも活発で元氣潑刺とした彼女の姿は皆を楽しく愉快な気持ちにさせている。

娘の言いように気圧される男の姿を静かに見ていた黒服と熊髭の表情もやはり笑いを含んでいた。

「ちょっと貸してください！」

娘は本を取り上げてしおりの挟みであるページを開いた。

「……………」

彼女が本を読む姿を黙って見守る三人。

「……あー！！」

突発的に出た娘の声に皆が肩を震わせた。

「もう“デー”が登場してるじゃないですかあ」

ページに記されていた内容を読んで娘は誰に向けるでもなく愚痴っぽくクレームをこぼした。

「せっかくだからこのキャラクターの事を説明してから読んでもらおうかと思ってたのに……」

娘はわざとらしい落胆を口にして男に本を押し付けた。

「ハハハ、まだ名前を読んだくらいだから大丈夫さ」

黒服はそのわざとらしさを知ってか知らずか彼女へ笑いながら言葉をかけた。

「何で解るんですか？」

「さつきマスターも『何処まで進みましたか?』って話してた所だったからさ」

彼女が店へやって来るまでの男達の会話の内容を知った娘は「そうなんだあゝ」と微笑んで、熊髭のいるカウンターへゆつくりと振り返り、彼へ何やら言葉にしにくい含みのある視線を送っている。

「なになに?　なんか訳ありかあゝ?」

この状況で口を挟む様な奴は野次馬でしかないが、それは黒服だった。

これが彼の性分なのであろう。

「訳ありも何も“デー”のモデルは叔父さんなの」

「ハッハッハ!」

店の中に熊髭の笑い声が響く。

「はあ?」

「叔父さん元軍人だからいろいろアドバイスもらうついでというかお礼の気持ちで書かせてもらったの」

作者である彼女の叔父に対する粹なはからいを知り男は「とんだゲスト出演だな」と熊髭に暖かな視線を送る。

「何か俺も少し読みたくなってきた…」

「大分脚色されていて実際の俺よか男前になってるがな」

なんとも嬉し恥ずかしい表情で熊髭は微笑んで語る。

それを見て黒服は「タルトだけではあきたらずかよ」とまた冗談を言う。

「あら、タルトまでいただいてくれたんですか！」

「ああ、美味しくただかせてもらったよ。あれは君のレシピらしいね」

男の褒め言葉を聞いて彼女は「なんか恥ずかしいなあ」と少し頬を赤くしてはにかんだ。

「いやたいしたもんだよ！ あんなに美味しいタルトを作れるなら嫁入り先には困らないね！！」

「……………」

たかがタルトで何故娘の嫁ぎ先の話で黒服は切り出したのか皆理解出来ず沈黙する。

「…やだもう！ お菓子の一つや二つ作れますよそりゃ」

軽く戸惑った様子で黒服へ言葉を返した娘の姿を見て熊髭は何か不服そうな表情を浮かべ、カウンターの途中で腕組み仁王立つ。

「…なに勝手に話進めんだ。レシピはコイツだが実際に作ったのは俺だよバーカ」

「知ってる。でもレシピは彼女だろ」

「いちいちうるさい奴だなお前は」

二人の痴話喧嘩を見て男は『幾つになっても血気盛んなガキのようだ』と思っているのだろう、黒服と熊髭の昔の姿を思い出しながら微笑んで眺めている。

「ハハハ、それじゃお邪魔みたいだから私は上に行くね」

娘は仲良く喧嘩する二人の姿を見て遠慮したのであろう、邪魔にならないよう配慮し熊髭へ一言告げてカウンター奥にある階段へ向かう。

「古本屋はもうイイのか？」と階段に足をかけた彼女の背中へ熊髭が声をかける。

「今日は大丈夫だから書くのに専念しといてって帰されたの」

階段で反響した声を熊髭達に残して彼女は2階へ上がっていった。

彼女の気配が消えた店ではオーディオから流れるチェロの穏やかな響きで会話のない店内を寂しく演出している。

それはまるで嵐の去った後の静けさだ。

「あいつ自分の言いたいことだけ言って挨拶もなく行きやがった」

「まあ良いではないか、ここは軍隊でもないし戦争も終わった」

「しかし礼儀はわきまえませんと」

「一般家庭ではこんなもんだろう、それに彼女と一緒に住んでいるのならばここは彼女の家とも言える。違うか？」

男は本をテーブルに置きながら明朗な語り口で自身の考察と推理を熊髭にぶつけた。

「大佐には隠し事が出来ませんなあ」

堪忍した熊髭は自白の台詞を呟く。

「えっ！　じゃ今あの娘と一緒に住んでるのかよ！！」

二人の話を聞いていた黒服は驚いた表情で熊髭に問う。

だが熊髭は黒服の質問にすぐ答えずに、彼へ冷ややかな視線を送り一言告げる。

「…だから？」

「あんな可愛い娘と一つ屋根の下で住んでるならもつと早く教えてくれよ」

「なんで俺が逐一報告しないかんのよ」

「つれねーなあ」

どうにも熊髭は姪っ子と一緒に住んでいる事を黒服に知られたくな

かつたらしい。

それは恥じらいとはまた違つ、親心のような気持ちから来る感情なのであろう。

「まあいいではないか、しかし少し気になる事があるのだが？」

「何がです？」

「彼女は私達が軍人と知つたのに、それ以上詮索をしなかつた所が妙に気になる」

男の抱いた疑問に熊髭は思い当たるものがあつたのであろう「ああ」と軽く声を上げて男の疑問に答え始めた。

「あいつなりの氣遣いをしたのだと自分は思います」

「どういう意味？」

「軍人つてのは人の生き死にが仕事だつてのをあいつはよく知つて
いるからよ」

重たい言葉が続く。

「軍人は偉いとか野蛮とかそんなもんより、それしか能のない人達の
苦しみに悲しくなつちまう優しい子なんだ。叔父がこんなんだか
らかな……」

そう言つと熊髭は己の右足を憐氣に見た。

「なるほど。あれは彼女が自分の好奇心を最大限我慢した結果か」

「おそらくは」

「…すまん。なんか悪い事聞いたな」

三人の会話に先程までの賑やかさは無い。

戦士として生きてきた彼等が今までどれ程の死線を抜けてきたかは計り知れない。

しかし戦争が終わった今も彼等の心と身体に刻まれた傷は癒えず痛み続けている事は容易に想像出来るだろう。

あの娘はそれを知るが故に慎んだのだ。

「通夜の様な空気にしてしまったな… マスター、曲を変えてくれないか？」

「わかりました。何にしましょう？」

「j a z zにしてくれ。あるだろ」

「デイヴ・ブルーベックなら幾つか」

「それでいい。お勧めを頼む」

男のリクエストを聞き熊髭は小さく「かしこまりました」と彼なりに上品な返事すると男達から姿を消す様にカウンターの途中でしゃがんだ。

間もなく鳴っていたチェロの曲が止み、リズムカルなピアノ曲に変わる。

「ありがとう」

「お安い御用です」

「もう杖を使わなくてもしゃがんで大丈夫なのだな」

「ええ、最近の義足はよく出来ていてあまり痛みませんから」

一見すると熊の様な大男の店主だが。

彼の右足は義足である。

これが彼の戦争の傷であり、喫茶店の店主になったきっかけだ。

「それならいつでも復帰出来るな」

「いや、もうお断りだね」

「あらま」

先程の様にふざけた口調で黒服との会話が始まった。

「失くした時は悔しかったが。今となってはこの足のおかげで引退出来たし、念願の店も持てた」

「言っねえ」

二人の掛け合いで再び店内は賑やかな空気になる。

男の表情もにこやかだ。

「ハハ、心配ご無用だったな」

「おかげさまで」

「いやはや、本当にお前は前向きで気持ちが良いよ」

「お褒めにあずかり光栄です」

「大佐は嫌味も含んで言ってるんだ！」

黒服が継ぎ足す様に一言告げると男は大きな声で笑った。

二人はそれに釣られて笑う。

「いやいやすまん。ではそんな愉快的なマスターをモデルにした“デュー”の活躍を拝見するよ」

男はテーブルに置いていた本を手取る。

熊髭はそれを見て彼がまだ本の読み途中であつた事を思い出し「これは失敬！」と詫げる。

「いや面白い話が聞けたのだ。謝る必要は無いよ」

優しい口調で熊髭に告げ男はしおりを挟んだページを開き続きを読

みだす…

むさ苦しい連中・2

「坊やに賭けて良いの？ 絶対後悔するよ」

「一応俺とバディを2年以上やってるから賭けなきゃ拗ねやがる」と先輩は笑う。

バディというのは二人一組の班の事で、独立隊のMS部隊で使用するシステムだ。

本来は海軍等で用いられるが、少数精鋭を束ねる組織の大概は小隊でなくバディ・システムを採用するが多い。

「それは可哀相に、あんたも大変だね」

「そうでもないさ、なにせあいつは俺の弟子だからな」

弟子？

「あいつに何か仕込んだんですか？」

背後からかけた俺の声に気付き先輩は俺の方へ向く。

「おお！ そんな所に隠れてたのか」

「別に隠れてた訳じゃないですよ」

「じゃあ何か？ 二代目ブラックホーク様は相変わらず鷹だけに高見の見物か？ いい加減郷に入っては郷に従えよ」

そんなギャグじゃ笑えないって。

元々“黒い鷹”は俺の先輩デュー・ビーツ大尉の異名だった。

俺が先輩と同じ隊にいた時、俺は先輩独自の操縦テクニックと戦闘スタイルを学びパイロットとして優秀な戦績も得た。

すると先輩は『これで安心して引退出来る』とし俺に異名を譲って彼はMSから降り出世街道に向かう為前線から離れたのだ。

しかし…

先輩はMS操縦以外はからっきし駄目だったらしく、結局此処に流れていたんだとか…

先輩から賜った“黒い鷹”の名に恥じない仕事はしてるんだから、俺のスタンスにケチは付けて欲しくないものだ。

「隊長様々は負けるのが怖いのよ」とハンナも俺に煽りを入れたが、んなもん構う事もない。

メカマンの戯れの中エア抜きを終了を告げるブザーが鳴り、更衣室内に設置されているシグナルがレッドからイエローへ切り替わる。

アーノルドは『待ってました』と言わんばかりに「お前等、さっさとバイザー下ろして戻るぞ」と他のメカマンを急かし立て、メカマン達もそれに応え直ぐさまベンチに積まれた皺くちやの札を一つのロッカーに詰めてキーロックをかける。

「姐さんココに入れますよ。勝った方が山分けだ！」

「いつまでグズグズやってる！ 行くぞー!!」

アーノルドの急かしの言葉は毎度暴力に近い怒号である。

しかし慣れとは恐ろしい。

メカマン達は皆彼と付き合いが長いので全員が「へえーい」という気の抜けた返事をするのだ。

それに関してアーノルドも怒らずに独りそそくさとドアを開けてエアロックに入っていく。

ヘルメットのバイザーを閉じながらハンナが先輩に問う。

「あんた等はどうすんの？」

「俺は見学さ、あの小僧がどこまでやれるかのね」

「それだけ？　なのにパイロットスーツを着るの？」

「念のためだよ。何か起こる気がしてな」

「また勘？　あんたって本当に変よね」

それを言いながらハンナ達は更衣室から出て行った。

メカマン全員が更衣室からエアロックへ移り、俺と先輩はまるで皆の留守番をするかの様に残る。

「さて、俺達はどつするよ?」

「とりあえずパイロットの更衣室に移りませんか?」

「いや、あそこより此処の方が居心地が良い。それにおっさんの事だ、バルーンやら無人偵察出してもニターに中継映すだろ」

「まあ確かに、それより…」

先輩は俺の声を遮り言葉を発する。

「何を仕込んだかだろ。何もしてないよ」

俺は先輩の言葉を黙って聞いてはいたが、先輩が何もしない訳ないと思っていた。

この人は自分が思う以上に面倒見が良い。

同じ隊に居た時なんか俺は既に自分の操縦技術はトップクラスだと思っていた。

だがこの人だけは俺の操縦に不服でそれとないアドバイスをよくしてくれた。

若かった俺はそれを不快に感じたが先輩の指摘は鋭く的確を射ていた。それで俺は彼の操縦技術に興味を持って、副座型に乗った時に彼の操縦をじっくりと見て驚いた。

先輩は一見不要と思われる程に細やかなペダリングやスティック捌きを駆使して機体を動かしていた。

近代のMSは優秀な操縦補助システムを搭載しているのに彼はオールドタイプでありながらマニュアルで機体の姿勢制御と連続高速旋回を熟すのだ。

彼の“黒い鷹”の異名は鷹の様に空中高速戦にて敵機を近接格闘の一撃で仕留めるといふ卓越した超絶技巧の称号なのだ。

まして彼はその技術を他者に惜し気もなく教える。

だが先輩の20年以上のパイロット経験の中でその技術を完全習得出来たのは俺以外誰一人居ないらしい。

しかしながらロビンのひたむきさを考えればもしかすると…

「あいつは馬鹿だ、未熟な己を自覚し過剰な努力をする。まさに熱血馬鹿だ、しかも俺が見たどの熱血馬鹿より大馬鹿野郎だ」

「それは褒めてるのですか？」

「ああ、あの小僧は本当に良いセンスは持っている。まあお前には遠く及ぶんだが、努力はお前の10倍はしてる。そのくせ成長はお前より全然遅い。馬鹿だろ」

散々ロビンを馬鹿呼ばわりした先輩は楽しそうに笑っていた。

「飲み込みが悪すぎて面白いヤツだよ」

先輩の言葉は本当に聞く人が聞けば激怒される表現ばかりだ。

まあ裏のないストレートな表現なので助言に関してだけ考えればこれ以上はない。

「言い過ぎですよ。ですが弟子とは？」

「ん？ 小僧の方から『弟子にして下さい！』って頭下げてきた」

「それですか」

「面白いガキだよ。俺達に師弟なんざ無いのに、皆仲間の技術を盗んで応用利かせて自分のものにしてる」

おっしやる通りだ。

俺も同じ黒い鷹だが、強化された身体を頼りに深くペダルを踏み先輩以上の加速Gを検伏せるスタイル。

繊細なペダリングの先輩とは違う。

「そっいえばお前のバディは？」

「居ません」

「おいおい隊長だろ。いくら個人主義でもそらねえーよ、早いところ選りなつて」

バディ・システムは軍や隊から押し付けられる規則ではない。

MS隊の者が互いに望み要請して成り立つ。

よって一方が相手にバディを望んでも相手側が拒めばバディは成立しないのだ。

それ故にバディを組まず任務を熟していた異端児も幾つか前例がある。

いわゆる天才というやつだ。

だが俺はそれになりたい訳ではなく、単に誰かに自分の背中を預ける状況を好ましく思わないだけだ。

「俺の意思で選べとなるとあなた以外に望むパイロットはない、ですがグレンから頼まれているのでこの模擬戦を見てから決めようかと」

すると先輩は何に驚いたのか「ちょちょ待った！ 嬉しい言葉の最後にお前何か変な事言ったな？」と俺に詰め寄り問うた。

「頼みつてまさかあのサイコ娘か！？ またおっさんはお前にお荷物背負わせるのかよ」

「荷物になるかは分からない、もしかすると俺が彼女の荷物になるかも」

「ハッハッハ、ともかくそうなるなら出撃前に声かけ行かないとな」

先輩は俺の肩へ腕を回してエアロックに導こうとする。

この人は昔からこんな風に何かにつけて人を巻き込む。

「なんで一緒に行くんですか？」

「勘違いすんな。俺は小僧に、お前は娘に試合前の景気付けだ！」

面倒くさ…

コクピット

「エア… 推進剤… エネルギーゲイン… 各内蔵武装…」

ハンナさんの手が入ったばかりなので機体の調子は万全と言った所。

次に機体交換の為の記録作業をハンナさんから事前に報告されていたアーム・レイカーの調子を見る為マニピレーター（MSの指）を軽く動かす。

「右腕部… 左腕部… 動作に異常無し」

流星はプロ中のプロの仕事、記録作業のついでに調整まで戻してくれた様で前に乗った時よりもかなり動きが軽やかになった。

パネルを操作しPCをデータ収集モードに切り替える。

「いつでも私は不利に立たされるのね」

思わず出た呟き。

先程の艦長の放送で今回の想定は理解したけど、何か愚痴を言いたくなった。

まあ外に出られるのは嬉しいから良しとしましょう。

「キショウ中尉」

フィリアさんの声でブリッジから通信。

「ミノフスキー粒子を戦闘濃度と同じにしますので通信回線をこちらにチャンネルしといて下さい」

指示に従い目の前のパネルを操作してチャンネルを合わせる。

「了解しました」

近代の戦争においてミノフスキー粒子は欠かせない。

粒子の磁場を発生する特性はミノフスキー効果と呼ばれ電波通信を妨害し無人戦闘機や長距離ミサイル等の無線誘導弾をほぼ無力化した。

ミノフスキー粒子の登場で旧世紀に常套化していた超長距離攻撃の総てが覆り有人汎用兵器が最も優位な時代が訪れ、その代表がモバイルスーツだった。

人型で5本の指を持つマシンは多様な環境に適応し戦場を選ばない、ミノフスキー粒子散布下においてMSは正に最強の兵器。

模擬戦でそこまでやるかって感じだけど。

私はパネルの操作を続けてビームを模擬出力に切り替えていた。

ふと全天モニターに目を移すとエアロックから入ってくる黒いパイロットスーツを着た人影が二人映る。

全天モニターはMSの各所に設置されているカメラから入ってきた映像をCG再現し投影しているので人物の顔までは分からない、だ

が私はそのうちの一人を見て『あの人』だと直感した。

私の乗る機体に向かってきた彼を見て思わず私はマニピレーターを操作し左腕部へ彼を乗せてコクピットに近付けた。

「少佐ですか？」

「ああ」

胸が高鳴った。

そして言いようのない自分の想いに言葉が詰まった…

「郷に入っては郷に従え”ってやつさ」

「…えっ？」

「何でもない」

「ええー、なんか気になるから言っておさいよ」

自分でも解る。

この人と話している時、私は喜んでいる。

喜んでしまう。

「…お前なあー」

「接触回線なら誰かに聞かれてる訳じゃないし良いじゃないですか」

「…まったく」

少々図々しかったかな。

「ただの景気付けだ、俺はモニターしてるつもりだったがビーツ大尉に拉致られたのさ」

「嫌々の景気付けなら要らないです」と私は拗ねた調子で言う。

だが少佐は予想外に私の言葉に食いついてきた。

「そうじゃなくて、…君は誰かに応援されようが自分の仕事をするだけだろ」

そうかも知れない。

…事実そうだった。

今まで数々の実戦演習をして、その度に毎回演習に参加もしない連中から『勝て』や『頑張れ』だと言われても私は何も感じず、むしろ邪魔に思った。

だって実働するのは私なのだから、その時その瞬間に自分の能力を発揮すれば然るべき結果が着いてくるのだから応援された所で能力が上がり結果が変わる訳じゃない。

…けど。

少佐の言葉を聞いてから私の両肩から背中には寒い様な感覚が走った。

胸にも重く冷たいものが渦巻く。

装甲を隔てモニターに映る彼の姿も何故か暗い闇の中へ遠退いていく気が…

少佐が凄く遠く離れる様に感じる…

…嫌だ。

「ちゃんと模擬に切替たか？」

「…えっ？」

「模擬に切替たのかって聞いているんだ」

「ああ、はい」

「…大丈夫か？ 体調が優れないなら…」

少佐は私の様子を心配し話し掛けるが私はそれに耳を傾けず、抱いた強い感情を声に乗せていた。

「あの！」

ヘルメット内に響いた私の声に少佐は少し驚いて身じろぎした。

「…私、少佐からは応援されたいです」

自分でも変な事を言っていると思った。

しかし私は続けて思った事総てを口に出していた。

「だからそんな理由で私を応援するの止めないで下さい」

少佐はじつと黙って聞いていた。

私からまさかそんな風に言われるとは思わなかったのだろう、何せそれを言う自分自身に私も驚いているのだから。

でも言い切ってから私は凄く所在無さ気になって戸惑い、モニターに映る少佐の影すら直視出来ず目を背けてしまう。

「……ごめんなさい、今は忘れて」

「いや、俺の方こそ無神経だった、謝る」

「少佐は何も悪くありません」

貴方がそばに居て欲しいのに、今の私の姿を少佐に見せたくない。

「キショウ中尉、君に命令を出す」

命令？

「必ずロビンに勝て！」

「……………」

「俺はお前が必ず勝つと信じている、そして面白い勝負にしてくれるともな」

『勝つと信じてる』

色々な人から何度も聞いた台詞。

何度聞いても何も感じなかった。

…でも今は違う。

「…ありがとう」

嬉しい。

少佐が私に話かける言葉の一つ一つが総て特別に感じる。

「礼はいらんよ。これは命令なんだから」

「…了解しました」

「じゃあよろしく頼んだぞ」

「はい！」

私の返答を聞くと少佐はコクピットから離れマニピレーターから降りようとする。

「もう一つだけ！」

呼び止めた私の声を聞いて少佐はもう一度こちらへ向く。

「どうかユリと呼んで下さい」

「…ああ、俺も二人で居る時くらいはマークで構わない」

マーク…

心の中で何度も彼の名を呼んだ。

初めて会った人なのに凄く大切な人の様な気がする。

「では行くよ」

呼び止めたい気持ちにかられるが、それこそ本当に我が儘になってしまう。

マークがマニピレーターから降りる姿を見て私はパネルを操作する。

モニターに映るCG映像をカメラから見た実際の映像に切替た。

私はただ彼の表情が見たかった。

待機ルームに向かう彼の姿を追う。

ヘルメットのバイザー越しに見える彼の顔は美しかった。

彼はドアの前で立ち止まり一緒にエアロックから出て来た黒いパイ

ロットスーツを着た大柄の男を待っているようだ。

「黒い鷹が二人か…」

二人が待機ルームの前に揃うと大柄の男の方がマークの肩へ腕を回して部屋の中へ連れ込む様に入っていた。

マークの表情は迷惑そうだったが、口元や目尻の端は笑っていた。

私は言いようのない思いを胸に抱く。

しかしそれは辛く不安な感情じゃない。
もっと優しく暖かい。

とても心地好い感情。

「…知りたい」

貴方の事が…

「パーソン中尉、目標宙域に到達しました出撃願います」

「了解！ キシヨウ中尉、先に出るぞ！」

オープン回線の通信連絡が入る。

パーソン中尉の声だ。

「了解です、どうぞお先に」

い
よ
い
よ
だ
...

裏方

ブリッジから青白い光の帯を引いて漆黒の宇宙を駆けるMSの姿が見えた。

「パヴチガンの発進を確認」

「パーソン機に通信し配置へ誘導」

「了解」

フィリアからの報告を受けグレンは次の指示を出し、彼女は機械を操作しパーソン機へ座標のデータを送信すると同時に口頭でも詳細をパーソン中尉に伝えた。

「ダミー及び偵察機配置完了、すぐにスクリーンへ投影しますか？」

「いや、まだ役者が揃っていない」

「はっ？」

「キショウ中尉だよ、二人が配置に着いてからだ」

グレンがクライシス准尉と話していると噂のご本人から通信が入り、ブリッジ内に彼女の声が流れた。

「こちらハンドレット、発進許可よろしいですか？」

「フィリア、キショウ中尉を出してやれ」

「カタパルトは？」

「目的は艦の防衛だ、遠距離へ向かわせる訳じゃない、デッキから直接で構わん」

フィリアはヘッドセットのマイクを指先でつまみキショウ中尉へ指示を出す。

「ハンドレット出て下さい、今回は防衛なのでカタパルトの使用はありません」

「了解」

キショウ中尉の返答からしばらくし、ブリッジ左側の窓からオレンジ色の派手な機体が姿を見せた。

機体はデッキを踏みブリッジの真横まで飛翔した所でテールバーニアが上方へ駆動して光を噴射、舞う機体を静止させた。

それを見たグレンは艦長席に引っ掛けてあるヘッドセットを手に取りマイクの部分を口に近付けた。

「キショウ中尉、この模擬は奇襲攻撃の想定だ、何処からロビンが来るか教えんよ」

「わかっています」

「声が楽しそうだな」

「まさか、これも仕事です」

「そうか」

キショウ中尉と短い会話を交わして通信を切った。

グレンはブリッジ要員全員へ指示を出す。

「クライシ准尉、偵察機のアングル調整、まずは艦内の全モニターに8番の映像を」

「アイアイサー！」

「フィリア、ロビンの配置は？」

「今到着しました」

「よし！ 今から60秒後に開始、二人にカウントダウンを送信しろ」

「はい！」

「ヘレンは両機と艦のモニタリングを、あとフィリアに代わって艦内放送も頼む、内容は解るか？」

「えっと… カウントダウンを読み上げればいいのですか？」

「…まあそれで構わん、頼むよ」

「…はい！」

グレンの適確な指示に従い皆は各々の仕事を熟す。

一人を除いて。

「自分はどうしよう?。」

「そうだな… ランス君は私と何か飲み物でも飲みながら観戦といこうかね」

「…こういう時の操舵手は暇でかなわん」

「ハッハッハ、今エンジン出力の計器を見ても意味無いしな。観戦も仕事だと思え」

「ベースボール中継のつもりで楽しませてもらいます」

「そのいきだ、では若き新星二人“アヒンサー & amp・ピットブル”の舞を拝見しよう」…

スタート

岩石を模したバルーンが浮遊し視界を遮っている。

しかしその先には黒い背景に光が点在し美しい。

まるで港にある灯台の光を乱反射する海の波間の水面。

「これは中々…」

人工的に作られたダミー岩石を除けばとてつもなく異質で神秘的な感覚。

宇宙には空気が無く靄も無いので遠近感が狂うからだ。

星々の光があまりに鮮明で何万何億光年も離れてると思えない、無限大に広い空間。

その光景は雄大さも感じるが、同時に閉塞感や孤独感も身に染みる様な痛々しさで心を刺激する。

そして私はこの光景と宇宙独特の浮遊感をどうしても求めてしまう。

依存症よね。

私はペダルを踏んでメインスラスタを吹かし、機体を艦の上方へ移動させる。

「遮蔽物の数といい、これはお互い攻めるにも守るにも難があるわ」

散布されたミノフスキー粒子も濃く、強いジャミングでレーダーの有効距離が制限されている。

スクリーンもダミー岩石ばかりが映り込んでいて機影が見えない。

「何処から飛び出してくるかお楽しみみて訳よね」

私が艦を襲撃するならジャミングで見えない5000m以上離れた地点から目視で船のエンジンブロックを撃ち抜き沈める。

でもパーソン中尉の機体は中距離高速戦闘用にチューンされたものだからそれは出来ない。

「…となると、！」

右舷後方から閃光が迫る。

だがそれは船を掠る事も無く通り過ぎた。

「スナイパーライフルじゃないのによくやるわね！」

閃光の来た方向へ私は機体を旋回。

「さあ次はどう来る？」

すると目前に見えるダミー岩石二つが消滅し、その後ろから濃紺のパヴチガンが真っ直ぐ突進してきた。

反射的に私はアーム・レイカーを操作し、ハンドレットが右腕に装

備するライフルのトリガーを引き模擬ビームを3発放つ。

しかしスクリーンに映るパヴチガンは左へ移動し回避、ダミー岩石に隠れた。

「ほお、なら！」

私はパヴチガンが隠れた岩石周辺の岩を3つ狙撃し消滅させ、ハンドレットを艦の右舷側へ移動して岩石と対峙させる。

敵が遮蔽物へ移動しながらこちらを攻撃させない為だ。

この状況になると相手は前へ仕掛けるしか手が無い。

「さてどうするの？」

パーソン中尉が前へ出て来ると思ったが、予想は外れた。

目の前の岩石そのものが私を目掛けて真っ直ぐ吹っ飛んで来たのだ。

「……！？」

岩石を撃ち抜く。

そして消滅した岩石の後ろには何も無い。

レーダーを見ると機影は艦のブリッジへ向かっていた。

「まずいー！」

ペダルをいっぱいに踏み込んでパヴチガンに迫り、左腕に装備されたシールドを叩き付ける。

衝撃でシートとスーツを繋ぐベルトが機能して身体を締め付ける。

だがその衝撃で怯んだのは軽量機のハンドレットだった。

パヴチガンは宙返りをする様に上方へ跳び上がり、ビームアサルトライフルを乱射しながらハンドレットの背後へ回り込む。

ギリギリで体勢を整えシールドで攻撃を防ぎながらもう一度シールドで体当たり。

二度目は衝撃に怯まぬ様スラスター全開で挑み、2機共に艦から距離を取った。

濃紺の機体はオレンジの機体を押し退け距離を取り、互いは再びライフルを構え対峙する。

「…残り13分30秒」…

ロビン・パーソン（前書き）

“小説の登場人物”

ロビン・パーソン：

23歳

地球連邦軍所属の軍人で階級は中尉。

同じく中尉のユリ・キシヨウをライバル視しているが、彼女は相手にしていない。

敬愛する人物の一人にマーク・ジユディゲルの名をあげるが、超えるべき壁としての認識が強い。

優れたパイロットでありNTだが直情的性格がその才能を潰している。

また独善思考の持ち主で熱血漢でもある。

ロビン・パーソン

「…ハア、…ハア、…ハア」

体当たりの加速Gで呼吸が乱れる。

「何が“バルーンを使ってみる”だ…」

師匠の言葉を信じやってみたが、結局阻止されてしまった。

一度目の体当たりは一時的な衝撃で大したものではなかったが、二度目の体当たりは速度が早過ぎて軽く意識が飛んだ。

おかげで艦に再び接近するのが困難な位置まで押し運ばれてしまっている。

「スピードは互角か、それ以上…」

女のくせにやる。

こっちの武装は両腕共にビームアサルトライフル。

「射程が短過ぎる」

だが弾数はハンドレットの凡庸なビームライフルより多く、連射性能に優れる。

「中距離で持久戦に持ち込めば勝てる！」

軽くペダルを踏み込みハンドレットに接近しながらトリガーを引く。
連射される模擬ビームの光がハンドレットに迫る。

ハンドレットは上体を反らして後退しながら乱射されたビームすべてを回避し反撃の為、パウチガンの右斜め下方に回り込み姿を消した。

「何処だ!？」

全天モニターには左斜め下に小さく艦が見える以外は岩石ばかり。

今攻撃対象を再び戦艦に移したら確実に狙撃される。

俺はライフルの仕様を連射から単発のセミオートに切替、息をゆっくりと整えながら瞼を閉じる。

すると上方から何か嫌なものが迫ってくる感覚がした。

瞼を開け、慌てて姿勢制御をするとビームが目の前を通り過ぎた。

「クソッ!」

俺のパウチガンはシールドを装備していないので、一発でも当たれば負けた。

「よく解ったわね」

無線通信でキショウ中尉の声がヘルメット内に響く。

「一応はニュータイプって訳ですか？」

挑発的な言葉があまりにムカついたので感情のままの言葉を無線で彼女にぶつけた。

「ほざけクソ尼が！」

「言葉が汚いです」

「他になんて言えばいい！？ 腐れ尼か！」

「呆れた…」

「呆れたのはこっちだ！ 演習で体当たりかます馬鹿女が言う台詞じゃないだろ！！」

「私は格闘戦が得意ですが、サーベルを抜く間がなかったので体当たりでご勘弁を」

「ホントにムカつくな、お前！」

「ならもう隠れませんか、パーソン中尉が得意な戦闘に付き合います」

…こいつ！

捕捉したハンドレットへ向けライフルのトリガーを繰り返し引き、模擬ビーム弾を5発放つ。

「…！？」

ハンドレットは回避運動らしい動きもせず、ロックオンされて放たれたビーム弾5発全てを避けた。

弾道は確かに命中コースのはず。

「何故だ！？ 有効射程距離内だぞ！？」

ペダルを踏み込んでロックオンしているハンドレットの左側へ回り込みながらビームを4発続けて撃ち込んだ。

だがまた当たらない。

弾道は先程と変わらず命中コースを通っている。

ハンドレットが反撃のビームを3発放つ。

ペダルをいっばいに踏み込まないと避けられない。

「…んっ！」

加速Gに堪え3発全てが通り過ぎてからペダリングし、ハンドレットの背後に回り込みビームを3発撃ち込む。

しかし当たらない。

確かにロックオンしている。

にも関わらずハンドレットはスラスターの一つも吹かさず、回避運動も無しで全て避けている。

「センサーが逝かれてるのか!？」

ハンドレットがテールスラスターを吹かし上昇しながらビームを放つ。

こっちは避けるので精一杯だ。

「もう一度!」

再度ビームを放つ。

だが命中しない。

ビームにホーミング性能は無いにしても、ロックオンしている標的が回避運動無しで避ける等…

「何故だ!？」

暖簾に腕押している様な手応えの無い不思議な現象に齒痒さと無力さを感じる。

「自分がどういう状況に置かれているか解らないのね…」

キショウ中尉の言葉が虚しく響く。

悔しい…

観戦

待機ルームのモニターに投影される映像を観てメカマン達はオープン回線内で熱い歓声をあげている。

「よっしゃー！ スゲー模擬だよこりゃ！ こっちも賭け甲斐があるってもんだぜー！」

「まさかこんなイイ勝負になるとは、二人とも噂より全然良い仕事するじゃん！」

確かに全体的には良い勝負だ。

しかしさっきからユリはほとんど軽量高速機らしい動きを見せず、ロビンばかりが動き回っている印象。

「あの馬鹿、さっきから右へ右へ避けてやがる。まんまと乗せられやがって」

メカマンが突っ立て騒ぐのを横目に先輩と俺はベンチに座って観戦している。

先輩は俺の左隣で立て肘ついて二人の戦闘を冷静な眼差しで見つめているが、しっかりロビンへの愚痴は口走っていた。

「俺が考えた作戦が失敗した時点で勝機は無くなったな。俺の金が……」

自分で賭けときながら落ち込むのか。

「あんなに無駄弾撃ちやがって、頭に血が昇って自分の攻撃が当たらない理由が解らんらしい」

「AMBACステップ」

「ああ、お前もよく観てるな。大したパイロットだよあの娘」

AMBACはMSの四肢の質量移動を用いた姿勢制御方法で推進剤をほとんど消耗しない。

なのでスラスター使用時の発光も無い。

スラスター使用が無い為に座標が動かずロックオンが外れる事もないので相手は敵が姿勢制御した事にすら気付きにくい。

だが確実に回避運動はしているのでビームを掠める様な紙一重の回避をされ、攻撃した当人は回避された事実疑問を持つ。

またそれだけで連続回避運動を行うことをパイロットの専門技術用語で『AMBACステップ』と呼ぶ。

理屈は単純な連続姿勢制御なのだが、戦闘時に活用するのは極めて難しく習得するには長い修練が必要、一流のパイロットでもこれを熟せる者は少ない。

攻撃側も見極めの難しい超高等技術だ。

「あんなもん使われちゃいくら小僧が高速機動で背後に回り込んでも攻撃が当たらん、ニュータイプの先読みとステップが最強の盾に

なつてな」

「艦を背にしてたらステップが使えない、だから距離をとってタイマンを仕掛けた」

「察しが早いな、NT同士の共感か？」

「俺のは強化です」

「だったか… しかしよく避ける。AMBACだけじゃ回避スピードが遅かるうに」

「敵の攻撃が撃たれる前に解るNTだからあらかじめ回避運動が出来る。そしてAMBACだけで避けるのが彼女の手加減でしょう」

通常のスラスター旋回ならまだしも、AMBACだけの回避を選び被弾リスクを背負うか。

「あれの真似出来るか？」

「無理です」

「…俺もだ」

出来なくはないが。

被弾リスクを負ってまでやる気は無い。

それにあそこまで見事な回避が出来るのは彼女が並外れた宙間適応の持ち主で異常。

ユリは宇宙遊泳訓練を1000時間以上受けた者も溺れる動きを連続で熟してる。

にしてもあの動き…

何処かで見覚えがある。

「しかし見事だ。まるで踊り子だな」

踊り子…

そうか。

あの子に似ているのか。

幼い頃を共に過ごした。

俺の姉…

“恵利華”に…

何処か懐かしいものをユリから感じるのは、やはり彼女が恵利華の容姿に似ているからなのか。

そして最悪の想像が頭を過ぎった。

しかもそれがなんと合理的な連邦のシステムにフィットすると理解した瞬間。

俺は激しい吐き気を催した。

「…先輩。俺ちょっと外します」

「どうした？」

「目にゴミが入って」

「……解った行って来い」

先輩は俺の様子を少し伺って何か勘づいたのか、先程と比べるとかなりおとなしい口調で俺を外へ促した。

ベンチから腰を上げ賑やかな待機ルームを一人後にし俺は格納庫に出て真っ直ぐにエアロックへ移り、壁に開いた無数の穴から噴射されるエアを浴びながら自身の心を平静に保とうとする。

気圧調整を済ませてパイロットの更衣室へ入った。

中は相変わらず他に人が無い。

俺は被っていたヘルメットを脱ぎ手にしたそれを強い感情に身を任せ投げ捨てていた。

ヘルメットは床にぶつかるとゴムボールの様に高く跳ね天井にまでぶつかった、その衝撃で方向を変え今度は壁にぶつかる。

やがて減速したヘルメットはゆっくりと部屋の中に漂った。

こんな八つ当たりをして解決出来る問題でない事は自分でも解って

いる。

しかし今はそれしか出来ない。

俺は壁に備え付けられたモニターを観る。

そこに映るのは攻防を入れ替えながら戦うMSが2機。

そこへ視線を向けながら俺は身体を浮かせそのまま天井に身体を預けた。

「本当に呪われている」

MSの戦闘をモニターから観て姉との懐かしい記憶が甦った…

特別な日

自動照準のカーソルが機影に重なりグリップのトリガーを引く。

「…っち！」

機影は放たれた閃光を姿勢制御で回避、全天モニターの左下方へ機動し反撃の閃光が迫る。

ペダルを深く踏みビームを回避。

だが機体向かわせた先の目の前にもう一つ閃光が走り、それに接触しまいと両脚部スラスタを前方へ吹かし機体を緊急後退させた。

「こっちの動きが予測されてる」

なら次はと機影を正面に捉え、ビームを連射しながら急加速をかける接近。

モニターの機影は上下左右へビームを回避しつつ後退するが、真っすぐ急接近する僕から逃れる程の速度はない。

自機の左腰部に装備されたサーベルを左腕へ逆手に握らせ横一線に切り付ける。

間一髪でサーベルのリーチから後退した機影は至近距離でライフルを撃ってきた。

放たれたビーム弾は左腕ラッチにセットされたスパイクシールドを

掠める。

「あくまで距離を取るか」

ライフルを背部マウントへ移しサーベルを右手に持ち替えながらペダルを踏み、シールドを機体前面に向けて機影へ突進。

すると機影もサーベルで応戦し、こちらのシールドが切り払われた。咄嗟にグリップを操作し持ち替えたサーベルで対応しようとするが、真正面の機影はいつの間にか左手に持ち替えたライフルの銃口をこちらのコクピットへ向け、間もなく自機のモニターが眩しく輝く。

「…ここまでか」

欠点だらけの相手に負け続けてる。

「お疲れ様、少し休憩にしましょう」

女性の声で通信が入りようやくデータ収集が終了した。

リアシートがゆっくりと定位置に戻りハッチが稼動。

開けた視界から入った景色に導かれシートに沈めた身体を起こし僕は機体からキャットウォークの踊場へ降り立つ。

「やったー！ これで5連勝！！」

そんな声を左隣に立つ同型機から降りてきた僕と同じ黄色いツナギの少女が発する。

「違う、5戦3勝1敗1分け」

「細かいなあゝ、そういうの負け惜しみって言うんだよ」

ウダウダとたわいない会話を恵利華と作業通路でしていると「おいガキ共！ 休憩なんだからさっさと行ってくれ、邪魔でしょうがない」とグレーのツナギを着た作業員に追い払われ、恵利華はそれに「はゝい」と気の無い返事をし僕達はMS格納庫のモニタリングルームへ移動する。

恵利華と歩きながらシミュレーションで彼女がした不可解な操縦について質問した。

「せっかくAMBACが上手いのになんで近接格闘で使わないで射撃回避に使う？」

「だって格闘戦怖いじゃん」

「だからって出来るならサーベルの攻撃回避に使うのが適切でしょう？ 授業のテキストに出てる」

「怖いもんは怖いの！」

変な所で片意地を張る恵利華の顔は可愛らしかった。

モニタリングルームの目前までくると部屋の扉が開き青いツナギ姿の華織が僕達を出迎える。

「二人ともお疲れ様、“J・J”はどう？」

「武装が近接戦に偏り過ぎて怖いよぉ」

猫撫で声で愚痴をこぼし甘える恵利華が横目に入り僕は笑いそうになる。

そんな少女の姿を見た華織は「はいはい、ごめんね」と恵利華の頭を撫でた。

“J・J”は旧アクシズ製モビルスーツを再設計した機体。

元々の設計思想は旧大戦時に製造されたガンとほぼ変わらないが、現在研究段階で今後現れるであろうビームシールドやエフィールド（電磁バリア）搭載機相手に戦う為唯一有効な格闘を極限まで追求したMS。

なので主武装が両腰部に装備された“粒子加速式ビームサーベル”という通常のサーベルより熔断能力を高めた武装が特徴。

前時代より砲撃を主とした兵器群に比べサーベルを主武装とした兵器はあまりない、しかしそれを可能にしたのが一見飾りに見えるサーベルの鞘。

両腰部のウェポンマウントの鞘とサーベルを結合状態でサーベルの柄を可変させると高い熱量を誇るビームライフルとして使う事が出来る。

だが熱量を高めたビームは収束率が低く貫通力や射程も劣るので別の射撃武装として機体背部のマウントに標準タイプのビームライフルを装備させる事も出来る。

強力な耐ビームコーティングが施された小型スパイクシールドはスパイク部分を射出可能な構造で、スパイクの質量的には数値上ビームシールドを貫く威力を持つと計算される。

華織は小さな恵利華を優しく抱きながら「・」を見上げた。

「この機体が次世代MSの母になるはずなの、このMSが沢山の人を救うって私は思いたいからあんまり怖がらないで、私まで不安になっちゃっ」

人殺しの道具が人を救うと思いたいか…

そう思わないと兵器なんか作れないよな。

そう思わないと作ってはいけないよ…

MSから視線を僕達へ移し「ご飯食べに行こうか？」と優しい声で提案。

「怖い思いさせられたから今日は先生の奢りね」

「わかりました！」

「仕事抜けて大丈夫なの？ スタッフはまだ今のデータ解析や数値化が残ってるし、華織は此処だと偉い方だろ？」

「それもそうねえ」と華織は首を傾げ少し考えたが、モニタリングルームへ「ギル、ちよつと外すから後よろしく」と告げると直ぐ中の人影が「わかった」と彼女へ返事する。

華織は僕に向き直り『これでどう』とでも言いた気な微笑みを送ってきた。

基地と打って変わってなんともフランクな此処の人達に多少の驚きでつかの間身体が動かなかったが、すぐ僕は「なら急ご、時間無いから」と言い二人を背にして施設内に通じる別のドアへ向かう。

「待つてよ！ 皆で一緒に行くんでしょ！！」

背後から僕を呼ぶ声は恵利華だ。

「休憩つて言つても30分とないんでしょ？ なら急ご」

「今日は一日私たちが君らを預かってるから特に決まりは無いわ、1時間くらい休憩しても良いのよ」

「随分と無責任なMS開発主任だね」

皮肉った事を言つた僕に対し「子供が大人に口答えしないの！」と駆けてきた二人に僕は捕まり3人で格納庫を出る。

開発部の廊下を歩きながら華織が「何食べたい」と僕達に聞く。

「何つて食堂のメニューなんて決まりきつてるし」

「つまらない事言う様になつたわね、外に出るのよ」

外に出る！？

予想外な言葉に僕と恵利華はその場で足を止めた。

「先生そんな事して大丈夫!？」

「良いも何も、もう決めたの」

「ホントに!？ やったー!!」

恵利華はその場で跳ね大喜びだが、僕は本当に外へ出て良いか不安になった。

「やっぱり止めようよ、基地の人が知ったら怒るよ…」

「もう決めたの！ そんなに嫌だ嫌だって言うなら“名前”で呼んじゃうよ」

ギクツとし二人の様子を見ると「ねえ」と声を揃え笑いあっていた。

「…わかったよ」

「良い名前だと思うけどなあ？」

「恥ずかしいんだよ」

「君の性格にぴったりと思ったけど？」

華織の問い掛けに「合いません!」ときっぱり返し再び廊下を進む。後を付いてきた恵利華は「それじゃいつまでたっても“ろくちゃん

” っ て呼ぶよ？”と僕の顔を横から覗き見て言った。

「まだそっちの方がまし」

「本当に素直じゃないよね」

背後からした華織の言葉を聞き彼女の方へ振り向こうとすると、何か視界を横切る。

「玄関まで競走よ！」

それは華織が駆けた姿だった。

「先生のずるー！」

僕の隣に居た恵利華は彼女へ駆けて行くが、華織は恵利華から逃げる様にまた走り出した。

「置いて行っちゃうわよ！」

彼女の急かしに応え僕も廊下を駆け出す。

途中設計室から出て来たグレーのツナギを着た男の人と華織はぶつかりそうになったが、体勢を立て直しまたすぐに駆ける。

男は「危ないだろ華織！」と怒鳴ったが「今急いでんの！」と駆けながら彼女は楽しそうに告げる。

「負けないよー！」

追いかける恵利華と僕は男の横を素早く駆けぬけると「廊下は歩くもんだろが！」と注意された。

それでも僕達は廊下を走り続け華織を追い抜く。

「先生より私達の方が足は速いもんね！」

恵利華は後ろへ遠ざかる華織へ視線を送り足の速さを自慢するが、その隙を見て僕はスパートをかけ恵利華より前へ出ると彼女は驚いた表情を浮かべ僕へ視線を移す。

「油断大敵」

「待つてよー！」

「それでも罰ゲーム考えながら走ってる」

「何それ酷い！」

「世の中弱肉強食だろ」

遠く後ろへ過ぎた男は「転ぶなよー！」と大声で3人へ心配るがもう外は目前だった。

僕は自慢の足を更に加速させ間口の8メートル手前で前方へ跳躍し外へ跳び出す。

ペタツと綺麗に両足で着地して屋外の景色を眺め、前方に誰も走っていない一等賞の優越感に浸る。

隣にペタツと恵利華が同様に着地「ろくちゃんは速いや」と告げ僕

の肩に手を置く。

「少しは手加減して」とヘトヘトにへばった華織がようやく追い付き僕の背中に体重をかけて寄り掛かる。

瞬間華織の匂いがふわっと広がり、背中からは走って熱くなった彼女の体温と柔らかな女性の身体の感触がした。

「学生時代はハードル走で一番だったけど、やっぱり勝てないか…」
彼女はもたれたまま息を荒くする。

それを見て恵利華は笑い「もう若くないしね」と指摘。

「まだ綺麗なお姉さんで通る年齢！」と恵利華ヘデコピンし、華織はようやく寄り掛かった身体を起こす。

「暑い… ツナギで走るもんじゃない…」

言うつと華織は首もとのジッパーをヘソの辺りまで下げツナギの上半身を脱ぐ。

ムンと熱気を帯びた彼女の汗と体臭の混じった強い匂いが放たれ、ツナギの下に着てたＴシャツは汗でぐっしり濡れ肌にへばり付き下着が透け彼女の丸く形良い胸の膨らみが窺える。

軽く呆れ「少しは慎みを持ちなよ、玄関先でその姿は無いでしょ」とツナギの袖を腰に縛る華織へかける。

華織は肌にへばり付いたシャツの衿を指先でつまみ上げ、はたはたと扇ぎシャツの中へ空気を送った。

「この辺りは関係者以外入れないから皆身内ばかりだし気にしないわよ」

「先生着替えてきて！」

「そうね汗臭いし、ちょっと待ってて」言って華織は再び建物へ入って行った。

華織を見送した後、何故か恵利華は怒った表情で僕へにじり寄ってきた。

「今先生のこと変な目で見てたでしょ！？」

「はっ？」

「惚けないでよ、そりゃあ先生はスタイル良いし美人だけど…」

恵利華はなんだか不服そうな顔でボソボソと呟くが、僕は彼女が何に不服なのかさっぱり見当つかない。

「私だつてすぐ大きくなるんだから…」

「…何の話だよ？」

「少しは女心つてもん考えたら！」

自分が怒られる意味が解らない。

その後も恵利華は耳で聞き取れない程の小さな声で何か呟いていた。

しばらくし建物の廊下を駆ける足音がこちらへ近づいてくる。

音の主はもちろん代えのシャツに着替えた華織だ。

「ごめんごめん、お待たせ」

「待ったよぉー！」

「じゃあ行こうか」

そう言うのと僕と恵利華の手をとって3人で歩き出す。

華織を挟んで恵利華を見ると彼女は華織の胸をじっと見つめていた。

それに気付いた華織は「…このシャツ何か変かな？」と聞く。

恵利華は「…えっ！？ 別に何でもない！！」と慌てて視線を前へと向き直した。

「んで外の何処に行くの？」

「すぐ近くよ、あまり遠出も出来ないし」

そのまま門前まで歩き華織はセキュリティに身分証を見せながら「1時間で戻るわ」と告げ、ガードマンから「お気をつけて」と見送られ大通りへ出た。

このコロニーは軍に管理されているので一般人は住む事が許されていない。

だが軍事施設だけで生身の人間が生活出来る訳もなく幾つかの企業が特別にオフィスや店舗を置き大手のハンバーガー店や百貨店も普通に営業しているので基地関係者はストレスなく仕事しやすい環境に整えられている。

「ハンバーガーなんて嫌だよ」

「そんなの訳ないでしょ、ほら着いた！」

華織が視線で示した先は美しい蝶が描かれたステンドグラスの出窓がある店だった。

しかしドアには“CLOSE”のプレートが掛けてあり、店内の様子を見ようにも中は薄暗く客や店員の姿を見付けられない。

「閉まってるじゃん」

「今から開けさせるわ、少し刺激が強いから外で待ってて」

言いながら華織はプレートを勝手に裏返しドアを開けて店内に入っていく。

手慣れた感じでそれを堂々とする彼女の行動は子供の様な悪戯心も悪意も無く思えたので、僕達は止める言葉をかけずに見過ごした。

「マスター！ 来たわよ！」

薄暗い店内に響いた華織の声は全開に放たれたドアの外まで聞こえた。

「うるさい！　また勝手に入ってきて！」

声の主はこの店の主人であろうか、一言の断りもなく店を開けた彼女へ不機嫌な感情をぶつけている。

僕達は基地での彼女からは想像出来ない華織の自由な行動に軽い当惑を覚え、待てと華織は言っていたが中に入ってしまった彼女の背を追って良いものかどうか考えあぐねていた。

「客よ客！　こないだ話した」

「……！？　それを先に言いなさいよ……！」

「外で待つてるわよ」

すると店内から駆けてくる足音がし、変わらず開けっ放しのドアから人影が跳び出してきた。

「ようこそバタフライ・キッチンへ！　バタフライと言ってもコッテリした揚げ物じゃなくて蝶の事よ……！」

目前に現れた細身で長身の男は艶の良い褐色肌の持ち主で顔は満面の笑みを湛えていた。

「……マスター、まだ昼間よ」

「おっとそうだった……　君達が華織が言っていた子供達だね？」

男は僕達に問い掛ける。

しかし唐突に現れたハイテンション男に驚いた僕達はただ呆然と立ち尽くすばかり。

「やっぱり刺激が強すぎたか…」と呆れ顔に手を当て華織が店から出てくる。

「この人はスティーヴ・ローレンさん、バタフライ・キッチンのオーナーよ」

「はじめまして」

あらためて丁寧な挨拶をしながらスティーヴは細長い腕の先を僕達の前へ出す。

「…恵利華です。はじめまして」

怯えながら恵利華は男と握手する。

「こっちの男の子は？」

「“ろく”って呼ばれてます」

そう言うと思っていた華織は一瞬笑いを吹き出すのを堪えた。

スティーヴも僕と握手しながら「変わった名前だね」と呟く。

「それじゃあ挨拶はそのくらいにしてお料理お願い、皆腹ペコなの」

「はいはい！喜んで！！」

言つとスティーヴは踊る様に自分の店に入つていった。

恵利華はスティーヴの印象を華織に「…なんか変わった人だね」と告げる。

「同じ店で昼と夜とで別の仕事をやってる人だから」

「レストランじゃないの？」

「“昼間”はね…」

なんとも意味深な言い回しが気になるが、それより今はご飯が先な気分だった。

3人で店に入り中を見る。

内装はスティーヴの印象から比較すると普通な作りだった。

壁は明るい赤土色で塗られ所々に小さな額縁が掛けてあり中には南国の植物や浜辺が描かれた絵が収められている。

また見上げると天井が非常に高く通常の建物なら二階分程の高さがあった。

「あの天井から下げてるの何？」

「シャンデリアって照明よ」

天井から下がるシャンデリアなる物はとてもきらびやかで綺麗だが、

さほど広くない店内ではやや狭苦しい印象を与えた。

店には広い間隔で置かれた4人掛けの丸テーブルが6つ、僕達が座る備え付けのカウンター席は8脚で全部の席に客が埋まっても32人しか入らない。

ステンドグラスの出窓を内側から見ると両端には黒いカーテンが掛けてあり、窓枠には常連客達であろうかスティーヴと肩を組んで店内で撮影された写真が5つほど飾られている。

「このお店気に入った？」

カウンター奥の部屋から再び現れたスティーヴは首から柄の無い真っ黒なエプロンを下げ、腰の後ろに両手を回して紐を結ぶ。

「あまり外へ出してもらえないから新鮮なのよね？」

「あら本当！　なんて可哀相に！！」

華織が僕の顔を見ながら気持ちを代弁すると、紐を縛り終えたスティーヴは両手をカウンターに叩き付けて僕達へ顔を迫らせわざとらしく大袈裟に泣いた。

すかさず華織が「まだ昼間よスティーヴ」と軽い突っ込みを入れ「おっとごめんごめん」と詫び、僕達3人の前にミネラルウォーターの入ったグラスを丁寧に一つずつ置いていく。

「それでご注文は？」

「何が食べたい？」

「メニューは？」

「ご注文とあらば何でも作れる自信だけはあるわよ！」

メニューも無しにそんな事を言われても何を注文して良いものか解らずに僕達がいると華織は「このお店はメニューが無いの、洋食なら手の凝ったのでなければ大概は出るわ」と教えてくれた。

「マスター、今日のスペシャルは？」

「スペシャルラザニアとスペシャルハヤシライス！」

料理であろうか？

しかし僕はどちらか聞いた事の無い言葉だった。

せいぜい理解出来たのは最後の『ライス』って単語だけで『ラザニア』や『ハヤシ』という言葉は今初めて聞いた。

案の定恵利華は「先生“ラザニア”って何」と華織に質問する。

華織が答えるよりも早くステイヴが口を開いた。

「平たいパスタの事、それを煮込んだミートソースに入れてチーズを乗せオーブンで焼いたのを一般にラザニアって呼ぶの」

「それおいしそう！！」

「じゃあ恵利華はそれね、ろくちゃんはハヤシにする？」

「ハヤシはデミグラスソースにお肉と野菜を入れてカレーみたいに
ご飯にかけて食べるお料理だよ」

「……………」

「お嫌い？」

嫌いではない。

ただ食べた事ない料理に戸惑ったのか、あるいはいつもと違う環境
と見知らぬ人に警戒したのか…

だがこのステイヴという人が悪い人には見えないし、華織が心許
す相手なのだから善い人に違いない。

でも返す言葉が見付からないのだ。

「…この子はオムライスが好きなの」

続いていた沈黙を破ったのは華織だった。

「でもろくちゃんオムライス食べてる所なんて見た事ないよ？」

「子供っぽい料理だからいつも券売機で躊躇して隣のカレーライスの
ボタンを押してるのよ」

本当だ。

でもどうしてそれを…

「じゃあオムハヤシにしましょう！ 華織はいつものやつね？」

頷いた華織を見たスティーヴは何故かはしゃいだ様子でまた奥へ姿を消した。

「…なんで知ってるの？」

「いつもカレーライスばかり食べてるけどあんまり美味しそうにしていなから」

食堂で食券を買う姿まで見られていたとは知らなかった。

いつも独りで食べている所へ賑やかに華織と恵利華が定食を乗せたトレーを持って僕と同じテーブルに来るのだから。

「そういえばマズイって言うてる！」と恵利華は小さく笑う。

「…違うよ、券売機で迷って行列作っちゃ悪いからいつも押しやすいカレーを押しちゃうだけだよ」

「変に強がらなくても大丈夫よ、それにあそこのメニューでまともなのカレーと定食だけでオムライスはマズイし、たまには贅沢しなきゃ」

「そうそう、先生の言う通りだよ！」

恵利華の言い回しが調子に乗っている様でなんかムカついた。

カウンターの奥からはスティーヴが注文の料理を作っているである

う鍋に火をかける音や陶器の皿を置く音等が響いている。

「ところで先生、このお店は夜は何屋さんなの？」

それは僕も思っていた事だ。

しかし華織はその言葉を聞くと軽く困った表情をする。

「なんて言って良いのやら…」

「…先生なんか隠してる」

「別に隠してる訳じゃないのよ」

スティーヴがまたカウンターへ戻る。

「素直に言っちゃいなさいよ、夢を売る仕事だって」

言いながら彼は華織へウィンクすると彼女は何か悟った表情で僕達へ向く。

「…この店の夜はショー・バーつてもので大人達がお酒を呑みながら歌ったり踊ったりするの」

何だか不思議なお店だ。

するとスティーヴは僕達の後ろの壁を指差して語りだす。

「その壁に立てかけてある丸いのがステージ、夜はその上に人が立って歌を歌うの、主に私だけだね」

「…スティーヴ、口調」

「おっと！ …またやっちゃった」
…

呼出し

「マーク、ちょっと仕事頼めるか？」

更衣室内に漂うヘルメットの無線機から流れたグレンの声が、ささやかな記憶の旅をする俺を呼び戻す。

「聞いているかマーク？」

俺は身体を預けていた天井を蹴り床に降り立つ。

ヘルメットを手に取りスイッチを操作、応答する。

「聞こえてます。どうしました？」

「偵察カメラが模擬戦宙域のギリギリ外側にモバイルスーツらしき機影を確認してな。こっちのカメラでは詳細が解らるので出撃してくれ」

「なら外の二人の勝負を切り上げて仕事させれば済む話だろ」

「この状況で勝負を預けたらメカマンがストを起こす」とグレンは冗談を口にする。

口調からして切迫した状況でなく余裕がある様だ。

「まさかそんな訳ないだろ」

「ハハ！　だが今イイ所だから皆気を削がれたくないだろ、それに

無人か有人か解らん、攻撃の恐れもあるのでベテランが出た方が適切さ」

「…わかった。んでコンタクトしたらどうする？」

「いつも通りで構わん」

こちらが接近して相手が攻撃してくる様なら現場の一任で反撃許可を出し撃墜。

それがないなら搭乗者を保護し機体は艦へ牽引。

無人ならばスペースデブリ（資源ゴミ）として艦へ收容か。

「了解。90秒後発進する」

仕事を請け負ってから俺はヘルメットを着用し格納庫へ向かう。

エアロックで気圧調整をしてる時ふと自分の機体はアーノルドが記録作業の為アーム・レイカーをバラしてたのを思い出した。

まあアーノルドに限ってまだアーム・レイカーが分解されたままとは考えにくいが、一応は確認を取りに待機ルームへ顔を出す事にしよう。

エアロックを出てから直ぐ待機ルームのドアを開ける。

中は相変わらずのお祭り騒ぎ、だが声は皆オープン回線で話しているので無線を切っている俺に声は聞こえない。

一人部屋の隅で腕組みしてるノーマルスーツがアーノルドだろう。

声をかけようと彼へ近付くが少し前に此処を離れた俺が再び戻ってきたのを見た3人のメカマン達が俺の両手を掴み進行を妨害して、「こんな時にトイレか？」とか「彼女に手紙か？」と盛り上がった気持ちのままふざけた質問をしてくる。

「急ぎの仕事だよ。アーノルドと話をさせてくれ」

メカマンは「無線使えばいいのに」と一言漏らし俺の身体へ絡めていた腕を放してヘルメットの無線を操作しアーノルドへ個人通信した。

模擬戦中とはいえ基本的に戦闘配備中は各部所の船員達が皆聞く事の出来るオープン回線で通信するのが原則で個人通信は禁止されている。

だから話したい相手が側にいる時はわざわざ近付いて接触回線を使うのが常だ。

無線を聞いたアーノルドは俺へ近付き互いのヘルメットをぶつけ振動を聴きあう。

「どうした？」

「カメラが遠くに機影を確認したからそれを調べに出る。俺のアイム・レイカーは元通りだよな？」

「当たり前だろ」

「だよな、一応の確認だ。あと一つ頼まれて欲しい」

「なんだ？」

「スナイパーライフルの最初の一発だけペイント弾にしてくれ」

「…めんどくせーなあ、30秒待つてろ」

最後にそう言つてアーノルドは俺からヘルメットを離して近くに居た一人のメカマンの腕を捕まえそいつを連れ出しながら待機ルームを出る。

俺も彼に次いで待機ルームを出た。

ドアを閉めてから庫内へ振り返り、黒く塗装された俺のMSパヴチガンを仰ぎ見る。

床を蹴つて無重力の格納庫内に自身の体を飛翔させハッチに取り付きハッチ脇の小さいパネルへ素早くパスワードを打ち込みキーロックを解除。

上下にハッチが開き中の球体型コクピットを覗かせる。

直ぐに乗り込んでキーを挿しコンソールパネルのメインスイッチを入れ起動。

同時に機体全体へ動力が行き渡り各所の稼動したカメラから入った映像をCG再現したものが全天モニターへ投影される。

俺は身体をシートへ沈めた。

するとパイロットスーツ背部のラッチにシートベルトの金具が噛み合い身体を固定。

視線を計器へ移し正常の値を表示しているかを確認。

無線でアーノルドに「こっちはOKだ」と準備が済んだ事を伝え返答を待つ。

だがアーノルドの方はまだライフル弾の入れ替えが済んでなかった様で「急かすな」と冷静に言う。

格納庫の奥で行われる武器調整は総て油圧式アームが行う。

メカマンが操作するアームはシリンダー型カートリッジを持ちアーノルドの雑把な誘導でそれをスナイパーライフルの上方から差し込む。

「…終わったぞ」

「悪いな」

俺は機体を庫内奥へ向かわせカートリッジ交換の済んだスナイパーライフルとシールドをハンガーから解放し自機に装備する。

その後MSの無線チャンネルをブリッジに合わせ通信。

「出撃準備出来た」

「わかりました。第3カタパルトから出て下さい」

フィリアの誘導に従って俺は機体を庫内リフトに乗せ艦底部に位置する第3カタパルトへ向かった。

ディープ・ヘルメの構造は連邦製宇宙巡洋艦とはやや異なる。

連邦はアナハイム社との繋がりが長い為、艦のデザインもアナハイム独特の直線的な構成が今も多い。

しかしディープ・ヘルメは任務上、遭遇した者に連邦軍と知られてはならない。

よって外観上は旧ジオン製戦艦の様な曲線を多用し上下左右対称の特異な形状だ。

両舷から前方へ伸びる計4つのカタパルト。

艦橋は対空防御時や高速巡航時になると稼動し艦の中央に集約され左右のカタパルトを遮蔽物に使う。

…まあそんな事はどうでもいい話だ。

ブリッジから送信されたデータを自機のレーダーに反映すると機影が2つ映る。

模擬戦の二人は艦の上方約4000mでやり合っているらしい。

「俺の姿を見せない為わざわざ第3カタパルトを使えってか」

今盛り上がっていると言っても2人の集中を削がない為、俺は裏方

へ徹しろと…

気遣いもほどほどになグレン。

リフトがカタパルトに到着する。

今の俺は艦底部に逆さ吊りされた状態であろう、だが宇宙に上下の概念は通じないし逆さ吊りにされている割には引力で頭に血が昇る感覚も無い。

モニターから入る風景は大地に代わりカタパルトという人工物、頭上は広大な宇宙。

背後には対空砲。

この光景を例えるならば無数の枯木が生える真夜中のサバンナか。

…いや、不毛の大地という表現が正しい。

俺はパヴチガンの両脚部をカタパルトのフックに引っ掛け射出体勢に入る。

「マーク・ジユディゲル、出る！」

自機のペダルを踏むのに連動してカタパルトが加速。

急激な加速で身体が後ろへ引っ張られる。

過去にカタパルト発進をスキージャンプの要領だと説明した人物がいたが、実際はもっと過酷だ。

スキージャンプなら斜面を下りながら緩やかに加速してゆくが、カタパルトは瞬間加速の為に身体にかかる負荷も瞬時。

しっかりと訓練した者でないと激しい加速Gで射出された瞬間直ぐに意識を失うケースだってある。

まあ飛び立つ時に限れば要領は同じと言えるが、カタパルト発進の過酷さを簡単に説明出来る単語なんて無いと俺は思う。

カタパルトから機体が離れた後、直ぐにペダルを戻しスラスター光が出ない様に飛行する。

この機体の装甲材は一応ステルス加工されているが、有視界センサーには無意味なのでスラスター光を控える等の操縦技術面でも工夫しなければならない。

モニター正面の宙域を観ると直線や曲線を描く流れ星が何度も現れる。

模擬戦中の二人だ。

その観戦をしたい気持ちもあつたが先に仕事を片付けねばならないので俺はAMBACで姿勢制御しそれに自機の背を向け目的地でスラスターを吹かさず慣性飛行で向う…

グレン・ヴォルフ（前書き）

“ 小説の登場人物 ”

グレン・ヴォルフ：

50 歳

地球連邦軍所属の軍人で階級は准将。

マークの養父であり上司。

二人が出会ったのはアジール・コロニー開放作戦の時、身寄りの無いマークを子供を授かる事の出来なかったグレンと彼の妻キャスリンが引き取った。

普通でない少年マークに苦勞させられたがキャスリンがマークを
実の息子の様に愛したおかげで今があるらしい。

詳しい経歴は不明だが昔は事務職をしていたらしく仕事の早さは定評がある。

グレン・ヴォルフ

艦から離れて行く機影をフィリアは見た。

「ジューディゲル機の発進を確認、慣性飛行で目的地へ向かってます」と口頭でそれを私へ伝達。

私は艦長席に深く腰掛け、出撃するマークの機影と模擬戦の映像をデスクに備え付けられたモニターに2分割投影し眺める。

「察しの良い奴だ」

「何の話です？」

ふと呟いた言葉に操舵手のランスが疑問をかける。

「我等が副司令様だよ、俺は慣性飛行の命令を出した覚えは無い、あの飛行方法では目的地に着くまでの時間が掛かり過ぎる」

ブリッジの皆がそれを聞いた。

するとフィリアは慌ててマークへ無線連絡を取ろうと機械を操作。

「別に責めてる訳では無い、模擬戦の二人に気付かれず済めば良いと私も考えた」

「何がおっしゃりたいのです？」

「だから“察しの良い奴”と言った、結局それは私の願望でしかない

かったから命令に加えなかったが奴はそれを見抜いた訳さ」

そんな私の吐露を聞いて偵察カメラのアングルを片手間で熟すカイトは「流石はNT様々だね」とマークを讃える。

だがしかし「と言うよりも、奴が私の言葉から心情推測したに過ぎない」というのが真実であろう。

奴はそこまで自身の能力に頼る男でない。

それに頼るまでもなく持ち前の頭で状況を推察出来るのだから。

「…彼女は気付いたかな？」

その呟きを聞き皆は頭上に疑問符を浮かべたが、それに間髪入れずハンドレットから送られた無線通信に耳を傾ける事になる。

「こちらハンドレット、今誰か外に出ませんでしたか？」

フィリアがそれに返答するより早く私はヘッドセットのマイクを持ち「気のせいだ、それより今は目の前のパヴチガンに集中してくれたまえ」と告げる。

ブリッジの皆は私の素早い対応を見て何とも言えぬ顔をしている。

「…わかりました」

「もうタイムは残り10分を切ったぞ、いつまで手加減をするつもりだ？」

「もうしばらくは」

「あまりロビンを怒らせるなよ」

「了解」

短い返答で無線は切れた。

「…あくまで伝えないつもりですか？」

急に不愉快な顔をしてフィリアは何を言うと思えば。

「馬鹿を言え、何か起こったら伝えるさ、奴らならそれで充分間に合う」

「根拠は？」

「いま彼女は目に見えていないにも関わらずマークが出撃した事に気付いた。ならばもし最悪の事態になろうなら彼女は私の指示を仰ぐ事無く素早く行動に移す」

側で会話を聞いてたランスも心配になったのか「艦長…いくら何でも憶測でそこまで断定するのは危険では？」と零す。

「…皆解つてると思うが此処は“ゴミ箱”と呼ばれる所だ、そこに集まる連中を束ねる私が君達の報告書に目を通せばどんな問題を今後起こすであろう想像は容易、今のロビンの件も範疇、余興にちよつと良かったろ？」

全て聞き「本当に艦長は敵に回したくない」とカイトは笑う。

だが新人のヘレンは「…掌の上で人を転がす人」と声小さく私を揶揄。

…まあ聞こえなかった事にしよう。

それにしても…

ハンドレットにサイコミュ系センサーは装備されてないにも関わらずマークの出撃に気付く。

ならもしやここから30km以上離れたアノ機影にも気付いてるのではないか？…

悪寒

ブリッジと通信を終える。

「…本当に気のせい？」

思わずそんな言葉が出た。

パーソン機から攻撃が続く中。

宇宙にとても強い輝きを放つ流星が翔け、それが私を捉えた気がした。

流星は何かとてつもない“何か”に真っ直ぐ向う。

だがその“何か”が解らない。

光とも闇とも解らない“何か”…

強い輝きを放つ流星より遥かに巨大な力…

「休む暇は無いぞ！」

無線からパーソン中尉の声が鳴ると共に三時の方向から直撃コースの閃光が迫る。

「…！！！」

慌ててペダルを踏んで緊急回避しビームが機体に直撃するのは避け

だが、右肩を掠めコクピットへ軽い振動が伝わった。

アラームが鳴り響き私の鼓動を早める。

「被弾した！？」

コンソールパネルを操作しアラームを止め被害状況をモニターに出す。

幸い損傷は実戦出力に換算しても掠り傷程度で支障ない。

「遠くの力に気を取られ過ぎた！」

こんなミスをすると思ってなかった。

「集中切れてきたかー？ 模擬といえ一対一の戦闘時に無線に気を取られる様じゃ撃墜されて仕方ないな」

挑発のつもり？

こっちはわざと弾を外してるのに。

「ミノフスキー粒子のおかげで内容は聞き取れなかったが随分舐めた真似するじゃねえか！」

武装をサーベルに持ち替えたパヴチガンが迫る。

彼の斬撃をかわし私はパヴチガンの背後に組み付き接触回線で話し掛けた。

「中尉はこの大きな力を感じないの!？」

「何の事だ! 外は俺達以外誰もいない!！」

この人は恐ろしくないの!？

あれは確実に私達の動き総てを捉えてる。

「そんな子供騙し!」

パヴチガンは組み付いたハンドレットを強引に振りほどき、左腕に装備されたライフルの銃口を至近距離で向ける。

避けられない!？…

使者（前書き）

“用語集”

サイコミュ：

サイコ・コミュニケーターの略称。

ニュータイプの発する特殊な脳波^{サイコウェーブ}を利用し機体内外の装置の制御を行うシステム。

ファンネル：

ミノフスキー粒子散布環境下において唯一有効な誘導兵器群の総称。空間認識能力に長けたNTの脳波で誘導する為に多くはサイコミュを搭載したMSの武装として用いる。

複数の敵を同時に攻撃、或いはひとつの標的に自機とは別の方向から攻撃を加える事が出来る。

宇宙世紀106年以降『虐殺兵器』と認知され、軍需産業を生業とする各企業はこれの開発をしないという紳士協定を結んだ。

使者

予定より3日遅れの出航。

おかげで船が港を出る瞬間を察知出来たが、進路を地球ではなくデブリの浮遊するこちらの宙域へ変えミノフスキー粒子まで散布された時は存在が気付かれたかと冷や汗が流れた。

この宙域はまだ処理仕切れてないデブリがわんさか漂ってるので潜伏がたやすい。

本来スペースデブリは船の航行に支障をきたすので何処のコロニーや衛星都市でも撤去は積極的に行っている。

事実デブリの撤去が済んでない宙域を大型の艦艇は避けて航行する。高速航行を維持せず減速してデブリ群を通過しようなら規模の小さい此処でも数時間の距離を半日以上かけねば通過出来ない。

また大量のデブリは我々やその他の海賊からすればこれ以上にならない最良の潜伏場所になり、デブリ群に囲まれていれば食料も多少は困らない。

これも二度三度と大戦を経たおかげで数の多い連邦も兵士や艦隊の配置転換等で軍備に時間を食い、本来防衛拠点であるグラナダ周辺宙域のデブリも『攻めるにも苦になる』と処理の手を省いたからだ。

そこが海賊や敗走勢力残党の根城になるうが今だ圧倒的な数を勝る連邦は問題視せずに傍観を決め、いざその環境が大問題に発展しよ

う時は物量で叩き潰すつもりなのだろう。

それにしても…

先程より演習に出た2機の中の1機はデブリ群に潜伏する私の機体の存在を感じ取った様子。

幸い距離が遠すぎ確証が掴めないまま演習を続けてるが、センサーで感知出来ない距離の私を感じる輩をこのまま放置するのも末恐ろしい気持ちを抱かせる。

「焦って出撃したはいいが、このまま傍観というのもくたびれ儲けでつまらないな」

恐怖と同時に相手を試してみたいと思うのも兵士の心理と言った所。

相手はおそらく女、更に私よりも二回り近くは若く実戦経験もまだまだなひよっ子。

しかし興味深い逸材だ。

感じる限りだと両者模擬という殺気の読み難い状況もあり本気を出してないが、女の方の実力は計り知れない領域に踏み入れている模様。

強化でない真のNTなら恐ろしい。

出来るならこちらの手駒に置いていたい。

今その新芽を摘み取ってしまえば後に我々の脅威となる心配は無い

が、仕掛けるとなると敵の殲滅を目的としない今の作戦の時点で我々は自殺行為に走ったに等しく、またそんな死に様は美しくもなければ誉れにもならない。

やはりコンタクトの指令だけで向こうと交戦しては小型艇と2機のモビルスーツしかない我等は数と装備で勝る奴らの追撃をかわし切れやしないという答えに行き着く。

まして今我々が目的とする所は彼等の動向監視と戦力の調査に限る。敵の殲滅が目的なら勝機は殿下からお預かりしたこのゼノにある。

向こうに私の力に次ぐニュータイプが一人以上居ようが禁じられた兵器を装備するゼノの前では問題にならないだろう。

戦慄に身を委ねたい気持ちを堪え時を待つ、既に私の機影は無人偵察に姿を捉えられ奴らは黒い鷹をこちらに向かわせた。

それに関しては私が望んだ様に事が運んでいる。
それを駆るのが“彼”だからだ。

「本当に似た感覚がする」

私の所へスラスターを吹かさずじわりじわりと近付く“彼”の気配に期待が高まる。

それは兵士の心理とはまた違う個人に対する好奇心と言えよう。

「やっとお会い出来ます」…

踏み入られた心

機影を捉えた無人偵察機に到着。

出撃前にブリッジから送られた映像データを見た限り、この地点から更に20kmは離れた所にMSの下半身に似た映像が映るに留まり、有人か無人かも直接調べなければ解らないものだった。

また肝心の上半身部分はデブリに隠れ、損壊しているのかすら解らず怪しいものだ。

俺は改めて確認する為にMSより優れたカメラを搭載する無人偵察機に接触し自機とケーブルを繋いで機影を捉えた宙域の今の映像を見る。

「フィリア聞こえるか？」

無線で彼女を呼び出すと直ぐに応答が返ってくる。

「はい」

「映像を捉えた無人機に到着した。今直接回線で映像をこっちのモニターに投影したが問題の影が映ってないぞ、そっちでMSの動きを観測してないか？」

「いいえ、こちらでもダミー隕石の電波中継を介して観ているに過ぎないのでジャミングの干渉を受けて映像の解析に手間取ってますし、もしかしたら慣性で何処かへ流れたのかも知れません」

「わかった。出撃前の静止画を見る限り画にブレがないから流れたなら移動速度も相当遅いだろう、もうしばらくカメラを担いで探索を続ける」

「了解しました」

ミノフスキー粒子散布下の環境においてダミー隕石は特定周波数の電波を中継発信してくれるという便利な使い方もある。

ジャミング下での有視界戦闘が常套化した現在はダミー展開無くしてミノフスキー粒子散布環境での宙間戦闘はまずしない。

でなければ母艦から飛び立った味方機は方位が解らず宇宙の迷子になってしまう。

また特定周波数は機体の所属に関係無く機密でそれを知るのは当のパイロットとブリッジクルーに限られる。

一見合理的でなく思えるが軍の機密保持の為に課せられた一手間だ。もし戦場にて敵勢力に機体を奪われてもその機体が所属する勢力の情報を得られない為の防止措置である。

俺は装備するスナイパーライフルを機体背部へマウントし、空いた両腕で偵察機を抱きスラスターを吹かし姿勢制御、偵察機が映す高画質画像をコクピット内で観る。

模擬宙域の一番端でもあり周辺は数個のダミー隕石とデブリが浮遊するばかり。

辺りをカメラを介して見渡しながらレーダーにも目を配る。

浮遊するデブリの金属反応は多数あるが、熱を持った影は映っていない。

本当にただのデブりなら良いかと心の中で思った。

『ようやくお会い出来ました』

「……！」

唐突に声が響いた。

しかもそれは無線から発せられたものではない。

俺の頭の中へ直接伝わったのだ。

思わず機体制御の手が止まり、直ぐに臨戦体勢を取る為に抱えた無人偵察機を放り出し、背部のスナイパーライフルを再び腕部へ装備させた。

全身に緊張が走る。

『黒い鷹』

誰だ！

何処にいる！？

『私は貴方を良く知る方から指示され此処へ来ました。貴方の今を

伝える為に』

これはテレパシーなのか！？

『随分と動揺してますね？』

相手は俺の感じた事を見透かしている。

『総て見えます。貴方の過去も未来も、そして貴方が私の主に殺される事も』

コクピットのパネルを操作し全回線で通信を試みる。

「貴様何者だ！ 俺の何が解る！！」

『総てです。貴方が六号と呼ばれていた過去も、愛しい人から名を賜った事も、そして貴方が心許した皆が命を奪われた事も』

「……！ 誰からそれを聞き知った！！」

『誰でもない、貴方は気付いてないでしょうが貴方の心が叫び声をあげてるのです』

こいつ！

『証拠を見せしましょう』

そこで言葉が途切れたと思うと次は俺の周囲の空気が泡立つ様な感覚が全身を覆い尽くし、共に激しい吐き気と頭痛が襲う。

「がつ！……」

苦しい！

身体の芯が氷の様に冷たい腕で捻り潰される不快感。

身体に物理的な外傷を負った訳でないが、俺の全身に巡る神経は脳へ熱と痛みとして情報を伝達した。

次の瞬間、激しい苦痛で朦朧とした俺の意識は暗闇へと導かれた…

全身を支配していた痛みは次第に弱まっていった。

俺は感覚を研ぎ澄まし状況を確認しようとしたが何も感じず、己の存在すら認識出来ない暗黒の世界に独り漂っている事に気が付く。

だが恐怖は無い。

時が経つに連れて俺は傷や身体の四肢に欠けた所は無いと知覚する。ただ胸に抱く不安が拭われた訳ではなく、海に落ちた力ナツチがジタバタと手足を激しく動かす様に俺は状況を確認すべく何かを感じ

ようともがく。

しかし想像以上に自身の混乱は激しかったらしく、今まで自分が瞼を閉じていた事にすら思い至らなかった。

外の情報を求めゆつくりと瞼を開ける。

外界の眩しさにしばらく白い光景が続いたが、それも次第に鮮明になっていった。

「ここは…」

いつぞや見知った場所。

明るい赤土色の壁。

南国の風景が描かれた小さな絵。

そして色鮮やかな蝶のステンドグラス。

「おはよう。お疲れみたいね」

背後から声が掛かり振り返ると褐色肌で細身の男が笑みを浮かべカウンターの向こうに立っていた。

「スティーヴ!？」

「どうしたの狐につままれた様な顔して、悪い夢でも見た？」

悪い夢？

「それはこっちの台詞だ！ 何故お前が此処にいる！？」

「何故って此処は私の店だし」

確かに此処はスティーヴの店だ。

しかしこの店はアジール・コロニー開放作戦の際、基地のMS格納庫の爆風に巻き込まれ瓦礫になった。

その時スティーヴも…

だがこの光景は何だ！？

もう居ないはずの人間と無いはずの場所が平然と目の前に現れた。

俺が手を置くテーブルも細かな木目の感触まで訴え、
見てるもの全てが夢にしては俺の感覚に現実味を与え過ぎている。

「騒がしいわねー、どうしたの？」

カウンター奥の部屋から声が発せられ人影が出て来る。

「華織！」

「あらもう起きたの」

「起きたも何もない！ 何故お前達が…」

要点を言い切る前にトイレから水を流す音が聞こえ言葉を遮った。

そこへ視線を向けるとすぐにドアが開き、中から女の子の姿が…

「どうしたの？」

「何か寝ぼけてるみたいよ、それよりちゃんと手を洗った？」

「当たり前じゃない！これからご飯食べるのに手を洗わない訳無いでしょ！！！」

それを見て華織は笑う。

「……」

最早言葉が出ない。

俺が今見ているものは夢なのか？

目に写る光景。

キッチンから薫る旨そうな料理の匂い。

耳から入る音の響き。

肌に感じる温度と湿度。

俺の五感へ訴える全てが鮮明過ぎて夢と思える余地がない。

「それより、あんたの店なんだから料理くらい全部自分でやんなさいよー！」

「いいじゃないの、華織はこの子達の寝顔いくらでも見れるけど私は今しか見れないんだから」

言いながらスティーヴはキッチンへ向う。

「ソースは頃合いだからほっとくと焦げるわよ！」

すれ違い様に華織はスティーヴへ火に掛けた鍋の具合を告げる。

彼女はカウンターのの中から出て再び元居た席へ着き直し俺を見詰めた。

「もう眠気はいいの？」

これは全て俺が経験した日常の記憶。

何故それが経過した時間を無視して平然と何事も無かった様に現れる！？

俺が体験した現象こそが夢で、今居る此处こそが現実だとも言っのか！？

「お解りになりませんか」

声のした店の入口へ視線を向ける。

そこには見覚えの無い長身で黒い短髪の男が佇む。

男は深々と頭を下げ「お初にお目にかかります」と丁寧な言葉を俺

へかけた。

「私はリユーク・ヘステンスキニ」

顔を上げ男はゆったりとした一定のテンポで足音をさせずに一足ずつ歩みを進め、店の中央へ到ると静かに立ち止まりシャンデリアを見上げる。

「今私達が知覚するこの場所は寄り処」

寄り処？

「貴方が自身の記憶を元に構築した聖域」

シャンデリアから視線をゆつくりと外し男はその鋭く冷たい眼差しで俺の眼を真っ直ぐに捉えた。

「此処は貴方が本能で創り出した。人は心が疲弊した時に己が思う理想で魂を休める。この空間は貴方の理想」

「理想だ？ 違う！ お前が見せる幻だ！！」

「確かにこの光景は理想と言うよりも幸福の日々、貴方が守りたいと願ったものだ」

「俺に何をした？ 何故これを見せる！？」

「私は貴方の意識のベクトルを内側へ向けたに過ぎない。このビジョンは貴方の心の奥底、そこに私の意識を向ける事は出来ても意思は介入出来ない」

「言っている意味が解らないな」

リユークと名乗るこの男の回りくどい言葉選びに苛立ちが募る。

だがそれは彼も同様なのか、俺の言葉を聞いて深い溜息を零し彼の鋭い視線も俺から外れ再び店内を見渡している。

「これは貴方の心です」

「俺の心？」

「深層意識ですよ。人々は誰しも必ず心の中に己の居心地良い場所を作る。眠る時に見る夢は無意識に本人が作り出したものなんです」

「お前の言葉を信じるに足る確証は」

「無いかも知れません。しかし私はこのビジョンを知らない、知ってるのは貴方だ」

「……」

彼の言葉に俺は沈黙を返すしかなかった。

リユークは「周りを見て下さい。先程と変わった所はありませんか？」と促した。

半信半疑で店内を見渡す。

しかし彼の言う様になんか変わった所はない。

「こちらです」

言いながらリユークは数歩下がり右手でカウンターの方を示す。

そこには先程と変わらず恵利華と華織が腰掛けていた。

「…？」

それを見て異変に気付く。

彼女達は不自然なまでに先程と何一つ変わりが無いのだ。

写真像の如く瞬きはおろか、呼吸の際に膨らむはずの胸部すら動かない。

その不自然さに俺は二人へ駆け寄りカウンターに手を叩き付けた。

「おい！ 華織！」

問い掛けたが変わらず彼女は俺が掛けていた椅子の方へ向いたまま硬直している。

彼女らの身体の細部へ目を配っても蠟人形と形容するにはあまりに姿が生物的不完全さを湛えている。

「貴方の意識が私に集中した結果、貴方は彼女らの記憶のリプレイを無意識に停止させ動きが止まった。この空間も彼女達同様に時の流れが止まっている」

その言葉を聞きカウンターに置かれた金色の置き時計へ目を向けた。

彼の言葉の通り、小刻みに時を伝えるはずの針が動いていない。

不自然な現象を数多く示すこの環境を心の中と思えば合点が行く。
ならば俺にこのビジョンが知覚出来る理由の一つ。

「精神攻撃をしてるのかニュータイプ！」

思い至るそれを彼へ問い詰める。

彼の反応は「攻撃とは物騒な… ただの感応です」と静かなものだった。

その小賢しい反応は更に俺を苛立たせ「一方的に心へ踏み入る行為を感応と言えるか！」という荒い感情を表にってしまう。

「私に見えるのは仕方のない事、貴方にそれを理解して頂く為わざわざ共にビジョンを見ているまでです」

「俺の総てが解る証拠という訳か…」

納得した訳ではない。

しかし俺は目の前のこの男が最初に語りかけた言葉を口に出していた。

俺が平静さを保った状態でこの男と対面していたらリユークと名乗る男の言葉を信用したろうか。

自身の感情に流されながらも俺は己の平常な思考を思い出そうとする。

「お前は主に指示されて来たと言った。そして俺がお前の主に殺されるもな。お前の目的はディープの戦力調査と、戦力の要を操る俺個人の力を調べる事だな」

「伊達にエンキトではない様で、私が請けた指令の大方はそれではないです」

「…ならば！」

俺は高く跳躍し天井を蹴ってリュークへ拳を振り下ろした。

激しい衝撃音と共に打ち碎かれた床のタイルが飛散、細かな粉塵となり店内に充満。

粉塵は中に居た皆を包み姿を隠した…

剣技

「中尉はこの大きな力を感じないの!？」

「何の事だ! 外は俺達以外誰もいない!!」

この女、気でも狂ったのか!？

「そんな子供騙し!」

俺はパヴチガンに組み付いたハンドレットを強引に振りほどき、左腕に装備されたライフルの銃口を至近距離で向けた。

目の前のハンドレットはシールドに身を潜めたがこの距離ならビームアサルトはシールドを貫通させる火力がある。

構わずトリガーを引いた。

しかしライフルからビームが放たれるまでのコンマ数秒、シールドが迫りライフルに接触。

厚い装甲が銃口を密着状態で塞ぐ。

「……!!」

左腕部から機体全体へ鈍い振動が伝わる。

シールドで出口を塞がれたビームが銃身を焼きライフルが暴発したのだ。

衝撃は伝わった振動以上に強かったらしく数十m程後方へ機体が飛ばされた。

「あいつ馬鹿か！？ 模擬出力でも十分に暴発する火力だぞ！！」

ライフルは失ったが機体に損傷は無し。

まだまだ戦えるが、それはシールドを失っただけのハンドレットも同様。

「もしか狙ったのか！？」

奴は瞬時にライフルを暴発させる事を思い付き、シールドに姿を隠し防御を装った。

そして発射寸前に盾を棄て急上昇、巻き添えを逃れた。

「ずる賢い頭と技術だよ！」

良い様に見れば相手はシールドを失い回避一択に絞られた。

「回避だけで乗り切ってみろ！」

勝利への僅かな希望が見えた。

以前シールド装備の機体に乗るパイロットは盾に頼る傾向があるというデータを見た事がある。

盾を失った4割以上が取る傾向は後退しながらの砲撃戦とそれには

書いてあった。

俺はモニターに映るハンドレットをロックオンしパヴチガンの頭部バルカンを放つ。

ハンドレットは当然の如くそれをスラスター全開で右横へ回避行動。

もちろん俺もこんなものが当たると思っちゃいない。

「避ける避ける！」

俺の目的は相手の回避行動そのもの。

攻撃を遮るものを失った敵は距離を取るしか手段が無いが、回避に気を取られ相手はこちらを視界から外す。

そうなればジャミングとダミー隕石やデブリの浮遊する環境で再度敵を捕捉するのは困難。

視界から外れてる今、こちらは相手の死角へ周り込み背後から接近。

サーベルの一太刀で制圧するというのが一つの戦術。

それを実行すべく近くのダミー群へ機体を隠しながらハンドレットの背後へ回る。

「戦術マニュアルつてのは読んで損の無いもんだぜ」

相手は視界から消えたパヴチガンを探し機体頭部を左右に振っている。

だが既にパヴチガンはジャミングの強い背後のデブリ群に回り込んでいるのでレーダーでも捕捉出来ない。

俺はハンドレットが俺の機体を探しに動くまで息を潜める。

やや間を置いてその時が来た。

背後から見たハンドレットは前方へ進もうとしている。

「もらった！！」

それは完全に隙を突いた攻撃だった。

失ったライフルの代わりに左腕にもサーベルを装備させペダルを一気に踏み込む。

瞬間、俺の身体は加速Gで椅子に押し付けられたが、怯まずペダルを深く踏み続けパヴチガンの両腕に装備した二本のサーベルを振り下ろす。

「……！！？」

スムーズに流れる動きのはずがパヴチガンの両腕を操るグリップは俺の腕の動きに反発し押し返してきた。

モニターにはパヴチガンの使う二本の光る剣と、もう一本。

背面を向けたままの姿でハンドレットは左腕にサーベルを装備しこちらの斬撃を頭上で受け止めていた。

「一本ならまだしも、サーベルを二本使う時の様はなってませんね」
ハンドレットからの無線。

それは明かに俺を見下した語り口だった。

ハンドレットはサーベル一本でこちらの二本のサーベルを受け止めたまま後ろ蹴りを放つ。

それは腰部へ直撃しパヴチガンは後方へ蹴り飛ばされた。

「うわっ！...」

姿勢制御し再び次の攻撃を仕掛ける。

「コイツ！」

「甘い」

右腕のサーベルで横一文字に切りつけたが、ハンドレットは軽くスラスターを吹かし後退しながら機体の上体を反らして斬撃をかわした。

流れる様な動きでハンドレットはパヴチガンの右脇へ回り込み斬撃を放つ。

「...！」

振動と共にコクピットへアラーム。

ハンドレットの模擬出力のサーベルがパヴチガンの右腕を使用不能にしたのだ。

「クッ！...」

模擬出力ビームに機体を損壊させるだけの威力は無いが、お互い模擬戦モードでそれが機体に接触するとMSのPCが実戦出力に換算し損傷ヶ所や度合いで自機の機能を自主的に制限する。

今の斬撃を右腕に受けた事で実質パヴチガンは右腕を失った事になる。

「クソッ！」

スラスターを吹かしハンドレットと距離を取り、残された左腕の武装をサーベルから背部ラッチのライフルに持ち変えビームを乱射する。

「当たれよ！！」

連射される閃光を軽々と避けながら迫り来るハンドレットに恐怖を抱いた。

「奴と俺とで何が違うと言っんだ！？」

あっという間に距離を詰められ残された左腕へ斬撃が触れる。

両腕を失ったパヴチガンは駄目押しに頭部バルカンを至近距離で放ったが当たらず、斬撃が頭部を襲った。

モニターに『バルカン使用不能』の文字が表示される。

もう反撃の手段が無い。

「実力の差かよ……」

抵抗の術を失った俺はただハンドレットから最後の一撃が放たれるのを待つ事しか出来なかった…

反応

「あゝあ…」

つい先程までオープン回線内で賑やかな歓声を上げていたメカマン達はパヴヂガンのアサルトライフルが暴発する瞬間をモニター越しに目撃すると急に静まった。

「お嬢ちゃんやってくれちゃって…」

「また仕事増える」

待機ルームのモニターが示したそれは彼らの業務内容を増やすという結果だった。

だがそれだけが彼等の盛り上がった気持ちを鎮めた訳ではない。

窮地に陥った彼女が咄嗟に相手のライフルを暴発させるという荒業を行い、且つハンドレットが軽やかな動きでそれをやったのけた事で二人の力量があまりに掛け離れ過ぎ勝負にならないと露呈したからだ。

「…お前坊主にいくら賭けた？」

「…100、所詮は犬と天女様ってか」

『月と鼈だろ』

メカマン達の消沈を耳にしディーは心の中で呟いた。

とやかくと言いたいディー本人もロビンに賭けた一人であったが、彼は外の模擬戦を冷静に見ていた。

ディーはドアにもたれながらモニターを観ていたアーノルドへ無線通信する。

「アーニーよう、どうだいこりゃ？」

「…その呼び方やめろ」

「それより嬢ちゃんの」

「異常だな」

「昔のマークの野郎みてえーな感じた」

A M B A C ステップだけを用いて回避運動を行う身体感覚。

至近距離でシールドを使い敵の視界と銃口を塞ぎ暴発させる事を思い付く思考力。

そしてその思い付きを迷い無くやってのける決断力と実行力。

彼女はこの船で一番若く経験が浅いながらもトップパイロットに必要な才能のほとんどを身につけている。

「まだ未熟でロビンみたいな直情馬鹿相手に付け込まれる危うさは有るが、化けるよ彼女」

「問題は嬢ちゃんを指導する人材だ」

「そいつはマークがやる」

「…ん？」

「おやじさんの頼みだよ」

「…なるほどな」

「何か思う所が有るのか？」

「スタンドプレイヤーを気取るあいつが自ずとやると思えない、しかし奴は無自覚だが爺の命令は比較的受け入れる」

「言うねえ」

「この面子から消去法で選べば適任だと思う。奴もそついう歳と階級になった」

「それだけじゃないだろ」

「何がだ？」

「あんたは機体を見る男だ、嬢ちゃんに足りないもんをあいつは持つてゐるって感じるんだろ？」

「まあな。機体の使い方が粗い所は似ているが、経験の違いとスタイルの違いを見ればお互い学べる所が有る」

「堅いねえ」

彼の気質をからかう言葉の後、アーノルドは深く空気を吸って重たい溜息を吐く。

何拍か沈黙の後、無線に溜息以上に重たい声が響いた。

「…気安く話し掛けるのは構わないが、俺はお前を許した覚えは無いぞ」

デューはそれを真面目顔で聴きはしたが、再びふざけた調子で「それでも俺の話相手を付き合うのは古い馴染みだからだろ？」と言葉を投げかける。

アーノルドの返事は「フンッ！」と鼻を鳴らすものだった。

「過ぎた事だろ。…！ 小僧が動いたぜ」

二人は視線をモニターに戻す。

投影されるそれはデブリ群へ姿を潜めながらハンドレットの背後へ回り込もうとするパヴチガン。

「あの馬鹿…」

「困った時に教科書通りの動きをするのは悪い癖だ」

「気付かない訳ないだろ」

背後へ回り込んだパヴチガンが両腕に装備したサーベルで切りかか

る。

そしてそれを当然の如く敵に背を向けたままサーベル1本で受け止めるハンドレット。

「はい、終わりいゝ」

ハンドレットの後ろ蹴りがパヴチガンの腰部へ直撃。

それによりパヴチガンが詰めた距離は再び離れ体勢も崩れた。

パヴチガンの姿勢制御よりも早くハンドレットは旋回し崩れた体勢を直す相手を静観している。

時間にすればコンマ3秒もない一瞬であるが、その一瞬が戦場では生死を分ける。

相手が姿勢制御している間にハンドレットはビームを撃ち込むなり切り込むなりで決着がついたにも関わらず、あえてそれを見逃しパヴチガンの反撃を待ったのだ。

「最初の体当たりの時といい、これが実戦なら坊主はもう既に3回は死んでる」

「あら！ やっぱり気付いてた！？」

「何年お前とマークの世話してきたと思ってる。あれは完全に手加減だったよ」

「それはそれは、俺達の華麗な舞を嫌と言う程観て目が肥え、さぞ

かしグルメになったので？」

「……言ってる」

「ニシシッ」と笑うディーと、それをニヒルに静観するアーノルド。周りのメカマンはハンドレットの斬撃を受け右腕使用不能になったパヴチガンの姿をモニターから観て模擬戦の終わりを察し、一方は静かに賭けに勝利した事を歓喜し。

一方は負けた悔しさ紛れに次の仕事支度を始めたり、隠し持っていたランプを楽しんでいた。

またオープン回線内はハンドレットの勝利を預言したハンナを讃える言葉をかける者、そしてそれへ自慢げに返答をする彼女の声が響いている。

そしてモニターは遂に残され腕と頭部も使用不能に追い込まれたパヴチガン映す。

「決まったな」

ハンドレットはサーベルを振り上げた。

もう瞬き程の時間で決着がつく。

……はずだった。

「……………」

皆のヘルメットの中にノイズばかりの無線が突如全回線で響いた。

「…何だこりゃ？」

「どっかのデブリが電波出してんのか？」

微かに何か聴こえた気もしくないが、この宙域はデブリがそこかしこに散乱し、それは熱や電波を発する物も多い。

船がデブリ群の近くを通るとよく起こる現状だ。

しかしモニターに映るハンドレットはそのノイズから何かを感じ取ったのか動きが止まったままだった。

デイーは疑問を抱く。

「…何故仕留めない」…

察知

「……………」

前触れも無く響いたノイズにマニピレーターを操作する左手が止まった。

『…何今の？』

音はノイズしか聴こえなかったが、その向こうに叫び声の様なものもある。

…嫌な感じがした。

振り上げたハンドレットの左腕を下ろし背後へ向く。

ノイズが何処から発せられたか解るはずもないが、何となく十時の方角へハンドレットのカメラを向けズームした。

全天モニターから観る限りデブリが浮遊する何ら変わらない風景であつたが。

頭に一つのイメージが走る。

大きな炎が突風を受け激しく揺らめき、もう一息吹きかけるだけで消えてしまうのではという…

身体から嫌な汗が吹き出るのを感じた。

思わず機体をその方角へ向かわせる。

「……？ 何故止めを刺さない！？」

パーソン中尉が私に何か話しかける。

けれども私はこの不安感の根源を探る方が重要だった。

「答える！！」

背後で何かが叫んでる。

でも今の私には聴こえない。

「……ふざけるな！！」

レーダーに映る後方の機体が急接近するのに気付いた瞬間、シートから投げ出されるかと思う程の激しい衝撃を感じた。

瞬時にパイロットスーツを固定するベルトが私の身体を締め付ける。

「武器は使えなくとも体当たりくらい出来る！ 何故止めを刺さない！！」

「……………」

「舐めるのも大概にしろ！！」

「……………クが、…少佐が」

「何だと？」

私の中で想いが膨らんでゆく。

そしてそれが破裂するかの如く溢れ出す。

ペダルを一気に踏み込む。

「うわっ！？」

スラスター全開で急加速したハンドレットのすぐ背後に居たパウチガンはスラスターの推力に吹き飛ばされた。

「マークが！！」

涙を流しながら私は彼の名を叫んでいた。

「こちらブリッジ。キショウ中尉どうしました？」

フィリアさんが私に問いかけたが、私の困惑が解かれる事はなかった。

必死に「マークが！ マークが！！」と彼の名を連呼するのが今の私に出来る精一杯の主張であつたが、それは彼女の問いかけに答えた訳でなく。

ただ他に口から出る言葉が見付からず、彼の身に何かが起きた事に動揺が収まらない混乱だった。

「…マーク？ ジュディゲル少佐がどうしました！？」

他に返す言葉が無いというのにフィリアさんは問いかけ続けた。

私の想いはもうあの遠くで激しい風に吹かれて揺らめく炎が放つ微かな光しか見えてない。

「キショウ中尉。グレンだ。マークの事はこちらで観てる。君は模擬戦という任務を片付けたまえ」

准将が私の高まった感情を鎮めようするが、この感覚は准将には解らない。

あれはとてつもなく危険な存在だ！

「行かせるか！！」

背後から殺気に満ちた何かが迫る。

超高速でハンドレットに迫るそれを咄嗟に避けた。

「ビーム！？」

そのまま振り向くと両腕が使用不能のはずのパウチガンが左腕にビームアサルトを構えこちらに迫っていた。

「何故？」

目前のパウチガンは再びビームを放った。

姿勢制御し紙一重でビームを回避したが、ハンドレットのセンサー

はそのビームから先程と違うものを感じた。

コクピット内にブザーが響きモニターは警告文を表示。

「これって… 実戦出力!？」

ビームは繰り返し放たれ、私はAMBACステップを駆使し回避する。

「当たらねえなら模擬も実弾も関係ねえ! 止めを刺さないなら俺が仕留める!!」

なるほど。

模擬モードを解除すれば擬似的に損傷規制された機体ヶ所はリセットされ、使用不可だった両腕と頭部が復活する。

模擬出力の斬撃を受けた程度では実際に四肢を切り落とす事は出来ないからこういう状況も有り得ると准将は『怒らせるな』と私に言ったのか。

甘かった!

手加減するとどうしても油断が生まれる。

「どうした撃ち返してみろ!!」

出来る訳ないでしょ!

邪魔しないで行かせて!!

「こちらブリッジ！ キシヨウ中尉！ パヴチガンは実戦出力です！ 逃げて！！」

そんな事わかってる！

「口を出すなフィリア！ 仕出かした不始末は当人が片付けるものだ」

ブリッジからの通信に准将の声が混じっていた。

そうだ…

これは私の不始末だ！

「撃ってこいよ！」

怒声が響く。

彼の怒りは再びオートに切り替えられたビームアサルトから放たれる閃光となって連続発射され続けている。

その閃光はハンドレットを砕かんとする強い邪気だ。

…それだけじゃない。

彼の意味は水溜まり投じた石の様に宇宙に波紋を描き、私へ感情の波が押し寄せる。

これが彼の力。

「撃て!!」

彼の心の叫びが私の身体に纏わり付く。

身体が強張る。

自機の模擬モードを解除すればたった一本指を動かすだけでパヴチガンを行動不能に出来るのに。

私にはそれが出来ない。

強張った身体の中で、私の心も波立つ。

『彼の処へ』と…

だが私の軍人の部分がそうさせてくれなかった。

生じた迷いは『どうしたら…』と更に身体を硬くする。

視界は狭く暗く閉ざされ、先程から鳴りっぱなしのブザーや無線の呼びかけも聴こえなくなっていく。

ただ己の心臓が全身へ血を送る音だけが知覚出来る総てとなっていく。

怖い…

あの人を失う事も。

ここで私が迷いに囚われ何も出来ずにいる事も。

強張った身体に意思を込め無理矢理に動かそうとしたが、言う事をきかない。

彼の攻撃を条件反射で避けるものの、先程の様にペダルを踏んでスラスターを吹かす事すらままならない。

狭まった僅かな視界の真正面から邪気の閃光が迫る。

「ユリお願い避けて!!」

鈍い感覚が微かにフィリアさんの呼びかけを捉えていた。

もうハンドレットは攻撃を遮る盾がない。

閃光は機体の右胸部へ直撃しコクピットに振動が伝わる。

モニター全面が眩しく輝き目を眩ませた。

「...!!? 直撃だろ! 何故墜ちない!!」

特殊装甲に助けられた。

特殊装甲の無いランドセルに当たっていればビームが燃料を発火させ機体が爆散してもおかしくなかった。

私は狭い視界と硬直した身体を必死の思いで動かし、ハンドレットの模擬モードを解除する為コンソールパネルを探った。

しかしそれを許さんばかりに衝撃。

パヴチガンが右脚部でハンドレットを蹴り飛ばしたのだ。

「そんなでたらめ!!」

何度も何度も衝撃が襲う。

それが砲撃か打撃かすら私は解らない。

しかしそれでも私の想いは遠く離れた場所へ馳せていた。

『お願い…　そこから逃げて!!』と…

対話

店内に充満した粉塵は次第に薄れ、閉ざされていた中の様相も少しずつ明かとなっていった。

最初に確認出来たのはリユークと名乗る大男の体躯。

俺の放った拳は店の床の一部を破壊し、その衝撃の凄まじさを物語ってたが。

男が無傷で立ち位置を変えている事を考えると、俺の振り下ろした拳がその身に触れるすんでで避けたらしい。

そして変わらず冷めた表情で男は俺を見詰める。

先程までカウンター席に掛けていた華織と恵利華の姿は無い。

「仮想空間の構造物でも強度は構築主の記憶に基づくので実際の構造物のそれと等しい。にも関わらずこれ程までに破壊出来るとは、最早人外の域に至る技……流石に当たれば私も即死です」

奴の賞賛に等しい考察を聞き俺は床を打ち砕く程の一撃を洞察出来るだけの余裕保ちながらそれ避けるという芸当をしたこの男の方が大したものだと感じた。

俺はゆっくりと立ち上がり広くなった視野で店内と男を見据える。

周囲は打ち砕いたタイルや足場に使い崩れ落ちた天井の残骸が散乱。

店奥のキッチンへも意識を向けたが、俺達の他に人が居る気配は感じられない。

「…よく避けたな」

「貴方が自身の動揺を私への殺意に利用した時点で避けるのは容易だった」

「なるほど。お前の言った通り此処は本当に俺の心らしい。お前を殺す事に集中したら彼女等の姿が消えた」

「ご理解いただけて幸いです。しかし私は此処で争う事を望んでいません」

「……」

「此処で私を傷付けても無意味です。多少精神を擦り減らしますが、実際に死にはしません。そのリスクがあるのは貴方だ」

知っている。

俺が軍へ入隊後、自身のニュータイプ能力の強化を希望した際の力リキュラムの一部に『精神攻撃と精神防御』を学んだ。

攻撃側は常に対象へ意識を向ける際、自身の意識体を分散させ相手の精神内へ入る。

そのため精神内で戦闘が持たれ対象者から殺害されても全意識体を失う事は無いが、対象側は自身の精神域で死亡するので再度外界との意識干渉や知覚が出来なくなる。

要するに精神攻撃を受けている側は精神内で死ぬと廃人になるが、攻める側はそうではない。

精神攻撃というものは圧倒的に攻める方が有利なのだ。

「争ってもお互い得るものが無い。私は貴方を知りたいだけです」

「もう見知っているのではないか」

指摘した言葉に男は「確かに」と軽く笑いを含めて返した。

そして「では話を本題に」と切り出す。

「私は地球連邦軍人のマーク・Y・ジュディゲル様を主ジェリコ・ヴァロル殿下の所へ案内すべく参上致しました」

「…ヴァロル」

確か『ヴァロル』という姓はサイド2のレジヌ・コロニーで国家体制を敷いた人物の一人と同じもの。

ブッホ・コンツェルンのロナ家と並び高名な家柄としても知られるが、内実はロナ家同様に高々50年程の歴史しか持たない成り上がり貴族。

「そんな大層なお方が敵である連邦軍人に用がある？」

「はい」

「何故大使でなく俺なんだ？」

「我々の元で軍の指揮を振るって頂きたいのです」

「……！？」

男が口にした冗談の様な話に俺はただ爆笑するしかなかった。

「ハッハッハッハッハッ！！」

「信じては頂けなかった様で」

「当たり前だ！ 何故その貴族様に面識も無い俺が名指して喚ばれにやなんのだ！ 俺の名がそこまで広く知れ渡る訳もない！ ハッハッハッハッハッ！！」

可笑しくて腹がよじれる程に痛い。

しかしリユークは大笑いを続ける俺の姿を見ても表情一つ変えずにただ立っていた。

「我々もただ国を興した訳ではありません。かのジオンの様に殺戮をする気もない。ですがその為に我々が諜報活動に力を入れ他のコロニーや連邦の動きを察知してる事も理解して頂きたい。故に貴方の力を知り喚びに参りました」

「飛んだ茶番だ！ 俺は根っからの連邦軍人。お前達が俺の事を何処まで調べたか知らんが余所で仕事をする気は無い！」

きつぱりと言い放ったが、それを聞いても尚リユークの表情は変わ

らない。

そしてこう呟くのであった…

「根っからのですか… 忘れましたか？ 貴方が六号と呼ばれていた場所の事も？」

「……！」

俺は吹き出す様に笑い続けていたが、そのリユークの言葉で息が詰まり笑いも忘れ彼へ視線を向ける。

…そうだ。

こいつは先程俺を六号と呼んだ。

そして俺が母から名前を賜った事も知っていた。

例えエンキトであると知られても、記録すらされてない情報を何故知ってる…

俺は戸籍上サイド1で生まれ月で育った事になっているのに…

この男は俺と何か関わりがあるのか？

リユークと名乗った目の男は俺の止まった笑いを見て口角を上げ、勿体振った様にゆっくりと口を開く。

その光景を目にする俺はこの一瞬が何分と思える程にスローな印象を受けた。

「貴方はジオンの小惑星アクシズで生まれ、幼少はアジール・コロニーで過ごした。その意味が解らない訳でもないはず…」

沈黙とも取れる長い間が流れる。

「アクシズは人の遺伝子操作研究がなされていた。ジオン独立戦争後、更なる戦火を恐れた研究者達は研究成果を手にはアジール・コロニーへ移り、本国からの援助で研究を続けた。…コロニーへ移った理由はもう一つあります」

投げかけられた言葉に俺は答える。

「人間の遺伝子操作は倫理上の問題が多く研究施設を公に出来ない」
それに対し「ようやく普段の冷静さを取り戻した様で」と俺の対応への敬意とも取れる言葉を吐く。

話は続く。

「故にジオン解体後も研究に目を付けた幾つかの独立自治政府から援助を受けアジールは生きながらえてきた」

「その独立政府の一つがレジーヌだと…」

諜報活動をしてると言ってたが、こいつの持つてる情報は危険すぎる…

「お察しが早い。そこでエンキトとして生きてきた貴方が我々の仲間ではなく敵対する連邦軍に属した事に関しては… 甚だ可笑しいと

感じますがね」

挑発と取れる言葉に思わずリュークへ駆け寄り拳を放った。

「ウツ!？」

だがリュークは拳が撃ち込まれるよりも早く左腕を伸ばし俺の首を掴む。

そして軽々と俺の身体を浮かせてみせる。

「無駄です」

締め上げられた首は解放され塞がった気管が元へ戻り滞っていた血流も再開。

思わず俺は空気を一気に吸い込んで肺へ送るがそれでも呼吸は乱れる。

奴の動きは完全に俺の隙を捉えてた。

「…お前もエンキトなのか」

「いいえ」

「…ならば化け物か」

「ただのニュータイプです」

理屈上エンキトは人間と違い身体を動かす際に脳が思考を介さずダ

イレクトに身体へ脳の命令を伝達する。

また身体能力も優れる為、エンキトの脳が“身体を動かす”という命令を実行しても約0・01秒と素早い。

しかしニュータイプは脳に干渉する能力なので、エンキトの脳が“身体を動かす”という情報を入力した瞬間察知し、いくらエンキトが速く動けてもニュータイプは対応した動きを約0・007秒でしてしまう。

どちらも理屈だがエンキトが人を超える存在に変わりなく、ニュータイプも同様。

数値での神経伝達速度は大差無い。

だがリユークは現実に証明した。

未熟なニュータイプ能力を補った程度の俺には真のニュータイプである奴を倒せないという事を…

「貴方は私に勝てないと理解しながら挑んだ、しかし私は不可解です。知能指数140代の貴方なら無茶を挑むより他の道を模索すると思いますが、何故です？」

そしてこのリユークという男はこのように俺の心すら見透かすのだ。しかしそれでも総てが見透かせるというのは彼の誇張か過信と今理解した。

俺は勝てないと解りながら挑んだ理由を述べた。

「俺は沢山の人々に返しきれない恩がある。ただそれに酬いたく、その方法が連邦であっただけだ。元より俺は軍の為に生まれたのだ、それを利用したに過ぎない。それを笑う事は俺の根幹たる活きる意味そのものを冒瀆する行為以外の何物でもない」

リユークは俺の言葉を黙って聞いていた。

佇まいを正して聞いてた訳でないが、顔に表情一つ現さずにただ聞く姿勢が彼なりの誠意と思えた。

やがてリユークは口を開く。

「そういう思いもあつての事でしたか… 私とした事が失礼を申し上げた様です」

貴族に仕える身故の礼儀正しさと感じる。

「ですが貴方からはその思いを捨て去る決意を感じます。復讐という激しい憎悪を」

「故に苦しむ事もある… だが俺の問題は俺でしか解決出来ない。例えばそれが恩を仇で返す事になるうとも仕方のない事さ」

「可哀相なお方だ」

「…なに？」

「先程も申し上げましたが、此処は貴方の深層。そこには人の理想が在る。しかし貴方は無くしたはずの過去を描いた」

「…それがどうした」

「貴方はその激しい憎悪より深い処で『大切な者を守りたい』と望んでる。その想いがこのビジョンを描いてる」

「だから何だと言う」

「亡くなった人は生き返りはしません」

それがどうした。

俺は別に神に成ってこの者達を蘇らせたいと願ってもいない。

「ふざけた話だ。心なんてものはもっと単純さ、お前が俺から憎悪を一番に感じるのならそれが真実じゃないか」

何が言いたいんだこいつ。

「貴方の精神は不安定過ぎる。想いと感情が反比例し崩壊しかねない状態です」

「お前は俺の精神科主治医のつもりか？」

男は右掌を示し「止めましょう、外が騒がしい」と諭した。

「貴方も感じるはずですよ」

「…！？」

ガタガタと地面が揺れる。

店の外へ視線を向けても景色は白く、距離感も掴めない。

目の前の男は静かに目を閉じた。

「……」

「お前が何かやってるのか？ 脅しにもならんぞ」

「違います、彼女の波動です」

「…？」

「…来ます！」

その言葉を耳にした次の瞬間、竜巻が鳴らす様な強風の轟音が背後から迫り。

身体が熱風を知覚すると、それは店ごと俺達を吹き飛ばした。

店はバラバラに分解され俺と男は真っ白い空間へ放り出される。

「凄まじい！」

「何だこれは！？」

「貴方を想う気持ちです。それが貴方の幻想と外敵である私を弾き出そうとした」

「誰の力だと言っんだ！」

「この声が聞こえませんか？ 耳を澄まして下さい。貴方をお呼んで
いる」

聞こえるのは風の轟音しかなかった。

だが耳を向け続けると轟音は何かの音が構成している様に聞こえた。

『…マーク』

確かにそう聞こえる。

「俺を呼ぶ声… キシヨウ中尉なのか！？」

「…どうやらここまですぬ」

リユークは呟くと姿が揺らぎこの空間から存在が薄れてゆく。

「待て！ まだ終わっていない！！」

「わかってます。しかし私が此処に居ては彼女が無茶を続けます。
それが片付き次第私も貴方の要望に応えましょう」

「何故だ！」

「貴方の純粋な想いに敬意を払い、その片鱗を見届けたいと思っ
たからです。続きは後ほど…」

目の前から男の姿が消えようとした瞬間、今度は俺達の所へ火炎の

竜巻が迫る。

リユークは紅蓮の渦が身を焼く寸前に姿を消し去ったが。

俺はその突風に巻き込まれ、高く遠く吹き飛ばされた…

射程距離

「ジュディゲル少佐、応答して下さい！ 応答を…」

案の定ロビンは暴走したか。

暴走したロビンをどうにか止める為にマークを呼出してるが。

肝心のマークと連絡が全く取れないのはどういう事か？

奴の機体反応は確認出来るが、いくらフィリアが呼び掛け続けても肝心のパイロットは黙り込んでいる。

先程マークがいる宙域から発信された電波も不可解だ。

奴の身に何か起きたとしても、毎回独自の判断でトラブルを解決し職務も熟すマークに限って…

遠く離れた宙域へ応答を求め続けるフィリアが私へ振り返り不安な表情を向けた。

「諦めるな！ 呼び掛け続ける…！」

混乱した状況と不安で今にも泣き出しそうな顔になりながらも、彼女は指示に従い再びマークの応答を求めた。

キショウ中尉の様子もおかしい。

彼女にとっては予期せぬ事態であつたにしろ普段の彼女なら躊躇無

くロビンの機体を行動不能にさせる。

彼女が冷静さを失うまでの事がこの宙域に起こっているのか？

「カイト！ 32番の偵察カメラの映像をブリッジのメインスクリーンに投影しろ」

「了解！」

ブリッジ正面の窓がスクリーンに切り替わりマークの居る遠く離れた宙域を映す。

「…どういう事だ？」

そこに映し出されたのはマークの乗る黒いパヴチガンがデブリの中を漂う姿だった。

だが機体に損壊は無く、各所のセンサーも機能している様に見える。

「敵ですか！？」

「…有り得ん。傷一つない」

何が起きてる…

「艦長。ビーツ大尉が艦長に繋がと…」

「解った繋げ」

ヘレンからの報告を受け、私は艦長席のデスクに設置された私専用

の通信機を操作し、通信内容をブリッジクルーの皆に聞ける様スピーカーに出力する。

「私だ。どうかしたか？」

私の呼び掛けに対し「どうもこうもねえよ大将おー！」という気安くも何処か私を責める様な口調の大声がブリッジに響き、クルーの皆は驚いて椅子の背もたれから背を瞬時に離し、背筋を真っ直ぐに伸ばして固まった。

「小僧の奴またブチ切れてるみたいだぜ。此処のメカニックの連中にやまだ半分も気付かれちゃいないが、直にバレル。外に出てるマークの野郎は？」

「私も呼び戻そうと思いい既に何度も通信を試みてる。…しかし応答が無いのだ」

「あのマークがか！？　おいおい、一体何処まで遠くに送ったんだよ」

「模擬宙域の一番外側に出した無人偵察機の所までだ。そいつが更に模擬宙域の外、約20km先にMSらしきの機影を捉えたので確認にマークをその無人機の所まで向かわせたのだ」

「って事は船から約10kmは離れてるな」

「ああ、ダミーも出しているのでミノフスキー粒子が戦闘濃度でもギリギリ通信圏内に入る距離だ」

「方角は？」

「船から見て10時」

「再度無人機の映像は見たのか？」

「もちろん確認した。奴の機体も捕捉しているが、意識を失ってるのか宇宙に漂っている…」

「そら解んねえな… まあなら俺が出撃してロビンの奴を黙らせてから接触しに向かおうか？」

なんとも軽い口調でさっぱりと言い切るこの男は本当に状況を理解してそれを言ってるのか！？

思わず「原因が解らぬ状況でお前一人向かわせる訳にいかない！」と怒鳴った。

だがデイーはそれに対しても臆す事なく「当たり前！」と私に負けず劣らずの大声で断言する。

「嬢ちゃんと小僧を宥めて小隊編成で向かう。それなら文句無いだろ？」

如何にも冷静に、この状況に相応しい判断を即座に返された。

底の知れない男と言うか。

数々の歴戦を腕っ節に任せて生き抜いてきた戦士という名の職人の境地とを感じる。

「…確かにそれが一番妥当か。ではビーツ大尉に出撃…」

ディーへ命令を出そうとした矢先「艦長！ ジュディゲル少佐から応答がありました！！」とフィリアが歓喜に等しい声で報告を伝えた。

「直ぐに回線を開け！」

私に言われるがままフィリアは素早くマークとの通信回線をオープンに切替る。

「…こちらジュディゲル機。大丈夫だ死んじやいない」

マークの声が聞こえたと共にスクリーンに映し出された黒いパヴチガンが動き出す。

「一体何があつたんだ！？」

「…細かい所までは直ぐに言葉に出来ませんが、どうやらレジーヌの連中がこちらの動きを察知してた模様…！ それより…！」

言つてマークの乗るパヴチガンは機体の近くに浮遊していたスナイパーライフルを掴み取り、即座に構えた。

「何をする気だ！？」

私はスクリーンに映るパヴチガンの行動に戸惑った。

奴は自らの母艦たるこのディープ・ヘルメの方角に銃を向けている。

「隊長職のお仕事ですよ!!」

言葉の後、13mもある巨大な金属の筒から一筋の閃光が迸る。

その一瞬、ブリッジに居た全員がスクリーンに映る黒い機体の行動に注目し静まり返っていた。

私にはマークが一体何をしているのか解らない。

間もなくして先程から繋ぎっぱなしだったディーとの回線から「ヒューー! やるねえ〜!」と声が流れ我に返る。

「何が起きたんだ… カイト!」

無人偵察機のカメラでその一部始終を観たであろうカイトへ説明を求めると、彼は途切れ途切れに「パーソン機が… 被弾しました…」と答えた。

「何だと!? スクリーンに分割投影しろ!!」

スクリーンの右半分に被弾したであろうロビンの機体が映し出される。

そこには紺色の筈のパヴチガンが、背部に鮮やかな黄色い蛍光色を纏った光景が映っていた。

「…ペイント弾」

額から頬へと冷や汗が伝った。

養子とはいえ我が息子ながら本当に突飛な事をやってくれる。

「そのスナイパーライフルの有効射程距離は精々5000mってところなのに、10km地点から標的を数秒で捕捉し一撃で仕留めるとあ流石二代目！ 恐れ入りやす」

待機ルームのディーはブリッジ回線越しにマークの声を聞き奴の無事を確認した。

そして目撃したロビンの被弾もマークの技と即理解して賛辞を贈る。

「物がそうであれ長射程のMS用実弾銃なら、距離20kmまでは自分の技量でカバー出来ますから」

勝手に弾薬をペイントに切替て出撃してるマークに流石の私も軽い苛立ちを覚えた。

こちらからしたら弾は実弾だと先入観を持つし、仲間に銃口を向けられたら戸惑いもする。

ロビンに対しての制裁と考えても標的を瞬時に捉え、尚且つ不殺で命中させる等は至難の技。

もし弾道が反れロビンの機体の推進剤に引火し撃墜や、本艦に命中でもしたらと色々と余計な事ばかり頭に過ぎるものだ。

「…マーク貴様！」

怒りを打つけようと言葉に出したが「お叱りは後で。フィリア、ロビンへの通信をブリッジ経由で繋いでくれ」と仕事を優先されてし

まった。

まあ今はそれで良い。

ペイントが命中したロビンの機体はハンドレットへの攻撃を中断し、何処から弾が飛んで来たのか辺りへ目を配っている様子。

私は待機ルームのディーへ向け「君の出番は無くなったみたいだディー」と呟いた。

するとディーに代わりマークが「まだです。先輩は俺が合図したらいつでも出撃出来る様にスタンバって下さい」と奴へ命令を出した。

「あいよ了解！」

ブツリとディーの無線が切られる音が響いた後、フィリアはマークへロビンとの通信を促す。

そしてマークはロビンへ向け話始める…

「…腹が減ったな」

本を読みながら男が呟く。

向かいにはいつの間にか店内に置かれた雑誌に目を通す黒服が座っている。

「そう言えばお昼からずっとお食事を頂いてませんでしたね？」

男に配慮し黒服は「此処って何か食事らしい物出来たりするか？」とカウンターの熊髭へ話し掛けた。

熊髭はカウンターの中で椅子に腰掛けて背もたれに寄り掛かり。

右手には文庫本、左手にはコーヒーの入ったお気に入りのマグカップを持って寛いでいる。

「パスタなら簡単な物を出しますよ」

それを聞いて男は本へ栞を挟みテーブルへ置いて「ではそれを二つ頼む」と注文。

注文を承け熊髭はマグカップを流し場に置いて立ち上がり「かしこまりました」と丁寧に応えると鍋に水を張りコンロの火に掛ける。

その様子を見届けた黒服は持っていた雑誌をテーブルの下へ降ろし、向かい側の男へ詰め寄って小声で尋ねた。

「…どうです？」

「何がだ？」

「さっき話してた“デュー”とかいう奴ですよ」

「…ああ、美化されてると言われる程に過剰な演出がされてるとは今のところ思わないな。普段のあいつと何等変わりない」

「大佐の過大とかじゃないですか…」

黒服は疑う視線を示した。

だが男はそれに対して「知らなかったのか？ 私は彼を過大評価してる」と冗談を返し軽く吹き出し笑いをする。

「確かに“デュー”という登場人物は気になる存在だが、それ以上にこの作品の年代設定が気になる」

「現代劇ではないので？」

「ああ、これは宇宙世紀0100年代以降の設定になってる」

「近未来SFと言った所ですか？」

「それにしても現実感が強過ぎる印象だ。もしかすると我々の未来は夢見るものとは程遠い進歩しかないのかもな」

続けざまの質問に男は今読んだ作品の伝えんとするメッセージを語

る。

男が読み解いたそれは目の前の黒服とお互いが今後自身の目で知覚するであろう未来の展望へ、過剰な期待はしない可きかも知れないという内容だった。

「未来に期待する程幼稚じゃありませんよ。時は寝てても過ぎるし、期待出来るのは自身の努力と巡り来るチャンスだけ」

「堅実な思考だ」

「他に何か感想はないですか？」

求められ男は「気になるのなら読んでみれば良い」とテーブルに置かれた本を黒服の前まで押し示し応えた。

しかし黒服はそれに「戦争モノはちよつと……」と苦い表情で返答する。

「軍人の端くれなのか？」

「職業柄で私情が絡みますし、私は喜劇とかの方が気が楽に読めます」

言い分を聞き男は「それも一理あるな」と示した本を引っ込める。

「自分は大佐の感想だけで十分です」

「ズボラめ」

黒服の横着を男は笑った。

男は再び話題を感想に戻す。

「他にも色々とSFらしく遺伝子操作等も取り上げてる。作中では“エンキト”という隠語を用いそれを指す様だ」

「“エンキト”？」

「確か古代の文学作品に“エンキドゥ”という神々が粘土から作り上げた野人が登場した。そこから着想を得て“エンキト”と名付けたのかも知れない」

男の博識さ加減の片鱗を垣間見、黒服は「へえー！」と感心の声を漏す。

「随分と詳しいですね！」

「そのような事を知ってたに過ぎん」

そして素朴に「何処でそんな事を学ぶのですか？」という疑問を投げかけるが。

男はただ「忘れた」の一言で片付け、思わず黒服はコケる様なそぶりをしてしまう。

「だがもし本当に古代の作品から着想を得てるのならば彼女の読書量も窺える」

「確かに！ そんな作品にまで手を伸ばし読んでは凄い！」

男達の口からは作者への賛辞の言葉が次々と出ていた。

「他にも感じる事がある」

男はこの物語を読んで一番に感じ得た想いも口にした。

「今は現実にニュータイプを超える兵士を求める時代だ。それが何とも経験に響いて痛々しくも感じるが、その様な者達が生きる上で何を求めるのか気になってしまう」

実際男達は戦場で『強化人間』と呼ばれる戦士と幾度か戦った経験がある。

そしていつしかその様な者達がどのような経緯で戦場で使い捨ての駒に成り果て。

はたまた彼等の想い抱く信念が如何様にして軍に利用されたのかと考える事がある。

ただ戦場で敵として現れただけなら標的に捉えトリガーを引く存在でしかないが。

敵味方問わず現れた彼等に自らも疑問を抱き、もしくは自身もそうならないとは限らないとまで考える様になっていた。

男が零した言葉は、それを知る兵士達の代弁に等しい。

そしてそれを今一度体感させるこの物語に身を震わせるのだ。

…だが男はこの本から目を逸らす事は考えなかった。

いや、逸らせなかったのかも知れない。

「ただ死地に赴きながら生きて帰還するだけで優秀な兵士だというのに、人の強欲はそれ以上を求めますしね」

「あの恐怖を知らないからそのような幻想を求め、実際に禁忌を犯してしまうのさ科学者は… まあこれは私の憶測の域を出ない持論だな」

「でもそういう気持ちも何となく解りますよ。TVショーや映画でも視聴する側は過度な趣向を求めるし、サスペンスと冠する作品で作中一人しか死なない内容じゃ幻滅もする。極論を言えばそういうものと変わらないと思います」

黒服の例え話を聞き男は大きく吹き出し笑いした。

「…ハッハッハッハッハ！」

その様を見た黒服は思わずうろたえ「私何か変な事言いました!？」と尋ねる。

「いいや… 何とも解りやすい御解説感謝するよ」

「適当にあしらわれた気がします…」

策に嵌めた訳ではないが、黒服はなんだか不満げな表情で下げた雑誌を持ち上げ再びその内容に視線を向けた。

「そう拗ねるな。…さて、私はお前の要望に応え感想を話したぞ。ならばお前が私の質問に答える番だ」

深く何かを含んだ言い回しだった。

それが何か察してか黒服は自身へ向け放たれた言葉だったにも関わらず、それを聞いても素知らぬ顔を決め。

変わらず雑誌に印された文字へ視線を走らせる。

「誰の命令で俺に張り付いてる…」

一見すると自由に見える男だが、実際は目前の黒服から長く監視されている。

同じ軍人の男が誰の命により自身が監督下に置かれるか疑問を抱かない筈なかった。

繰り返し問われたのだろう黒服はその話題から回避を謀る。

「だから以前から何度も申しました様に私は末端で…」

しかし今回は上手くは行かなかった。

「中尉ともあるう者が末端では隊長は中佐か大佐になる」

痛い腹を突かれた。

佐官が部隊長を務める事はあるが。

それは同時に部隊の大きさに比例する為、このような監察任務には就かない。

「お前が隊長なんだろ」

「……」

返す言葉が無いのであろう、沈黙が空間を満たしていく。

男は長く同じ姿勢をして凝り固まった身体を解す為に背筋を伸ばす。

その後、両肘をテーブルに立て手を組み、額をそれに寄せた。

「答えられないか……」

「……貴方の御身の為です」

「要らん世話だ」

「……私も理解して頂けると思ってます」

「……」

再びの沈黙。

だがそれも長くは続かなかった。

沈黙を破ったのは男だった。

「私もただ安寧としていた訳ではない。信用出来る者に調べさせた

所お前の他にコロニー内に3人、周辺宙域にも同数のMSを潜伏させているな。軟禁や警護にしては些か物騒過ぎる気がするが？」

黒服は答えない。

だが男の言葉を聞き軽く動揺したのか、雑誌の文字へ走らせていた筈の目は記されている文字の羅列する向きと逆らった動きをしていた。

話は続く。

「お前は自身の任を詳しく知らない体を装ってるが、実際はヘドが出る程その任から逃れたいと望んでる。…違うか？」

「本当に知りませんよ…」

例え黒服が男に恩を感じてようと軍務で答える事が許されてないのか。

はたまた本当に知らないのか…

「お前を此処に連れたのも意図がある」

「御自分が望んで来ているのでは？」

「確かにそうだ。だが疑問に思わないか？ 軟禁されている筈の私が何故お前達の布陣を把握出来るのかを」

はたと黒服は気付き視線を男へ戻した。

男は黒服の瞳の奥から焦りと不安の色を見出だす。

黒服は店内に視線を巡らせ、先程と変わらず鍋に火を掛けている熊髭へと至る。

「いくら私が望もうと既に私は本当の安寧は手に入る筈もないと理解している。ならば鳥かごに自ら入るのが妥当なのさ。そこで偽りの自由を謳歌していた所にお前が現れたのだよ」

これが男が仕掛けた真の策であつた。

黒服は軍の命にて男を探していた。

そして中立コロニーに潜伏している事を突き止め接触し、彼の行動総てを監察しているつもりでいた。

しかし実際は標的とされる男を餌におびき出されたに過ぎなかった。

男が監察される事を許したのも相手の出方を見る為。

今厨房に立っている熊髭は軍から完全に足を洗い切った訳ではなく、諜報員に鞍替えしたに過ぎず。

引退した元軍人を装って黒服を逆に監察していたのだ。

それに気付きもせず警護の任で男の行動に付き添い、おびき出されてしまった事に黒服は焦りの汗を額に滲ませた。

「黒い関係を持っている奴は頼りになるもんだよ」

黒服は事態の深刻さを理解し腰に備えた無線機で仲間と連絡を取ろうとした。

動作は素早かったが男がそれを察知する方が数段早かった。

「無駄だよ。此処は電波を遮断出来る様に細工が施してある」

万事休すの状況とはこの事。

3ヶ月もの間そうと気付かずただ男の傍に居たかと思うと黒服は背筋が寒くなった。

本来このような軍務に付く人員は個別に行動する為、各員と定時連絡をする決まりになっている。

しかし先の大戦は今年の1月に摂政の戦死という形で幕を閉じ、男を監督する任も最早体裁になり。

当初2時間に一回する決まりになっていた定時連絡も6時間に一回と手を省いていた。

今の様に自由に男を外出させる事も非常に甘い措置と今更の後悔をする。

完全に平和ボケだ。

「さあ私はお前が質問に答え易い様に手の内まで明かしたぞ？ 心置きなく話してみる。誰の命令か」

「……」

「話せないならホルスターに収めた銃を出すだけで構わん。銃は支給品を使う様に義務付けられるので型番で何処の所属か大まかの検討は付く。昔と変わらず本国の物か、憎きあの石ころか、またはその他か…」

畳み掛けのつもりで男は切り出した。

そして黒服も遂に重たい口を開く。

「…今直ぐにはお伝え出来ません。…これは私の個人的な私情も絡んでしまいますがお許し願いたい。どうか今暫くお時間を下さい…」
男からすると面白みのない返事だった。

「…明日までは待ってやる」

恩情だった。

彼が今現在も正規軍の一員であつたならばこの様な事は口にしなかつただろう。

だがそれを口にさせる程に男にとつても黒服は価値の有る人物だったのだ。

そうでもなければ相手を追い詰めた今、次に男が取るべき行動は黒服を力付くで拘束し拷問に掛けるのが常套なのだから。

「瑣末な事はそれぐらいにして今は空腹を満たす事が重要では？」

調理を終え二人前のパスタを乗せたトレイを持った熊髭が、テーブルへそれを置きながら提案した。

テーブルに置かれたそれは湯気と共に食欲をそそるバジルの薫りを放ち、男達に自身等がどれ程に腹を空かせていたかを再認させる。

「特製バジルソースのスパゲティー！」

「…確かにこの美味そうなパスタを前にしたら瑣末な事だな」

そう言い男はフォークを手にし、それへ麺を絡ませ一口頬張る。

「…ったく！ お前のマイペースさにはいつも翻弄されるよ」

黒服もパスタを頬張った。

「いつもいつも… こうして話を逸らして… お前のそういう所が… 意地汚くて嫌い… なんだよ…」

食べながら熊髭へ文句を垂れる黒服が何とも可笑な光景であった。

先程まで軍務の話で息の詰まる重い空気に満ちた店内だったが、今はバジルの柔らかな匂いが取って代わっている。

黒服はあつという間に平らげて空になった皿へフォークを放り出し、変わらずテーブルの隣に立つ熊髭へ視線を向けた。

「なんでだよ…」

哀愁を帯びた声色が響いた。

「なんでって、それが俺様だからだよ」

「そうじゃねえ！　なんで軍を辞められなかったんだよ！！」

戦争で脚を失い、パイロットとしてやって行けなくなった熊髭への
思いやりの言葉だったのだろうか。

そう言つて黒服は熊髭を責める。

だが熊髭はただ短く一言「俺の意思だよ」と起伏の無い口調で返し
ただけだった。

「俺は戦争しか出来ねえ。幾ら料理が出来ても、怪我で軍から出た
金で店を持てようと、俺は今でも軍人なんだよ」

熊髭の言葉は退役した軍人が一般社会に溶け込む難しさを物語るも
のだった。

幾多の死地を越え、死の淵から生還する悦びを体感してしまった者
達が一般社会に適応し、普通に生活する事は非常に難しい。

心の底で望んでいた安寧を勝ち得た筈なのに、いざそこで生きよう
なら世俗の生温さに溺れる者達は後を絶たない。

適応できなかった者達は定職にも就けず酒やドラッグに溺れ犯罪に
手を染めるか自ら命を絶つ。

それから逃れる為の措置とし、各コロニーの情勢を軍へ流す諜報員
と為る者は多く。

軍もその様な者達を広く認め、利害が一致している。

熊髭の様に軍を退役した者が諜報員になるケースは各勢力総計から見て年間で推定一万人に上る。

その内、約300人は男達が属していた軍の元兵士だと言われる。

人の命を殺める事が許される軍人にとっては戦争は一次や二次と数えるのではなく、己の一生続いた一つの戦いなのだ。

トリガーの重さは物理的な加重ではなく、人の命の重さと解く。

それを軽いと感じるか、重いと感じるかは引く人間の心次第。

それ程までに罪と認識されている殺人が公然と認められる戦争は人の心を壊す。

そして既にトリガーを引き、幾人も命を奪ってきたこの者達も相応に心が壊れているのだ。

人知れずその碎けた心を身に宿しながらひた隠しにして生きている。

一生涯癒えぬ傷を笑顔に隠しながら…

「世の中を動かしているのは神ではない、一人一人の人間だ。政治家も軍人も科学者も新聞配達のバイクに乗るのだってただの人間だ。同じ様に悩み苦しみ生きている。お前の願望をコイツに求めてもコイツはコイツでお前じゃない、お前もお前だ。コイツに代わり生きる事も出来ないだろう？　なら仕方のない事だ」

食事の手を休め男は黒服をそう諭した。

男は見抜いていた。

戦場で足を失いパイロット資格が取り消された熊髭へ、黒服は自身
が思い描く幸福の人生へ回帰出来たという展望を求めていたのだと。
だが現実はそのような甘いものではなく、その展望は幻想に過ぎない。

「…あの娘は知らないんだろ」

黒服は呟く。

「当たり前だ。言う必要すらない」

「なんでだよ！ そんなんやってたらいつか死ぬぞ！？ 何の為に
店構えてるんだよ！！ 此処がお前にとって一番欲しかったもんだ
ろうが！！」

黒服の怒声が店内に轟く。

しかしそれに答える言葉は誰も持つてはいなかった。

ただ店にはオーディオが鳴らすピアノの旋律だけが沈黙の長さを知
覚させる。

「…何を言っても無駄だ。お互いが変わらず犬で今もその任務の最
中なら、お前も自分の仕事に注意を向ける。…この話はこれでおし
まいだ」

取り直す様に男はそう口に休めていた食事を再開する。

その後、誰一人言葉を発しなかったが。

黒服の怒声の余韻、悲哀と苛立ちがこの空間に流れる時間と空気を沈黙という形で支配してしまった。

熊髭は黒服が平らげた皿をを下げカウンターの中へ戻り、流し場で食器を洗う。

その背中では古い友人へ『すまない』と語っていた…

「…叔父さん？」

カウンター奥の階段から微かに娘の声が聞こえた。

先程の怒声が彼女の部屋まで響き、心配になって降りてきてしまった様だ。

「なんでもない。くだらない事で口喧嘩しただけ」

「騒がしくして悪かったな。そんな事は気にしないで未来の大作家さんは執筆に励んでくれたまえ」

察した男は席から見えぬ階段の方へ向け言葉を掛けた。

するとバタバタと階段から足音が鳴り、カウンターの隅から娘がひよつこりと顔を覗かせ「あんまりストレス溜めない方が良いでしょう！」とふざけた顔をして舌を出すと、直ぐにまたバタバタと階段を

駆け上がる音を鳴らし二階へ去って行った。

「…聞かれてしまったかな？」

男は苦笑いを浮かべ黒服へ投げかけると、彼は「…申し訳ありません」と小さく反省の色濃い謝罪をした。

「聞かれて困る様な内容を話してた訳ではないですし、物分かりの良い娘ですから大丈夫ですよ」

皿を磨きながら熊髭が答えた。

「出来た娘だな」

「叔父に似ずに良い娘なんです」

そう熊髭は自虐を含めた彼女の賛辞を笑顔で口にした。

「…あの娘の親は？」

「もう二人とも墓中。今は父方の爺さん婆さんが保護者だが、物書きの夢反対されて俺の所へ転がり込んで来やがった」

「若いな」

「それだけ堅い頭した御家柄なんですよ。姉貴とその旦那も駆け落ちでしたしね」

熊髭の言葉を聞いて男は胸の内で呟く。

『駆け落ちか…』と。

沢山の自身の過去や想いが詰まった言葉の様だった。

過ぎった想いを振りほどき男はまたパスタを口へ運び始めた。

静かに行儀良く食すその男の姿は気品すら漂わせる。

そして完食し熊髭へ「美味かったよ」と告げる。

「粗末なもので失礼しました」

「謙遜するには美味過ぎる代物だったよ」

紙ナプキンで口を拭い男は本を手にとった。

「…もう行きましょう」

先程の言い合いで居心地が悪くなったのだろう黒服は男の帰宅を促した。

「そう急くな、まだ本の続きが気になる所だな」

男にその提案を却下され俄に不服の顔色を見せたが、男はそれを見ても黒服の愛嬌の様なものと感じ気にもしないで本を開いた…

若さ故に

「抵抗しろよ！！」

己の内から溢れ出す怒りに身を任せ機体を操りパヴチガンの鋼鉄の脚を目前の標的ハンドレットへ打ち付けた。

衝撃は自機のコクピットへも伝わり、モニターも金属がぶつかりあって発した火花を鮮明に映し出した。

「さっきの威勢はどうした！？ あんだけいい根性した挑発ほざいておきながらその様かよ！！」

無線で繰り返し呼び掛けるがキショウ中尉からの応答もなければハンドレット自体も身動き一つ見せず、それらしい反応も無い。

どういう意図で呼び掛けに応じないのかは解らないが、それは確実に俺の苛立ちを高めていく。

「すかしてんじゃねえ！！」

両脚のスラスターを前方へ吹かしハンドレットと距離を取り銃口を向ける。

「なんとか言え！！」

グリップのトリガーを引き絞りビームを連射。

放たれた細かな閃光達はハンドレットを包囲する様に迫り、幾つか

のビームは機体に触れる事なく掠めていったが、他はハンドレットの機体に直撃した。

閃光が被弾したヶ所の装甲は赤く発光しビームの熱量を物語るが、それも一時に留まり時が経つにつれて赤く発光していた装甲もハンドレットの元々の機体色オレンジに戻っていく。

パヴチガンが装備するビームアサルトの火力ではハンドレットの特殊セラミック装甲の対熱性能限界を超える被害を与えられないのだ。

「なんて装甲だクソッ！クソッ！！」

このパヴチガンの性能を持っとしても旧式のハンドレットに敵わない。

従来機を超える機動性。

小型機特有の運動性。

特殊セラミック装甲のビーム兵器に対する防御能力。

パヴチガンと違い生産コストを勘定に入れず造られた機体故、8年以上倉庫で埃を被っけていても尚、最新機に勝る性能を持っている。

しかしハンナさんがその機体に相応しいと判断した当のパイロットは黙り込んで指一本動かせられない。

ましてそのパイロットは艦長に次の新型まで任されるだ！？

「…ふざけるな！！」

俺はコンソールを操作しパウチガンの右腕にサーベル握らせハンドレットへ急接近し切り掛かる。

…だがサーベルを振り下ろす間も無くコクピットへ激しい衝撃が伝わった。

「うわっ！」

その衝撃で機体も体勢を崩しオートバランサーが緊急制動を掛ける。

「今度はなんだ!？」

ハンドレットからではない。

彼女の機体は相変わらず身動き一つせず、ただ両腕で機体の胴を隠しパウチガンからの攻撃を防ぐ体勢を保って漂っている。

モニターは機体各所のセンサーが感知した状況を図と文字で表示していた。

見ると被害は大した損傷ではなかったが、それはパウチガンが背部に被弾したという模様を伝えていた。

「…真後ろだと!？」

全天モニター越しに自機の振り上げた右腕マニピレータを見るとそこには黄色い飛沫が付着している。

「ペイント?」

直ぐさま機体を180度旋回させコンソールパネルを操作し弾道を計算。

そこは先程キショウ中尉が向かおうとした宙域と思われる場所とほぼ一致していた。

「そこまでだパーソン中尉」

強制的に開かれた無線回線がヘルメット内に声を響かせた。

「マーク・ジューディゲル…」

姿の见えない隊長の声を無線越しに聞きながら俺は彼が居ると思われる宙域へ怒りの籠った眼差しを向ける。

「ちょっと目を離れた隙にこれか？ 大概にしろロビン」

あんたまでコイツを贖するのか！？

「煽ったのはこの尼の方だ！」

俺はただ軍の規律つてもんをコイツに身を持って教えたに過ぎない！！

「そんな事はどうでもいい。シナリオ変更だよ」

なんだと！？

「お前がキショウ中尉の機体に気を取られてる間に艦は新にMSを

出撃させお前の退路を断つ、そして逃げ道を失ったお前に対して長距離射撃の一撃を与え行動不能に追い込みThe endってな。仮にも戦艦が自分達の防衛にたった一機しか出さないなんて状況はほぼ無い、お前さんの役は罠に嵌まった訳だ」

急遽出された隊長のシナリオに俺は納得いかなかった。

ただ小娘の身が危険に曝された今の状況を利用し、自分達の都合の良い様にシナリオを書き換えたとしか思えない！

「そんなの納得出来る訳ない！ コイツは一時は行動不能にまで追い詰めた敵を目前にして止めも刺さず逃亡しようとしたんです！！」

「…確かにその通りだ。だからと言ってMSを使って“可愛がり”をする必要もなからう。お前がそれに対して執る可き行動は感情に流されずに艦長からの指示を仰ぐ事ではなかったのか？」

正論だった…

尻拭い

不思議な体験から目覚め瞼を開いた俺は、視界から入る情報が先程の様に現実かどうか確証が掴めなかった。

しかし無線から繰り返し俺の名を呼ぶフィリアの声と、その背後から聴こえたグレンの緊迫した声。

そして鈍った頭が訴える頭痛と、気怠く疲弊した身体が現実だと理解させた。

俺はふとあそこで感じた風の音を思い出し、再び瞼を閉じその姿を感じようと試みながら無線に応えた。

無線から聞くグレンの声は気が急いでいたが。

精神的疲れと彼女の様子を求める己の意識で俺はそれに応える事が出来ず、ただ敵と思しき相手と遭遇した事しか伝えられなかった。

そして今の彼女の様子を感じ得た。

おかしいものだった。

一つ焦りか？

もう一つは…

「…！？」

ロビンは己の怒りに我を忘れキシヨウ中尉の乗るハンドレットを葬ろうとしていた。

緊迫した彼女等の状況に気付き俺は自機の側に漂うスナイパーライフルを拾い上げ直ぐ姿勢制御し発射する。

放たれた光は真っ直ぐの軌道を描きパウチガンのランドセルに直撃。

瞬間、鮮やかな黄色いペイントを散らせた。

俺のスナップショットをモニター越しに目撃したグレンは前置き無く急に艦へ向け放った事で怒りの言葉を吐いた。

また同じくそれを目撃したディー・ビーツ大尉は俺へ賛辞を述べた。

しかし今重要なのは目前で命のやり取りをする身内達の事態を終息させる事が先決だったので、先輩へは片手間な感じの返事をするのが限界だった。

先の事もあり先輩へ出撃の依頼をしてから今度はフィリアに頼みブリッジ経由でロビンのパウチガンへ呼び掛ける。

繋がった無線から聞こえてくるロビンの言葉は粗い。

しかし俺は以前から奴のそういう性格を知っているので、今更何か思いを抱く程に特別なものはなかった。

奴は独善的で自分の考えや行動の総てが正しいと思い込む。

今も奴は自身の信じる正義を語り己の正当性を主張するが、それすらもいつもの事。

故にチームワークを乱し、仲間を危険に曝す。

今回も同様の事を起こしたのだと理解するのに時間は掛からない。

相変わらずスコープを覗き込み機体の射撃体勢を保ちながら、奴を宥める策を練る。

出たのは模擬のシナリオ変更という安易な案だったが。

他に良い案を考える時間が惜しく、それをそのままロビンに告げる。

…もちろん奴は納得しなかった。

こっちも忙しいのに餓鬼共は人の足を引っ張るのがお得意なのだ。

後は正論を打つける他になかったが、こういうのは自分でも好きな手と思う。

だがロビンはそれを耳にすると沈黙した。

そりゃ正論に反論する言葉は単なる我が儘でしかないのだから、自身の見苦しさを相手に示す羽目になるので当たり前である。

この様な手で俺もグレンから散々やられた経験があるので奴が沈黙の中で何を思っているかは解るが、これが年長者のやり口なのだから仕方ない。

「武器に安全装置を掛け艦に戻れ。上官命令だ」

俺は手早くこの状況を解決し、先程の敵も搜索しなければならないのだ。

可能性として戦闘になる事も必然と思える。

さつさとキシヨウ中尉とロビンを退場させ、俺は俺の仕事を片付けたいのだ。

まあ許せ。

「……」

しかしロビンは俺の命令に対して応じない。

「お前の気持ちも解るが部隊長でもないお前に部下の“可愛がり”を一任させる程に俺は忙しくない」

自分でも汚い事を口にしてしていると解っている。

しかし軍という所は時に不条理だ。

「ましてお前のやった事は軍法違反だ。隊の決まりで俺や艦長は正式な会議を省略し兵士を処罰出来る。お前は既に銃殺されても致し方ない不始末をやらかした」

決まっている事を覆し上官に反抗する奴には必然と制裁を加えるという慣例がある。

暗黙にそれは“可愛がり”という隠語で呼ばれ、それを行う事が許されるのは部隊長が直属の上司。

今回の場合、キシヨウ中尉が模擬戦の標的とされたロビンに止めを刺さなかった点に関してはMS副隊長のビーツ大尉が俺が可愛がりの命令を出さない限り、部隊の誰一人彼女へ制裁を加える事が許されない。

ロビンはそれを破り勝手に彼女へ制裁を加えた事で自身も“可愛がり”の対象になったのだ。

「一応言っておくがペイントは最初の一発だけだ。次は実弾を見舞う事になる」

また軍には軍人を縛る法も設けられている。

その内に同じ軍に属する者同士が武器を用いて争う事を禁じる条文が幾つかある。

ロビンはそれすらも易々と破っている。

その場合は本来、当事者達は軍法会議にかけられ法が罰を執行するのだが。

独立隊の指揮官は軍法会議を省略出来る特権を持つので即座に罰を執行出来る。

ロビンが被弾したペイント弾はその罰をこれから俺が執行するという警告発射だ。

それが理解出来ない程に奴も馬鹿ではなかつた。

「…あんたはそうやっていつも」

小さく呟くロビンの応答が無線から聞こえた。

「正論で自身を武装して人の心を全て知った様に説教垂れる!!」

どうにも奴の反感を買ってしまったらしい。

そういう所が如何にもロビンらしいが、このまま長引かせるのも面倒だ。

「だったらさっさと撃てよ!!」

捨て台詞を吐きロビンは再びパウチガンを手ドレットへ向かわせサーベルの斬撃を放とうとする。

しかし俺が感じた限りキシウ中尉は俺とロビンが話している間に手ドレットの火器管制を模擬から実戦に切替っていた。

このまま奴が手ドレットに突っ込めば確実に殺られる。

スコープから覗き見るパウチガンの動きがとてもゆっくりに感じられた。

そしてキシウ中尉の手ドレットから放たれる恐ろしく冷たく鋭い殺気も感じた。

…仕方ない。

「強制退場して貰う！」

刹那よりも短い時を俺は何時間と思える程に緩やかに感じている。

その時の中で俺は何者よりも素早くコンソールパネルを操作しスナイパーライフルの射速を最大まで上げ、ハンドレットが放つ殺氣がパヴチガンを捉える寸前にトリガーを引き切った…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1382y/>

フィクション

2011年11月26日20時45分発行